

KH667-H15

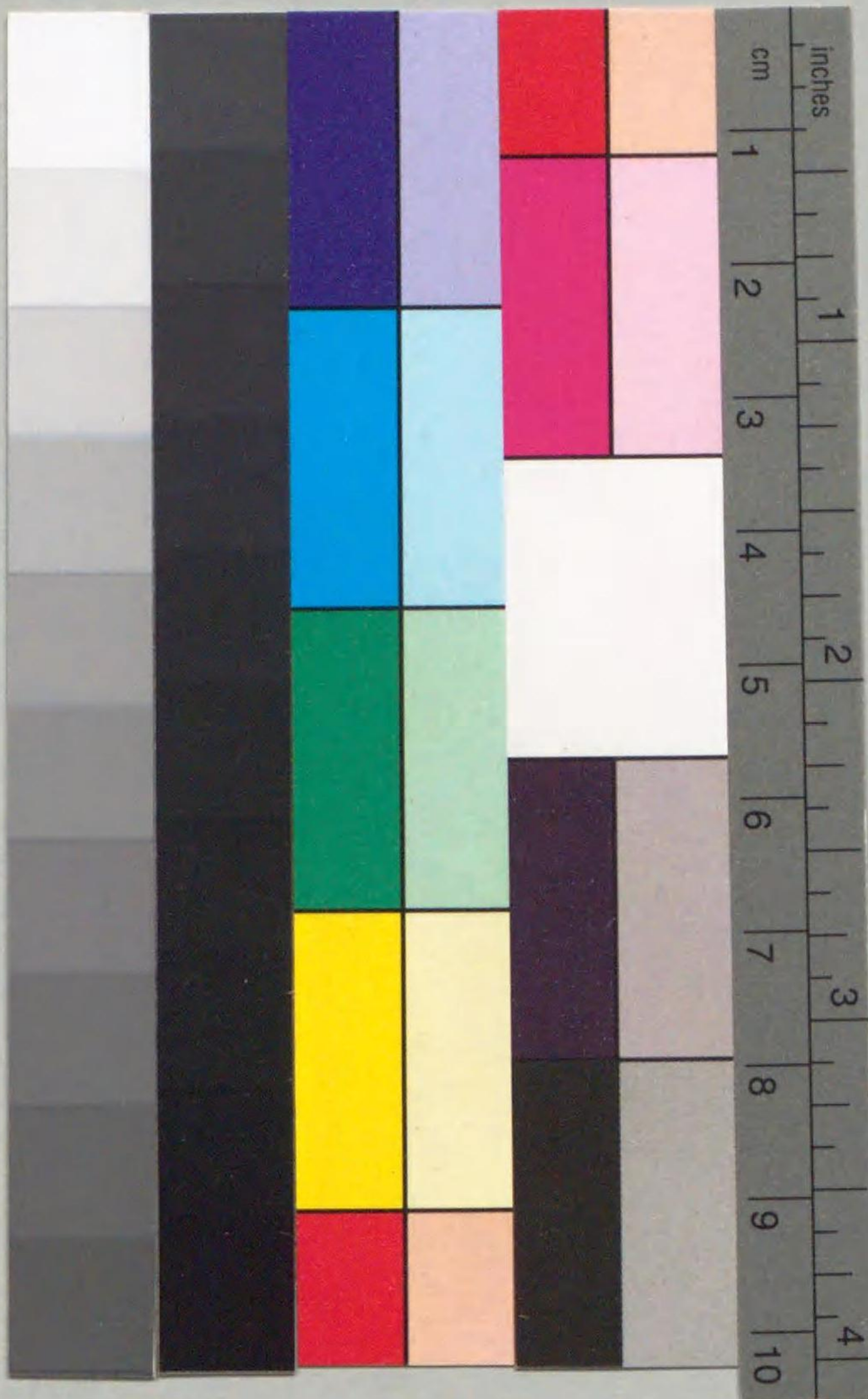


\*1200301174061\*

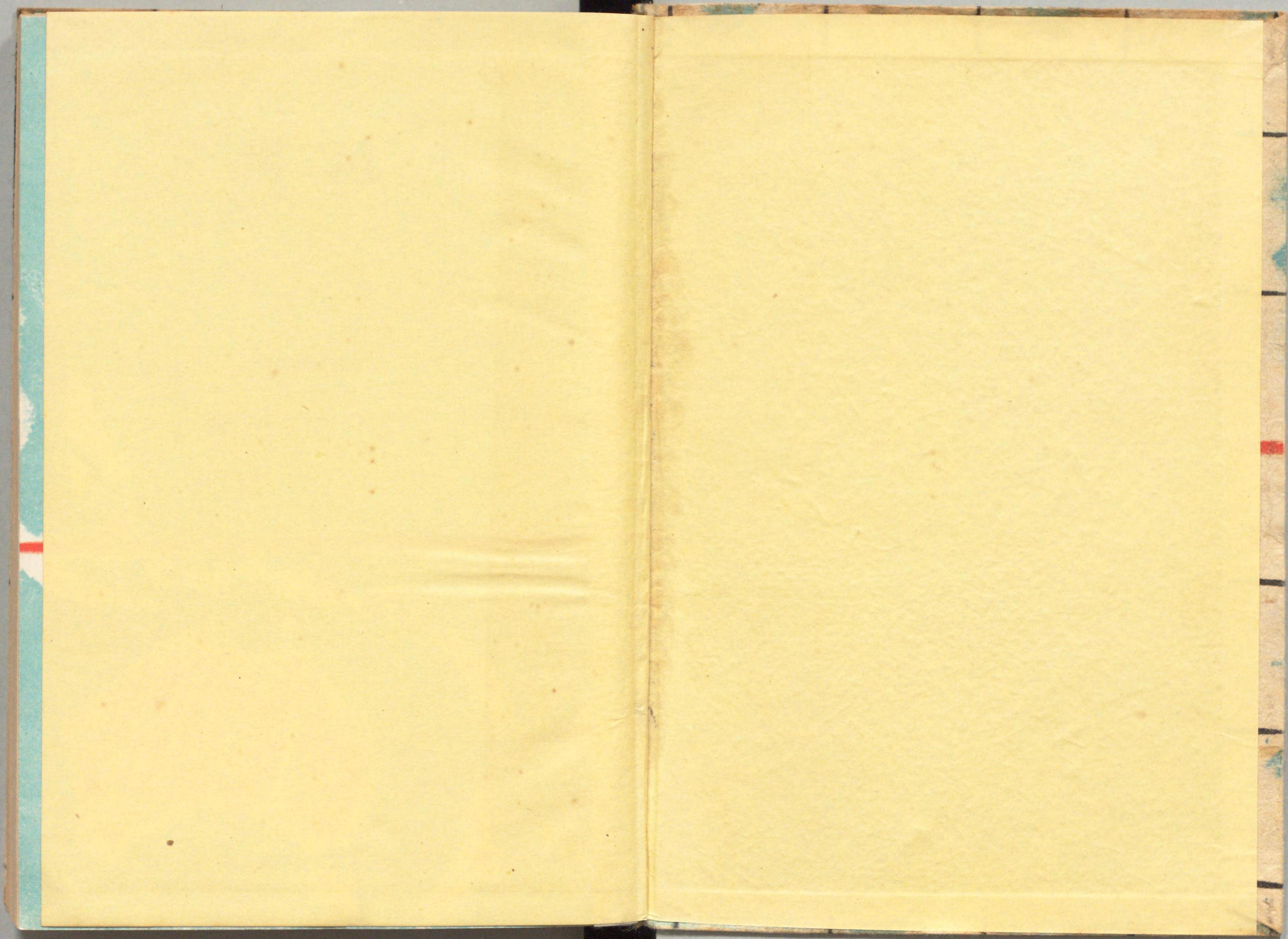
亦道南下

海軍報道班員

海野三十著









79

# 赤道南下

海軍報道班員

海野三十著



大日本雄辯會講談社版





KH667-H15



I種  
W



## 序

壯烈なる特別攻撃隊の挺身、凄壯なる海鷲の自爆、壯絶なる大海戦の情況、或は果敢なる陸戦隊の活躍等に就いては、既に事巨細となく銃後に報道されてゐる。

1 序

然しながら、我が海軍部隊の活躍は、單にこれ等華々しい敵前にのみあるのではない。勝利の陰には不斷の索敵行動に、通商破壊に、沿岸封鎖に、ゲリラ戦完封に、輸送船團護送に、終始黙々として地味な任務に服しつゝある海軍部隊の勞苦があることを忘れてはならない。而もこの事は國民に傳へられること少く、これに對する一般の認識も未だ十分ならざるものあるかの如



くに感ぜられる。

本書は、この戦捷の陰にあつて、我が海軍部隊が、如何なる任務を果しつゝあるか、如何なる辛苦を忍びつゝあるか、酷烈百三十度の赤道直下、不自由なる艦内生活に堪へつゝ、如何に敵艦艇を索めて縦横に馳驅してゐるか、絶えず脾肉の嘆を洩らしつゝ、颶風狂濤を衝いて間斷なき訓練と哨戒とを續けつゝあるか、それ等の消息が眞に潑刺と活寫されてゐる。而もその間、一艦一家族を主義とする我が艦上生活の和氣藹々たる情景を點綴し、思はず微笑を禁じ得ないものがある。

著者は東大亞戦争勃發するや、海軍報道班員として勇躍軍に従ひ、艦内に起居して具さに將士の勞苦を見聞せる人、その明暢な筆力と豐贍な詩情とは明敏なる觀察と相俟つてこれ等部隊の行動を描いて餘蘊がない。所謂凄烈な戦争文學とは異り、明朗にして興趣深き獨特の戦記文學を本書によつて玩味

し得ることは、洵に欣快の至りである。

茲に所懐の一端を記して、序に代へる。

昭和十七年十一月

大本營海軍報道部課長

海軍大佐 平 出 英 夫



目次

〔本文及挿繪海軍省檢閱濟〕

基地にて……………二

乗組員見習……………三

警報……………三

出撃……………五

戦況電報……………八

歸投……………一三

新作戦近し……………一六

珊瑚海を覗く……………一六

制海完し……………一九

ソロモン掃蕩……………二四

警戒碇泊……………二七

制壓巡航……………二九

退艦の日……………三九



赤道南下

海軍報道班員 海野十三

裝幀及挿繪 脇田和



## 基地にて

(11)

庭の方から、涼しい風が、この座敷へ吹き込んでくる。

扇芭蕉の葉が——あの巨人が手をひるげたやうな扇芭蕉の葉が、廂の向ふで、たえずさらさら〜と鳴つてゐる。

『惜しいね、銀が一丁手にありさへすれば、敵の王様は轟沈確實だがね。』

将棋盤を距てて、私の前では記者の南部君が、毛脛をびしや〜叩いて口惜しがつてゐる。

さつきからずるぶん念の入つた大長考である。結論はついてゐるのに、なほ諦め切れないところだ、それ、いとしい戦友同志の合戦、どつちが勝つか負けるか、こつちが負ければ相手に無性に嬉しがられる。それが癢だ〜とあつて、なか〜諦められない。

『え〜と、こゝから金打ちといつても……あ〜やつぱり詰ない。』

南部記者は、いつになつても同じことをやつてゐる。

私は、盤から目を放して、庭の方を見た。

薄つぺらな板を張つた縁側には、まだ熟れない眞青な色のパイナップルが二つ轉がつてゐる。坊主枕ほどもある大きいやつだつた。

これは、二三日前この旅館の裏を開墾するとしてパイナップル林を伐り開いたとき、下に落ちたのを、今将棋で呻つてゐる南部記者が拾つてきたのだつた。そのとき彼は、その大きいパイナップルを三つも抱へ込んで、縁側から上つてきたが、座敷へ上るなり、大きい聲で、

(おうエルマン、パイナップルを切るから大きい庖丁を持つてこい。)  
と宿のボーイの名を呼んでいひつけた。

エルマンは、艶のあるチョコレート色の膚を持つた溫和しい青年島民だつた。漆黒の頭髪をオールバックになでつけ、白いスポーツ襦袢から筋肉の隆々たる肩を露はに見せてゐる。そして下には眞白な幅の広いパンツをきちんとはいてゐる。

(このパイナップルは、まだ喰べられない。)

若きエルマンは、庖丁を持つて來たが、さういつた。



(なかに、喰べられないことがあるものか。どれ、庖丁を貸してくれ。)  
 といつて、果實に飢切つてゐる南部記者は、庖丁を手に取直して、一番大きいパイパイをざく  
 りとやつた。

(なるほど、こいつはまだ早いや。あゝ損をした。)

(……………)

エルマンは、無表情で、庖丁を縁側から拾ひ上げて臺所へ行きかける。

(おうボーイ。いつになつたら喰へるかね。)

(三日のちか四日のちだね。)

(明日喰べられるやうな方法はないか。)

南部記者は無理なことをいふ。

(さうだね。縁側へ出しておけば早く喰べられる。黄色くならないと駄目だ。)

(あゝさうか。ぢやあ、こゝへ並べて置くか。)

といふわけで、縁側にあのとほり残りの二つのパイパイが並んでゐるわけだつた。

それ以來、彼は二時間置きぐらゐに、そはくと縁側へやつて來ては、パイパイを手にとつて、

裏表をひつくりかへして見るのだつた。だが、そのパイパイは、いつまで経つてもなか／＼黄色  
 くならなかつた。

今も二つのパイパイは、尻を南部記者の方に向け、なか／＼黄色くなつてやらないぞ、と意地  
 悪く構へてゐるやうに見えた。私はふとをかしくなつて、目をパイパイから放すと、南部記者の  
 方へ移した。

彼は、火の消えた莢を指に挟んだまゝ、むつかしい顔でまだ考へ込んでゐる。  
 そのとき玄關にどや／＼と足音がして、私たちを呼ぶ聲がした。

(二)

『おう、みんなゐるか。海野さん、南部くん。』

玄關を上つて廊下がどん／＼響く。叩きつけるやうな太い聲の主は、ニュース・カメラマンの  
 田方君だ。

それに甲高い別の聲がおつかぶさつて、

『やあ、またへボ将棋で對戦中か。』



と、これは寫眞班の蘆田君。

私と南部君は、盤面に張りつけられたやうになつて、うゝと生返辭を發したばかり。

『おい／＼、センセにトノサマ。將棋なんか楽しんでゐる場合ぢやないぜ。』

と田方君は、得意の嚇かし口調。センセは私の渾名、トノサマは南部君の渾名である。

『皇國の興廢此の一戦に在り。ちよつと靜かにしてをらうぞ。』

とトノサマが、横に拂ふ。

『その、此の一戦に在りだよ。おれたち第一班四名は、直ちに〇戦隊へ乗れといふ命令だ。』

田方君の聲に、さすがの私と南部君も、盤面から目を放した。

『直ちに〇戦隊へ乗れつてか。』

『〇戦隊といふと軍艦〇〇のクラスぢやないか。作戦の方面は、どこかな。』

と、私たちは問ひかへしながら田方君と蘆田君の顔を見上げたが、愕いたことに二人とも、ちやんと背中にリュックサックを負ひ、出發の支度を整へて立つてゐるのだつた。

『おう、早く支度をしなよ。司令部の〇〇參謀は、即時乗組めといそいでゐたぞ。』  
溫和しくて慌てたことのない蘆田君が、いやに私たちを急がせる。



私たちは目を見合はせた。そして號令をかけたやうに立上つた。

浴衣を脱ぐ間も遅しと足で蹴とばす。

越中禪の上に縮みの襯衣の上だけをひつかぶり、その上につんつるてんの防暑服をつけ、白い半靴下をはくと、それでもう服装は整つた。

防暑服の左腕には赤地に白ぬきの派手な腕章、その文字は『海軍報道班員』とある。この腕章をつけて、どん／＼第一線へ出ていくのが、私たち『海軍報道班員』の誇りであつた。

私のリュックは、部屋の隅つこに轉がつてゐる。リュックの口をあけて、浴衣をく



る／＼と巻いて入れる。齒磨、楊枝、石鹼函、タオルを大急ぎで放り込む。廂の下に吊つて乾かして置いた越中禪を取り込み、これも丸めて投げ込む。そこでリュツクの口をしめる。

壁にかけてあつた水筒を左肩にかけ、同じく寫真機を右肩にかける。同じく白いヘルメツトを阿彌陀に被る。

『これは駄目だ。もう詰んでゐるよ。』

と頓狂な田方君の聲。

ふりかへると、私たちに替つていつの間にか田方君と蘆田君が將棋盤を挟んで對峙してゐる。

『おれもね、どうもへんだなあと思つてゐたんだ。この歩を桂馬で取つて必至だらう。やつぱり詰んでゐるんだ。』

『なんだ、つまらねえ。』

『つまらねえが、詰んでゐるんだ。』

出勤の準備勇ましく乗り込んできたお二人さんは、寸暇を利用して、私たちのさしかけの將棋をつぶして樂しむと思つたらしいが、拍子抜けのいで汗ににじんだ駒を盤上に放り出した。

『さあ、支度はいゝよ。』

私はいつた。

『おう、南部君。何をしてゐるんだ。』

田方君が、例の太い聲をたゞきつける。

『うん、ちよつと迷つとる……』

と南部君が縁側のところで、うしろ向きにそは／＼してゐる。うしろからのぞきこむと、先生しきりに青いパイヤをなでてゐる。

(11)

『おイトノサマ。何をしてゐるんだね。早く行かうぜ。』

南部記者を急がせる田方君だ。

9 地 基  
カメラマンの田方君は、一名カアチャンといふ紳名がある。カアチャンといふ名の起りは、同君がわれ／＼坊やたちの立居振舞にあきたらず、盛んに指導してくれるところから来る。同君は、だらしないことを極めて嫌悪する。いろ／＼氣をつけてわれ／＼をしつけてくれるところは、すべて尤もなことばかり。その上いつの間にか食器を洗つてくれたり、掃除をしてくれた



り、ふきんをこしらへたり、コーヒーを入れたり、下男を雇つてきたり、中々まめである。そこでカアチャンの異名があるわけであるが、われ／＼がカアチャンのいふとほりにしてさへるれば、われ／＼は行儀正しい坊やとなるわけであり、それから生活の上に、思ひがけないほどのさまさまの便宜を得、間違ひは絶対に起らない。びし／＼やられるところまでカアチャンである。

カアチャン田方君がゐるお蔭でわれ／＼は、十分安心して戦地で暮すことが出来た。ときには青ひげの濃いこのカアチャンに甘えることさへあつた。伊勢は津で持ち、われ／＼海軍報道班員はカアチャン田方君で持つてゐるといつても過言ではない。全くの話が、海軍部隊の夥しい人員の中に、ちよつぱり交つてゐるわれら海軍報道班員は、田方君のやうな世話好きで、よくしつけをする人がゐてくれたお蔭で幸ひにも途方に暮れずに済んだといつても過言でない。全く、天道人を殺さずの譬である。よくしたものだ。

パイヤを持つて縁側をうろ／＼する南部記者の如きは、カアチャンに云はせると、もつとも手のかゝる坊やであつたのである。

トノサマ南部君は、眼をカアチャンの方へぎよろつとうごかして、

『カアチャン、ちよつと待つてくれよ。僕はこのパイヤとの關係を清算していかないことに

は、死んでも死に切れないんだ。』

と、大袈裟なことをいふ。

『なんだ、今喰べるのか。』

『喰べて行きたいんだが、こいつどうもまだ熱れが若いらしい。』

『ぢやあ、持つて行けよ。』

『持つて行けといつても、こいつは大きすぎて、とてもカバンの中に入りやしない。』

『ぢやあ諦めて、置いて行けよ。』

『さう簡単に諦められないよ。一ヶ月ぶりに思ひが叶つて、やつと手に入つたパイヤなんだ。さうあつさりいふな。』

『どつちかに早く決めろ。艦隊が出港してしまつたら大變だぞ。』

『うーん、つら。』

南部記者は、パイヤを両手で持つて、もぢ／＼してゐたが、遂に意を決したらしく、

『エルマン。』

と、島民ボーイの名を呼んだ。



エルマンは臺所からとんで来た。

『おゝエルマン。このパイパイはお前にやるから、うまくなつたところで喰べる。』  
『ありがたう。』

『その代りだ、喰べた後で、どの位うまかつたか、僕のところへ手紙で知らせてくれ。間違ひなくやるんだぞ。』

エルマンは、パイパイを受取つて、目をばち／＼してゐる。

『おい忘れるな。手紙で知らせろ。でないと、僕は死んでも死に切れない。』

『もうそれでいゝだらう。』

と、田方君がいへば、南部記者は、うなづいてカバンを手にとつた。

『行かう、もう心残りなしだ。』

南部記者が先頭に立つて廊下を歩き出す。彼が心残りなしになつたので、私たちも共に心残りなしだ。かうして四名の海軍報道班員は、宿を出た。

(四)

私たち四名は、それから間もなく、棧橋から小艇にのり、第〇戦隊の軍艦〇隻が碇泊してゐる泊地へと急いだ。

『おい、見えるよ。あれだ、あれだ。』

座席から伸び上つてゐた田方君がいふ。

私も見たいと思つたが、何分にも重いリュックサックを背にしてゐることゆゑ、はげしく動揺してゐる艇の中ではどうにもならない。私が力なしであることについては、いつも大歎きだ。私が、へんな顔をしてもがいてゐると、身體は小さいが、それに似合はぬ大力を持つてゐる寫眞班の蘆田君が見かねて、リュックサックの片肩を外してくれた。それでやうやく私は座席を立

上つて、カンバスの隙間から外を覗くことができた。

(おゝ、たしかにあれだ！)

軍艦帖でよく知つてゐる。二千六百年の觀艦式でも拜觀したことがある。今にも走り出しさうな形のくろがねの浮城だ。その同じ艦型のものが、づら／＼と沖合に並んで碇泊してゐるではないか。一眼見ただけで、全身の筋肉が一せいに引緊る。いはんや、これからあの軍艦にのつて、太平洋の真中で戦闘するのだと思ふと、私は乗り込まぬ先から武者ぶるひを禁じ得なかつた。



『海野さん、あのクラスの軍艦は何トンありましたかね。』  
と、私の横の南部記者は、もう仕事にとりかゝる。

『ほう、そんなですか。主砲は何インチで何門ですかね。』

南部記者は、私が答へるたびに丹念に手帳に書き込む。そんなことは、あの艦に乗り込めば、もつと正確なことが分るのであるが、それを待つてゐられないのが記者たる者の性分だつた。

小艇は、旗艦〇〇の舷梯の下についた。

私は、急ぎ重いリュックサックを背中に負つて、仲間にはげまされながら、小艇の甲板に出た。

『海野さん、氣をつけて……』

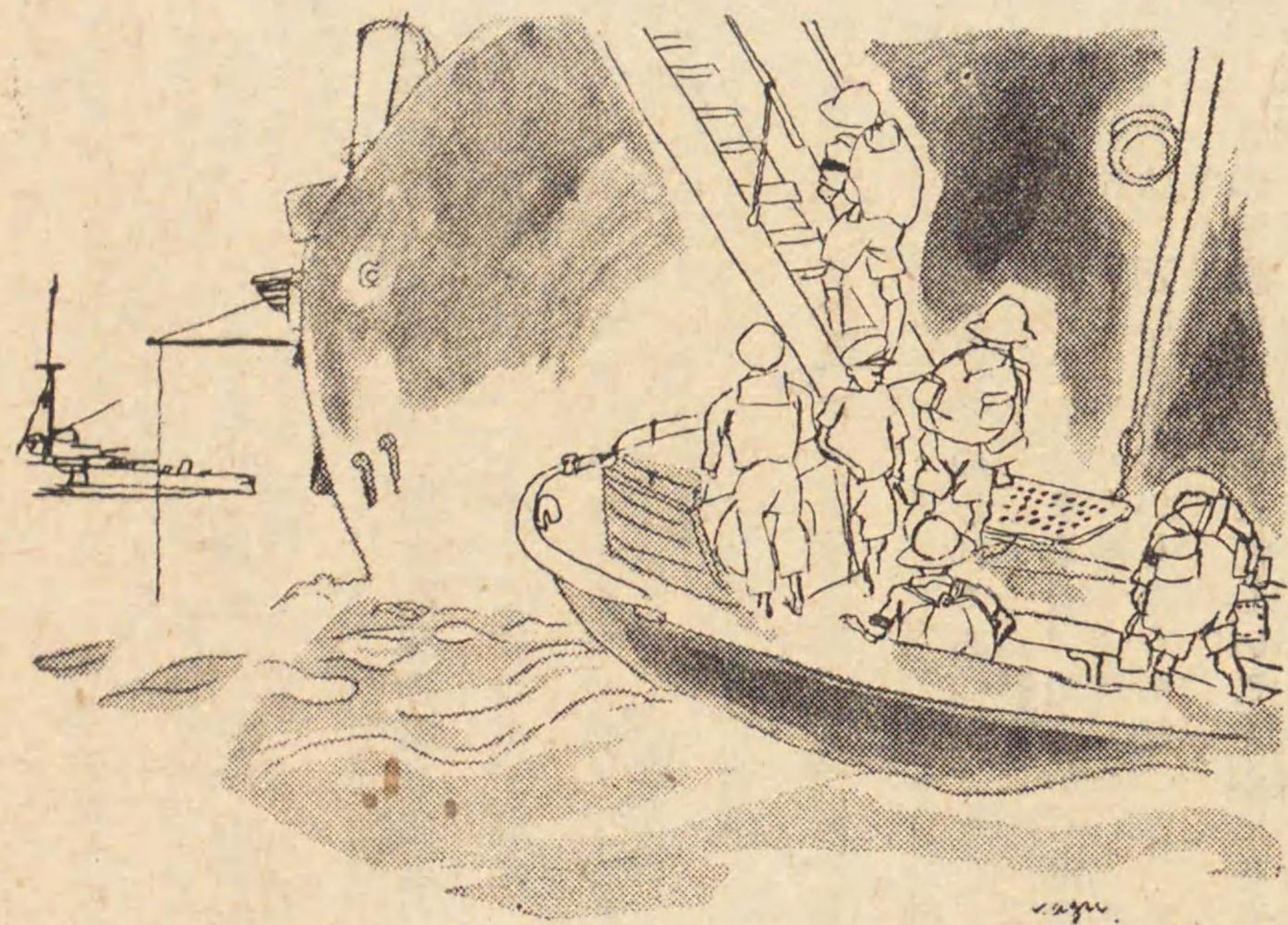
カアチャン田方君の注意が飛ぶ。田方君は私を前に出してくれる。小艇はひどく揺れてゐる。

さつきまで走つてゐるときはさうでなかつたが、艦の腹に着くと、波が艦の腹に當つて反射してくるから、小さい小艇は二倍以上ぐらゝと揺れる。

『……先に舷梯を握つて、それから跳び移れ。』

誰かが荒つぽい聲で注意してくれる。私たちの仲間ではない。水兵さんであつたらう。

『えいやッ。』



私は舷梯の下の格子板のうへに跳び移つた。背中の荷の重味で、ふら／＼とよろめくのを、やうやく力一杯にロープを握つて身體を支へる。

こんなことを書いたら、讀者は、なんと  
いふ情けない班員だと嗤ふであらう。だ  
がかうした小艇と艦との移乗は、中々むつ  
かしい技術なのである。餘程訓練した後で  
ないと、ひらりと乗り移るなんてことは出  
來ない——と、これは後で士官から聞いた  
話であつた。とにかくそのときは、そんな  
むつかしいものとは知らないから、われな  
がらだらしな自分の動作を情けなく思つ  
て舷梯の下で赤くなつたり青くなつたりで



あつた。

とこ／＼と舷梯げんていをよぢのぼる。

のぼり切つたところに『副直將校ふくちよくしやうかう』の腕章をつけた士官が立つてゐる。ふら／＼とする足を踏みしめて、

『艦隊命令により、第〇戦隊附報道班員四名、到着いたしました。』

と、班長役の私は、しやちこばつて云つた。これは途中小艇の中で、どういほうかと考へながらきた文句であつた。さあそれでうまく先方に通じるかどうか。何しろ、こんな立派な軍艦は始めてだから、私は大心配だ。

(五)

上甲板は、見事に清められてあつた。そして私たちの最もびつくりしたのは、たいへんに人が多いことだつた。それはまるで、田舎ひなから都會の市場に來たやうな感がした。防暑服に防暑帽の水兵たちは、互ひにぶつかりさうになつて、たえず動きまはつてゐた。かうして港に碇泊ていぱくしてゐても、この軍艦にはうんと忙しむことがあるらしい。

副直將校が、私たちの方へ戻つて來た。そのうしろには、『當直將校』と記した腕章をつけた大尉がついてゐた。

『報道班員の方、こつちへ來てください。荷物は、そのへんに置いておかれるやうに。』

と、當直將校は、きび／＼した聲で、舷門附近げんもんふじんを指した。

私たちは、荷物や帽子を一ヶ所に集め、それから當直將校の姿を追つた。この雑沓ざつたふの中に當直將校を見失つて四人の迷兒ができたらいへんである——といふ氣がした。

その當直將校は、すぐそばに立つてゐた。そして別の士官と話をしてゐたが、その士官は肯いうなづて、すぐ私たちの方へやつて來た。防暑服に、士官用の戦闘帽をかぶり白い靴下に黒い短靴たんぐつといふ恰好である。

『やあ、よく來られましたね。』

と、その士官は、思ひがけないやさしい聲で私たちに聲をかけてくれた。私はそれを聞いた途端たんたんにうれしくなつて、お辭儀をした。その士官は、身體つきがどこか上野公園の西郷さんに似てゐるところがあつた。太い眉まゆ、目の大きいところなど、いよ／＼西郷隆盛であつた。

『私は副長です。さあ皆さん、それへお掛け下さる。』



『はつ。』

副長といへば、副艦長のことだ。軍艦内のあらゆる軍務庶務は、副長によつてきちんと處置される。軍艦を家にたとへると、副長は主婦のやうなものだ。

と、これは私の常識にあつたのであるが、その私が、暫くしてからこの副長を『副官』と呼び誤つて、後になつてひとりで赭くなつたことである。『副官』は副長とは別ものである。司令官の下にゐてその用をつとめるのが副官だ。

私たちは、折疊式の甲板椅子に腰を下した。椅子は甲板の或る場所に圓陣をつくつてゐて、他の士官たちも坐つてゐた。襟章を見るとえらい人達ばかりだ。私はまごつかざるを得なかつた。一々挨拶をするにしても中々骨が折れる。骨が折れることはいゝとしても、一々顔と名前とを覚えるのはたいへんだ。私は次々に挨拶をし士官たちの名乗りを聞いたが、聞いた後ですぐ分らなくなつてしまつた。

艦長が出て來られた。艦長だけはよく覚えることができた。極めて血色のいゝ、そして恰幅のりつばな大和尚といつた感じだ。尤も口髭を生やしてゐる和尚さんはないが……。

とにかく私は、多人數の顔を至急覚えてしまはねばならぬといふ大仕事にぶつかつて大いに面

喰らつた擧句、遂に窮餘の一策をひねりだした。それは甚だ失禮であるけれど、お目に懸つた士官たちの顔を既に私の記憶にある何者かの顔に結びつけることだつた。たとへば、某參謀は、某誌の編輯者「君」に似てゐるとか、また○隊長は歌麿の繪に在る若衆に似てゐるとか、又或る士官はうちのお隣の坊やに似てゐるとかといふ風に……この方法は、中々有効であつた。

『ぢやあ、皆さん、これから司令官のところへ参りませう。どうぞこちらへ……』

U參謀がさういつた。私たちは、この參謀の下に屬して仕事をする事となつた。

(六)

司令官に挨拶をすませてから、私たち四名の報道班員は、再びU參謀につれられて、上甲板の椅子のところへ戻つてきた。

『まあお掛け下さう。』

と、丁寧なU參謀は椅子をすゝめてくれる。

『そこで皆さん方の乗られる軍艦のことですが、戦争中のことでもあり、人員過剰で部屋が極度に不足してゐますので、一人づつ別々に乗つてもらひます。』



尤もなことである。元來わが海軍では、戦闘第一主義で、居住は第二どころか、第九か第十ぐらゐに下げであるから、不斷から居住は至つて窮屈である。これがアメリカやイギリスの軍艦だと、居住が第一に考へられてゐるから、割合に居心地はよく、その代りにこんどの戦争で天下に知れ互つたやうに甚だよわい。わが軍艦に於ては、まづ大砲を据ゑるところ、魚雷をうち出すところ、測距するところ、照準するところなどと、兵器の置き場を先に決め、その後に残つた僅かばかりの隙間を利用してそこに士官の寢室として小部屋を作り、水兵の居住區を決定するのである。だから後に決められた私の部屋などは、C隊長と相部屋である上、部屋はいびつであつた。しかも普通のいびつではなく立體的にいびつだ。

立體的にいびつといふわけは、部屋の壁まで曲つてゐるのである。そこは舷側の外板である。寫真で見てもわかるとほり、ぐつと曲つて曲面をなしてゐる。部屋の中には居住には關係のないビームやパイプが通つてゐる。床の下にも何か匍つてゐて机に向つて足を伸ばすこともできないといふ有様で、ベッドの如きは、鐵道の三等寢臺をすこしひろくした位だ。こんな窮屈な居住で辛抱してゐるから、わが海軍將士はつよいのである。『贅澤は敵だ』といふのは、何も銃後の生活に限つたことではない。

U參謀から命令が私たちに傳へられた結果、私はこのまゝ旗艦〇〇に停ることとなり、他の三名はそれ〴〵別の軍艦に乗ることとなつた。

同じ〇戦隊の中とはいへ、今まで一緒に來た班員が別々に別れなければならぬ時がやつてきたのだ。

『さあ、本艦製のラムネを一つ……』

と副長からすゝめられるコップを手にとって、私たちはその好意を謝すると共に、それを利用して四名の別れの乾盃とした。

そのうちに戦闘が始るだらう。今は何事もなくかうして〇隻揃つてゐるが、いつどの軍艦が沈むかも知れない。そのときは、このラムネの乾盃がお別れだ。コップをあげて、記者の南部君、寫眞班の蘆田君、カメラマンの田方君の顔を見わたすと、みんな感慨無量といふ顔附で、じつと私の顔を見つめる。

『元氣で行かうぜ。』

『軍艦に乗つたら、海野さんと毎日將棋がやれると思つたが、さうもいなくなつたね。』  
若い南部君が残念さうにいふ。



『そんなにやりたかつたら、手旗信號でやれよ。どうせわれ／＼の軍艦は一緒につながっていくんだから。』

と、カアチャン田方君はひやかす。

蘆田君は、だまつてゐる。

各艦へ信號をしたので、やがて各艦からそれ／＼報道班員の迎へに小艇がやつて来て、舷門から傳令された。そしてひとり／＼荷物を持つて退艦していった。小艇から上を向いてこつちに振る帽子も、すぐ遠くなつて、遂に私はひとりぼつちとなつた。

『從兵、その荷物をC隊長の部屋へ持つて行け。』

と副長がしきりと世話をやいてくれる傍で、私は今日から『軍艦〇〇日記』といふものをつけようと決心した。

## 乗組員見習

(1)

〇月〇日

昨夜は睡眠劑を嚥んでベッドに入つたのであるが、どういふわけか、遂に眠られず、あつちへ寝がへり、こつちへ寝がへりをうつてゐるうちに室外に號令が聞え、だん／＼賑やかになつた。朝となつたらしく。

さて、いつ起きてよいのやら分らなくて、ベッドに寝たまゝ當惑してゐる。私は上のベッド、下のベッドにはC隊長が寝てござる。とにかく部屋の先任であるC隊長より前に起きては失禮だと思ひ頑張つてゐた。

その隊長は午前五時半に起きて洗面を始められた。その終つたところで、私も上の段から梯子を傳はつて下りて、朝の挨拶をした。



『やあ先生。ゆうべはどうでした。おやすみになれなかつたでせうが。』  
と、隊長は呉方面くれほうめんのなまりで慰めてくれる。

『はあ、どうも神経の細い者は困ります。よく眠れませんでした。』

『さうでせうが。本艦は手荒く暑うございますからな。私みたいに馴れてゐるものでも、眠れぬ  
ことがありますからな。さあこの洗面器を使つて、顔をお洗ひなさい。』

隊長は非常に親切だ。汽罐を預かつてゐると聞いた。相當の年配である。私よりずっと上だ。  
おつむの上部が薄くて、皮膚ちひだが見えてゐる。帽子を被ると、艦長か司令長官のやうだ。たいへん  
背が高く、しかも肉附もゆたかで、日頃の健康がしのばれる。

洗面器はベッドの横についてゐて氣象臺きしやうたいなどにある標準時計の函といった感じだ。引張ると洗  
面器が出てくる。上には水槽があり、下には汚水受けがある。たいへん小ぢんまりとした便利な  
もの。

洗ひながら感心をしてゐると、出入口に大きな聲がした。

『C隊長、食事よろしい。』

隊長はわかつたが『食事よろしい。』といふ言葉は始めてであるから、始めは何のことやら分り

かねた。

『食事です。士官室へ行きませう。』

私は周章あわてて顔をふいた。そして昨日給與された防暑服に着かへた。下は縮みちぢのシャツ一枚  
だ。縮みのズボンもはくべきだが、そんなことをすると膝までしかない防暑服の下から白いもの  
が出て来るので、思ひ切つてそれは省略し、猿股さるまただけにする。

士官室では、すでに副長以下全部の士官が白い布をかけた食卓についてゐた。私は、その夥おびたし  
い士官の視線を浴びて、ちよつと照れた。だがどの士官の眼も、にこ／＼笑つてゐる。私は一等  
奥の、鏡の前の席に坐る。

『海野さん、ゆうべは眠れましたか。』

と、食卓の真中から聲がかかる。布袋はていさんをもうすこし子供っぽくしたやうな恰幅のいゝ士官  
が聲をかけてくれた。

私は、さきに隊長にこたへたと同じ言葉で答へると、

『それはいかん。氣樂になさい。私などは眠られすぎて困る。』

『砲術長は別ものだよ。』



と、その前の別の士官が言葉を挟んだ。

(あ、布袋さんのやうな士官は、砲術長だつたか。布袋さんは砲術長。)

と私は心の中で一生懸命覚えようとする。今度聲をかけてくれた士官は誰だつたかな、昨日副長から紹介されたのではあるが。その士官は言葉をつぶけて、

『寝る前に一ぱいやるといゝです。本艦には幸ひにも今のところ酒がある。』

『はゝゝゝ、幸ひにも今のところ酒があるはよかつた。もうすこしたつと、水雷長が皆飲み乾してしまふ。はゝゝゝ。』

酒を飲めといつてくれた士官は水雷長だ。

(11)

○月○日(續)

朝食がすんで、私は自室へもどつた。

私は、持ちこんだ荷物の整理を始めた。二つ續きの机が舷窓へ向いてとりつけてある。その一つを隊長があげてくれたのだ。

私はリュックサックから、生活に必要な齒磨や石鹼や髭剃道具や、それから襦袢や靴下、それに白靴、それから手帳をぬに大事な本年のカレンダー、その他いろいろの薬品を取出して引出しにしまつた。

さうしてゐるうちに、ラツパの鳴る音が聞えた。『君が代』吹奏である。軍艦旗掲揚にちがひない。舷窓の外に、丁度もやつてゐる小艇の乗員たちが氣をつけをしてゐるのが見えた。私も、所持品整理をやめて机の前に直立不動の姿勢をとつた。が、ふと困惑の念に驅られた。

(軍艦旗の方向へ向いてゐなければならぬだらうが、一體どつちを向けばいゝのだらう?)  
舷窓の外の小艇の上の水兵たちは、こつちを向いてゐるやうであるから、私は廻れ右をして舷窓を背にした。それから右へ向くのか左へ向くのか、もう一度後をふりかへつてみたら、水兵たちは心持左の方を向いてゐるやうであつたから、私は更にすこしく身體を左にねぢ向けた。そのとき『君が代』のラツパは終了したのであつた。

軍艦にのつて始めて聞く『君が代』のラツパの音。私の胸は感激に熱くなつた。明日からは軍艦旗掲揚のとき傍へいつて仰ぐことにしようと思つた。

従兵が、私の荷物かたづけの手傳ひに来てくれたが、それはもう終つたあとであつた。



その従兵は大高君といふ二等水兵であつたが、私だけを受持つてゐるのだつた。私は恐縮した。尤も兵科の暇に、私の従兵をやつてくれるのである。

大高君は仲々忠實で、よく氣がきいた。

昨夜は私が部屋に歸つてぼんやりしてゐると、ラムネの入つたコップを盆にのせて持つてきてくれた。艦内の暑さにうだり切つてゐた私は、冷えたラムネを一息にぐつとあふつた。いゝ氣持だつた。

その従兵の大高君は、私の前に直立していふのであつた。

『ベッドの毛布は暑くありますから、その上に敷くござを買はれるといふと思ひます。』

『あ、さうですか。ぜひ買ひたいですね。どこに賣つてゐますか。いくらです。』

『酒保に有ります。代價は七十二錢であります。』

『ちや、頼みます。』

『朝食のとき士官は鯉節をけづつたものを飯にかけて食べます。二本分買つておきました。』

『あ、鯉節ですか。それはありがたう。へえ鯉節のけづつたのをねえ。』

私がかにゐたときには、毎朝のやうに鯉節をけづらせて飯にのせ醤油をちよいと入れて茶漬に

したものである。その風が士官室にあると聞いてうれしかつた。

『今夜八時から、士官室で報道部長の歓迎會があります。』

『報道部長?』

報道部長といへば大本營海軍報道部長前田少將閣下だ。まさか閣下がこの軍艦に來られることはあるまいに——と思ふうちに、はゝあと氣がついた。これは私のことにちがひない。報道部員だから、それを大高君は部長といひまちがつたのであらう。

その夜、この従兵が又私を呼びに來た。

『報道部長、歓迎會よろしう。』

『えつ。』

私は、又ちよつと錯覺に陥つてから、

『はい、直ぐ行きます。』

と答へた。大高従兵は擧手の禮をして動き出した。私も遅れ馳せながら答禮した。



○月○日

やつぱり酒のせぬであつたらうか、ぐつすり眠つて、早く目がさめた。氣持はわるくない。下のベッドに、窮屈さうに手足を曲げて眠つてゐる長身の老(?)隊長に先んじて起き出る。

午前五時十五分すぎだ。

なるべく音のせぬやうに、顔を洗ひ、髭を剃つてしまふ。

しばらく所在なさを感じる。艦内生活はすべてきつちりと時刻によつて搬んでいくのである。合圖のあるのを待つて動けばまちがひはないのである。そのうちに従兵長が食事の用意のいゝことを知らせてくるはずである。

昨夜の『歓迎會』には全く恐縮した。一報道班員のために、士官室には艦長まで出席された。又參謀たちまで出席したのでたいへんな賑やかさであつた。これも絶對安全な基地にゐる有難さといふものであつた。その席上、私は盃の際に、士官の顔と職名とを全部覚えてしまつた。

艦長の挨拶のあつたあとで、私は所望されて『ちかごろの内地について』といふ話をした。これはたいへん皆さんの氣に入つたやうである。従兵たちも、後に立つて聞き入つてゐた。

さうでもあらう、本艦は開戦以來西に東に南に潮を蹴つて進撃しかずくの攻略戦に、攻撃部

隊を援護して支援の重任を果し、そして今またそれを續けてゐるのであつて、開戦以前の内地のことしか知らない。だから乗組員たちは、内地がどうなつてゐるか、内地では戦果をどう感じてゐてくれるか、さういふことを非常に知りたがつてゐるのである。全く尤もなことと思ふ。

そこで私は、自分の見聞したところを詳しく話をした。道傍のラジオ擴聲器の前は、どこでも戦果ニュースを聞かうといふので黒山の人だかりのこと、女の子が眉を細く剃つたり髪をぢらせたり、毒々しく唇を塗つたりのアメリカ映畫の女優模倣を廢して素顔の日本娘に立歸つたこと、誰も食物の不平や物のない不満をいはなくなつたこと、献金や慰問袋献納者が海軍省の門内一杯につめかけてゐること等々を述べた。

艦長はじめ士官たちは『ほう／＼』とか兵學校傳統の習慣で『ちゆつ。』と舌を鳴らしたりして、私の話にひどく満悦の意を表したのであつた。私たちのために闘つて下さる將士たちがこんななまで内地のことを心配してゐるのだと思ふと、私は喋つてゐながら、勿體なさに言葉がとぎれるのだつた。――

隊長が下のベッドから起出でた。

『あゝ先生、早いですね。』



とびつくりの様子。

『お先に顔を洗いました。』

『どうぞ。』。ゆうべは御迷惑だつたでせう。あまり召上らぬ先生にすゝめたので、お困りになつたでせう。』

『いえ、そんなことはありません。しかし私は皆さんのやうに酒がいけないので、お相手できなくて残念です。』

『私も酒は駄目です。士官の中には仲々たのしく飲む人がありますが、全く今は士官たちも酒を飲む以外には何の慰安もないのです。それも、飲むのはかうして基地に碇泊中だけのことです。』

『さうでせうとも。』

と私は同感したが、しかしそのときの私は隊長のいつた士官たちの慰安缺乏につき、それほど詳しく知つてゐたわけではない。それをはつきり知つて士官や水兵さんを芯から氣の毒になつたのは、ずつと先のことであつた。

『C隊長、食事よろしい。』

従兵長が出入口の外に不動の姿勢をとつていつた。

(四)

○月○日(續)

朝食後、土廁する。

軍艦の便所は、實に清潔で氣持がいい。午前七時からはその日第一回の掃除があるので、その前に用達をして置かねばならない。

熱帯地方の生活には、便をよく通じておくことが大切である。それを怠ると、身體がだるくなり便秘症に陥る。

軍艦旗掲揚にも、今朝は間に合つた。私もだいたい艦内生活に慣れて來た。

どうもまだうまくいかないのは敬禮である。士官たちに對しての敬禮は、別に問題はない。それはこつちから敬禮しさへすれば、向ふで答禮してくれるからである。困るのは、先方から敬禮されたときの答禮である。こいつは咄嗟に擧手の禮を返さねばならないので私はまごつきどほしである。

艦内の狭い通路で、向ふから來た水兵から、さつと敬禮される。こつちもさつと右手を擧げる



のはいゝが、その手に石鹼函と手拭を持つてゐたりして、とんだ恥をかくことがある。又狭い通路では、摺れちがふときに右手を挙げると相手の身體に當りさうな氣がしてあべこべに左手をさつと舉げることもある。

そのせぬかもしれないが、氣をつけてゐると、艦内では摺れちがふときは右側歩行が行はれてゐるやうだ。それに氣がつかないうちは、今いつたやうなわけで、よく左手で答禮して赫くなつたものだ。

本艦では、一日に三回體操をやることになつてゐる。

『海野さん、ぜひお始めなさい。私も本艦へ来て以來、あれを始めて、たいへん身體の調子がよくなりました。』

副長が、親切にさういつてくれた。

『だいぶんむつかしさうですね。とても私ごときがついて行けさうもありません。』

『そんな心配はいりません。あの體操は、あらゆる筋肉をすつかり伸ばすから、それで身體のためになります。ぜひお始めなさい。』

私はその體操を、おそろ／＼上甲板に出て交つてやつてみると、仲々いゝ體操だといふことが

分つた。そのせぬか、肩は急に軽くなるし、その日の晝食も夕食も何だかうまかつた。

艦長もともに水兵に交つてやつてゐられるところを見て、私は體操のたのしさを覺えた。副長は、誰よりも熱心であるやうに見えた。體操中も、副長はうんと力を入れてやり、そのあとで兩足首をそれ／＼手で握つて頭を下げる。その頭が股の間から覗いて、やがて甲板にびつたりとつくのであつた。海軍士官はかうして、いつも身體が柔軟で、自分の身體をいかやうな姿勢にもなし得られるから、戦闘のときにたいへん有利なのである。體操もこゝまで研究せられ、はつきり活用せられると大したものである。私はすつかり氣に入つて、これから毎日副長にならつて〇〇體操をやらうと思つた。

軍艦旗は夕陽が沈む時刻を期して下ろされる。

後檣の下には、艦長が立たれる。當直將校が、軍艦旗を仰いで待つてゐると、副直將校が双眼鏡で日の入りを見てゐて合圖をする。そこで當直將校が號令をかける。ラツパが『君が代』を奏し始める。軍艦旗は斜桁からす／＼と下りてくる。

私たちは士官と共に上甲板の右舷に、下士官兵は左舷に整列して直立不動、擧手の禮を以て、しづかに下り来る軍艦旗に注目するのである。一日のうちでの最大感激は、かうして軍艦旗を拜



するときだ。

かうして夜が来る。

『燈火戦闘管制!』

の號令がかゝり舷窓げんさうに丸い鐵扉をはめて締めつけると、艦内は俄に手荒く暑くなる。

警 報

(一)

○月○日

軍艦生活にも慣れた。

朝の『總員起し』の號令が、擴聲器によつて艦内に響き互ると、私は必ず目が覺めるやうになつた。

擴聲器から出る『總員起し』の號令も、初めのうちは、があ／＼と響くだけで、一體何を云つ

てゐるのやら分らなかつたが、もうこのごろは、何をいつてゐるのかよく分るやうになつた。

『哨戒員、見張員、交替用意。』

とか、

『總員體操用意。』

とか、或ひは、

『甲板員甲板整理、五分前。』

とか、何でもかんでも私に分るやうになつた。これで、號令を聞き分けることについてはまづ一人前になつたわけ。

顔の洗ひ方も、髭の剃り方も、たいへん要領よくなつた。

シャツや禪ぜんぞしの洗ひ方もきちん／＼といくやうになつた。朝目を覺ますと、ベッドの上のビームに前夜洗つたシャツも禪も綺麗に乾いてゐるといふ次第で、二十四時間汗をかいてゐるからすぐじつとりするのではあるが、それでも毎朝シャツも禪も、さらりとしたのを身につけることは氣持がよゝ。

扉まひらがノックされる。



『おゝ。』  
と應へる。

扉が外に開く。従兵長が直立してゐる。

『先生、食事よろしい。』

『はい。』

従兵長は戻つてゆく。

『C隊長、食事です。』

と、私は下のベッドに聲をかける。

隊長は、今朝方まで當直であつてお疲れだ。今ちやうど寝入り端といつたところだが、食事時間だから起きないわけにいかない。

『あ、食事ですか。もうそんな時間になりましたか。こりやいかん。』

C隊長は、元氣にベッドを下りて、素早く服を着、早速洗面器に向ふ。

『さあ、行きませう。』

この間、たつた二分。艦内生活は、萬事この調子である。

士官室の食卓上、私の席には、  
『海野先生』と書いた札がのつてゐる。

私はいつの間にか『先生』と呼ばれるやうになつた。先生と呼ばれては毎度恐縮してゐるのであるが、それでも初めの頃、従兵諸君から『報道部長』と呼ばれてゐたのに較べれば、まだ擦つたさが少くてよろしい。

思ふに、士官室の中に参加してゐる士官たちは、全て××長と役名のつく人ばかりであつた。たとへば副長とか、機關長とか、主計長とか〇〇隊長とか、みんな『長』といふ字が下につく。

そこで私もその仲間入りをしたために『長』がついたので。『報道班員』ではあるが現地では『艦隊報道部員』と記されてゐたし、私は例の四名から成る第〇班の班長といふことに決められてあつたので、そこで『報道部長』となつたわけ。従兵諸君も、随分苦心して報道部長といふ名稱を考へ出したらしいが、そのうちに誰が決定したか、『海野先生』となつたのだ。それが更に簡單になつて、『先生』となつた。士官たちからも先生と呼ばれるので恐縮だ。『先生』と呼ばれる以上、大いに先生らしく精進せざるばなるまい。

けふも朝食は、味噌汁に鹽鰯二匹である。外に澤庵と、申受け品の鯉節とがある。



朝食は一等うまい。暑いところの生活だから、あつさりした食事が一番口にいいのだが、晝食、夕食には脂肪分の強いものが出る。

## (11)

○月○日(續)

朝食後、自室に引取つて寝る。

これをしも晝寝といふのは早すぎる。といつて朝寝ともいひかねる。とにかく夜の艦内は手荒く暑くて、私には寝苦しく、ために朝食後はやけに眠くなるのだ。

眠いときに眠つておけば、それだけ身體は元氣にもなるわけだし、夜分睡眠を多少さまたげられても大丈夫だ。さう思つて、眠くなれば寝ることにしてゐる。

約一時間眠つた。全身びつしよりの汗だ。

寝衣は汗でぐしょぐしょである。あせものところがやけにかゆい。起き上る。

ベッドに敷いたござには、この數日來、私の身體から滲み出す脂汗のため、そこだけ黒ずんで、

それが私の身體の形となつてゐる。

よくまあ、かう汗が出るものだと思ふ。

ベッドの上で、しばらくぼんやりしてゐると、舷窓の向ふには、たえず小艇の發着があつて、さわがしい。

ときどき、ドーンと鈍い音がする。今日は港内に浪が荒く、小艇が近づくとそれが一層ひどくなつて、舷側にドーンとぶつかるのであつた。

ベッドに下ろしたカーテンの隙間から、舷窓の外を窺ふと、大搖れに揺れる小艇の甲板上に兩股をふんばつて作業をしてゐる水兵の姿が、腰から下だけ見える。水兵のくりだす詰棒の先が、にゆいつと伸びて、わが舷窓に近づくと、やがてかちやりと音がして、その詰棒の先の鉤が、ロップに掛る。

作業の號令が、しきりに聞えるが、無駄な話聲はすこしも聞えない。

海軍では靜肅を一つの掟としてゐる。無駄口を叩いてゐると、重大なることや異常を見逃がす虞がある。作業中は何時でも、始めから終りまで黙つたきりの者もゐる。さういふ風であるから、何か起れば、すぐ氣がつく。内地では就業中に従業員がべちやくちや喋つてゐる風景がよく



見られる。殊に私鐵の切符賣場や改札口では、若い従業員たちが勝手なお喋りに夢中になつてゐて、客が何處行きの切符を呉れといはうが、改札口で、切符を見てくれいといつて差出さうが、知らん顔をしてゐるのがよくあるが、さういふところに働いてゐる若い従業員達に、せひとも水兵の静肅な作業ぶりを見せたいものと思つた。こんなところまで来て、内地の改札口を思ひ出すなんて、ちと情けない。

上甲板へ出てみる。

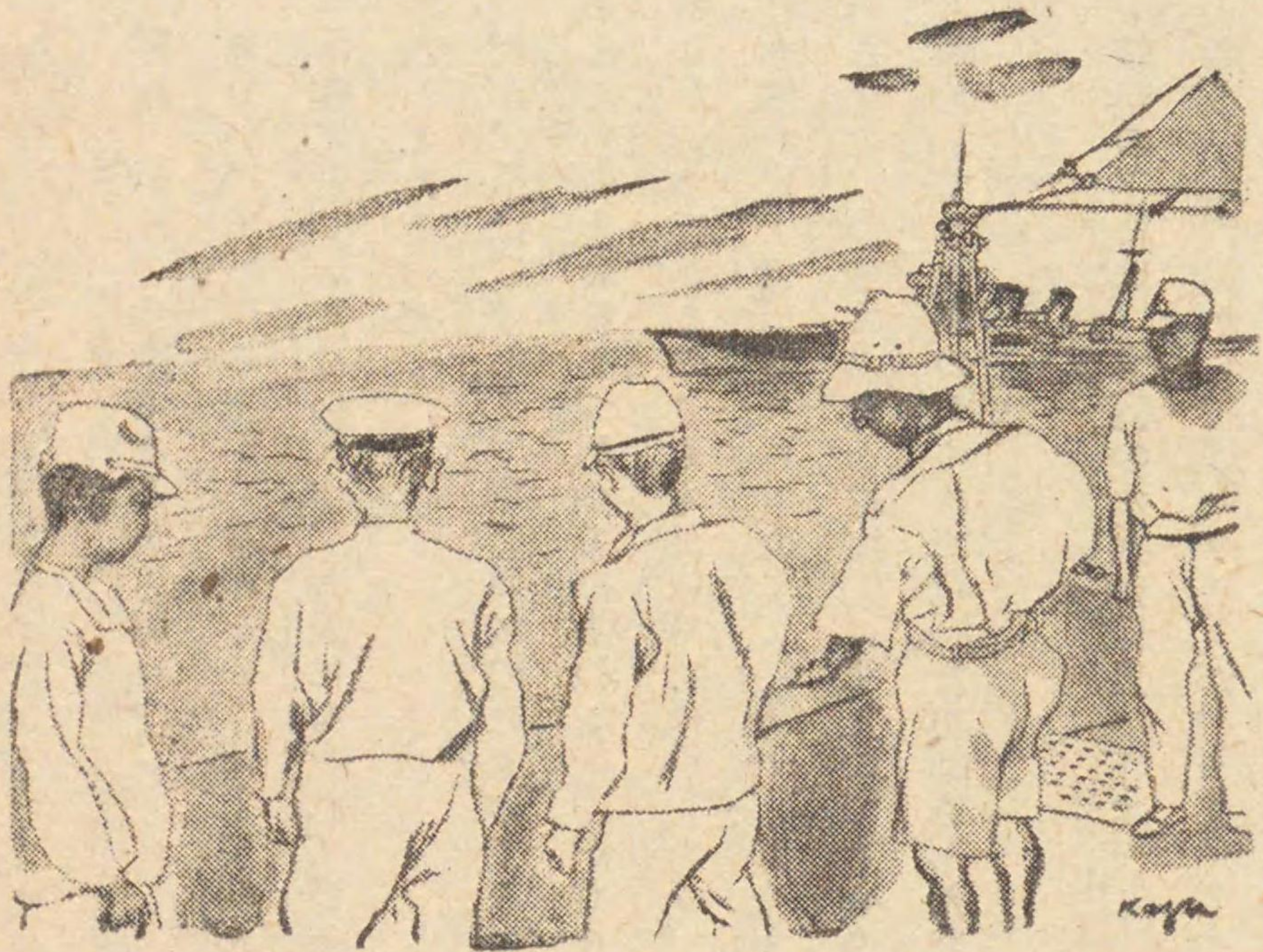
なるほどひどく風が吹いてゐる。

いつも青く澄んだ上天気ばかりつゞくこの港であつたが、けふは灰色の空の下にある。

舷門げんもんのところに、當直將校をはじめ、當直員が寄り集つて、しきりに下を見てゐる。下士官までやつて来て下を見て、何か叫んでゐる。何事か起つたらしい。私は舷びんべりの方へ歩いていつて、ハンドレールにつかまつて下を見た。

(おや、これはどうしたのかな。)

と私は目を瞠みはつた。本艦の下では、中型の汽艇が一隻、手荒く浪にもまれてゐる。それはいいが、その汽艇の中には、妙齡のお嬢さんばかりがおよそ五六十名乗つてゐて、動搖する船の中で、



しきりに黄い聲をあげてゐるのであつた。

「歸れ。歸れ。危険きけんであるから歸れ。」

と、本艦の上から誰かが叫ぶ。

あまり浪が荒いので、その汽艇を本艦に近づけて繋つなぐことは困難であり、従つて妙齡のお嬢さんがたに危険があると見て、本艦からの警告である。

「あの人たちは、どういふ人たちですか。」

と私は、傍の士官に訊いた。

「あれは先日軍需部ぐんじゆぶに來た特志の婦人事務員たちです。今日は本艦へ慰問に來てくれたのです。」



○月○日(續)

『歸れ、歸れ、危険であるから歸れ。』

さういつて舷門げんもんの上から身體をのりだして叫んでゐるのは、本艦の副直將校だつた。

本艦に近づいたはいゝが、荒浪にもまれてひどく動搖どうごうしてゐる汽艇の艇長に向ひ、さういつて警告してゐるのだつた。

だが、風ははげしく、副直將校のこゑがまたげられる。また汽艇の艇長の方は、多數のお嬢さんたちの生命をあづかつてゐるので何とかうまく艇を本艦につけようとして一生懸命しやうけんめいになつてゐるから本艦からのこゑも仲々耳にはいらぬ。

本艦では、當直員だけでなく、士官も水兵もたいへん心配してゐる。どうしてこんな海上の荒いときに、お嬢さんたちは慰問に來たのであらう。内地出發以來、最早見ることもないものと斷念してゐた程のナイスで可憐かわれんなお嬢さんたちであるだけに、私は艦上に在つてことさら氣がもめるのだつた。

舷艇の下には、當直の水兵が四五名下りて、しきりに汽艇の乗組員に適切な處置を教へてゐる。そのうちに汽艇から投げたロープが、うまくこつちの水兵の手に受留められた。

『うむ、もう大丈夫だ。』

と、私の傍で士官のこゑがした。そのとほりだつた。水兵たちは、掴つかんだロープを巧みに引いて、遂に汽艇を舷門にびつたり横づけにした。

『氣をつけて上れ!』

副直將校も、ほつとしたこゑである。

お嬢さんたちは、眞剣な顔で舷梯を見上げてゐたが、水兵のさしのべる手に、勇敢な一人が手を出す。水兵がかけこゑをかける。お嬢さんは洋装の裾すそをひらりとひるがへして、飛鳥ひてうのやうに舷梯にとびあがる。

もう大丈夫だ。あとは、次から次へと、お嬢さんたちは舷梯にとびのる。みんな元氣がいゝのに、私はおどろいてしまった。

かうして一行は全部、上甲板へあがつてきた。さすがに顔色の青さめてゐる人もあるが、さういふ人も、ここへ笑つてゐるので、私も更に安心する。

聞けば、前からけふはわれら第〇戦隊を慰問ゐんもんするといふ届出になつてゐたのださうだ。それで約束を破つては、海軍勇士たちにすまないといふので、港は荒れてゐたが、やつて來たのだと



艦長が出て来られて、丁寧且つ簡潔に、その厚意を謝した。乗組員たちは、呼びあつめられて、お嬢さんたちを真中にして、左右にぎつしり居並ぶ。

このお嬢さんたちは特に南方へ行つて、海軍さんの仕事を手傳ひたいといふ志の人たちの集りださうで、任期は一年、ついこの間来たばかりだといふ。

お嬢さんたちからは慰問の言葉があつたり、また合唱で、素人ながら、いろ／＼な軍歌などを歌つてくれる。乗組員たちは、じつと耳を傾けて、はる／＼この熱い南方へやつてきたお嬢さんに驚き且つ悦んでゐる。

私はひとり放れて、このお嬢さんたちを眺めてゐた。私の如き海軍報道班員は、果してこのお嬢さんたちに慰問される範圍に入つてゐるのかどうか分りかねるので、感謝していゝのやら悪いのやら迷つてしまふ。

しかし私ひとりの心持をぶちまけるなら、私は非常に元氣が出た。そしてその特志のお嬢さんがたの驚嘆すべき實踐ぶりにくればると、私自身の勤めなどは實にほんのちよつとしたものにするに感じ、ひそかに思ひ上つてゐたことが恥かしくなつたのであつた。

お嬢さんたちは、慰問をすませると、士官室でラムネの御馳走になつて、また荒浪にのつて歸つていつた。私は、お嬢さんたちから受けた刺戟と興奮とで、いつまでも同じことばかり考へてゐた。

## (四)

○月○日

私は何だか妙な氣分になつてしまつた。誰とも話がしたくなくなつた。それで私は、自室へ引取つた。室内は暑かつた、相變らず浪が舷にあたつて、大きな音をたててゐた。私は椅子の上にあぐらをかいて、ぼんやりと考へこんでゐた。

あぶら蟲が、ちよろ／＼と机の上を匍ひまはる。机の上には「あぶら蟲叩き棒」と記してある張扇のやうな折つた厚紙が置いてある。しかし私は、いつものやうに叩き棒を手にとることもしない。あぶら蟲は、隣の机上にC隊長が可愛がつてゐるマリー人形の上に匍ひ上つていく。私は、この野郎とばかり、それを眺めてゐた。

だん／＼氣が變になつてくるのが、自分にも分る。



『ちえつ！』

と私は舌打ちした。思ひ出さなくてもいゝものを思ひ出したのが腹立たしい。

突然扉が開いて、C隊長が入つてきた。私は、別にやましいところもないのに、どきんとした。私のさういふ様子におかまひなく、C隊長は手袋を棚から取りながら私にこゑをかけた。

『先生、警報がはいつたのを知つてゐますか。』

思ひがけない話だ。

『え、警報ですつて。私は何にも知らないのですが……』

私は、身體をくるつとねぢつてC隊長の顔を見た。C隊長の顔は平生とはすこしも變つてゐなかつたが、その言葉は私の胸をぐさりと刺した。

『敵の駆逐艦が二隻、〇〇島の南方洋上を北進してくるさうですよ。』

『敵の駆逐艦二隻？ 敵といふと、どの敵ですか。』

『それはまだ不明です。』

『然しこのへんの敵といへば、アメリカの艦隊ぢやないでせうか。』

『さうかも知れんです。——それで本艦は、第〇戦速で待機といふことになりました。』

『えつ、第〇戦速で待機。するといよ／＼出港ですか。』

『様子によれば出港するかも知れませんが。面白いことになるといふんだが、敵は何時も逃げ足が早いのでね。』

C隊長は、用意にとりかゝるために、急いで部屋を出ていつた。出港するかも知れないとは耳よりな話である。いよ／＼海上戦闘が見られるか。

私は先刻の妙な氣持から解放された。

(かうしては居られないぞ！)

私は帽子を被ると、部屋を出た。そして士官室へいつてみた。

士官室は、空っぽ同様だ。只ひとり、軍醫長だけが残つてゐて、白いシートを敷いた長椅子の上で冷却水のコップを手持つてゐる。

『軍醫長。何か警報がはいつたさうですね。』

と、私はその横に腰を下ろしていつた。

『はいりました。あのとほりです。』  
と、軍醫長は黒板を指した。



黑板には、その時折の重大事項が書き出される。それを書くのは、水雷長か砲術長であるが、當直將校も書く。今書いてあるのは、水雷長の筆蹟だ。

それを讀むと、〇〇島望樓の見張員がそれを見つけて報告してきたのであることが分つた。〇〇島は、この基地より〇〇海里の彼方である。軍醫長はいふ、

『もつと報告が方々から集つてくるまでは信用できませんよ。』

『もしアメリカ艦隊の駆逐艦だつたら、すゝぶん大膽な行動ですね。』

と私がいつてゐるとき、突然頭の上で、ずどんと大きな爆發音がした。

(五)

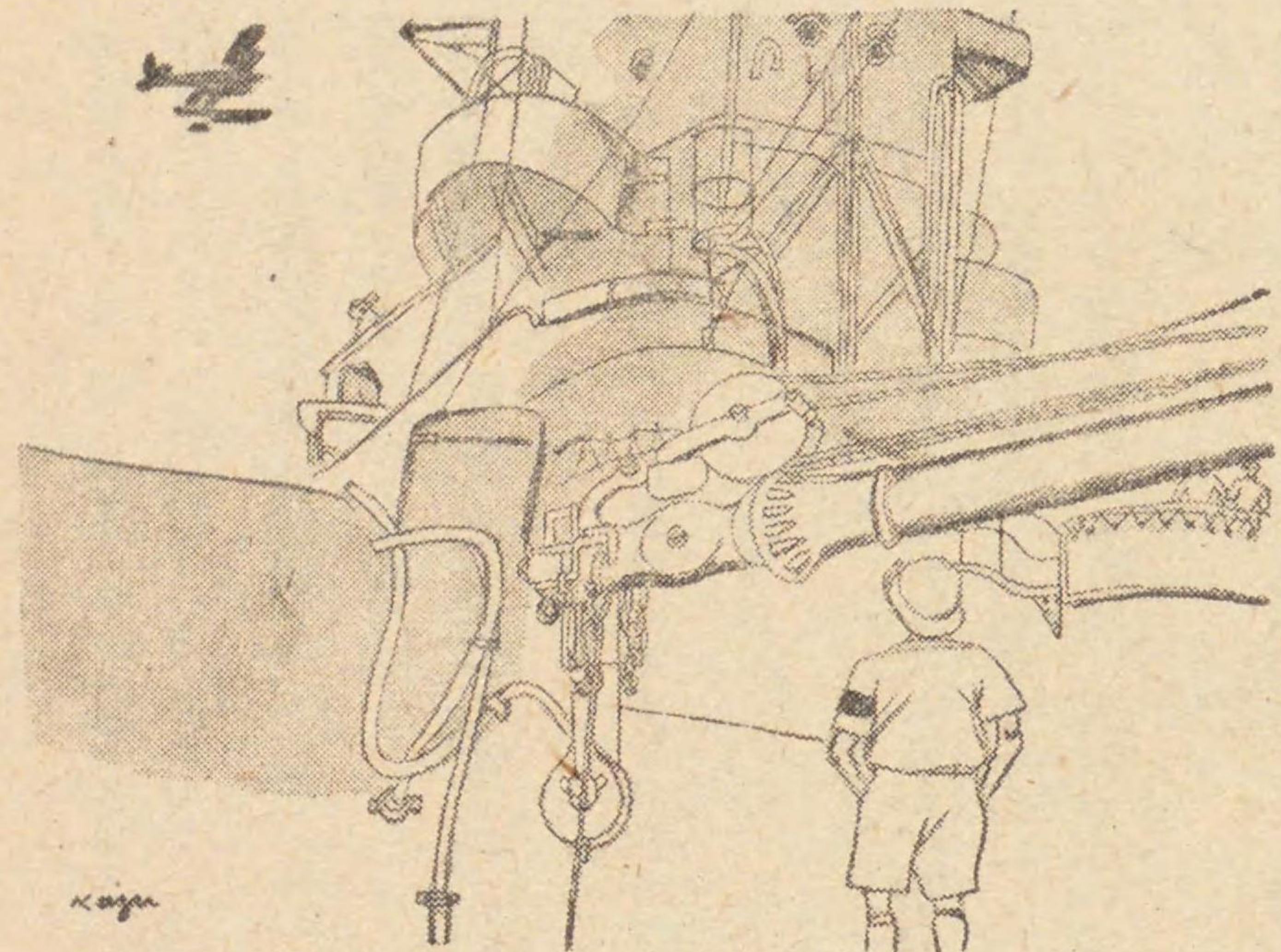
〇月〇日(續)

『あの音は……』

と、私は軍醫長の方をふり向いた。

『あ、あれはカタパルトが飛行機を射出した音です。あゝ見えます、この窓から。』

軍醫長はさういつて、ソファから腰をあげると後向きになつて舷窓越しに指をさす。



なるほど、カタパルトの音だつた。

私も舷窓に顔を差入れんばかりにして、外を見た。海面低く、今しも打ち出された艦載機が爆音高く飛び去るところだつた。

私は士官室を出て、上甲板へ駆けあがつた。途端に、またずどんといふ音を聞いた。音のした方を見ると、僚艦〇〇から、また一機が射出された。

艦長の顔が、艦橋の上に見える。さつき本艦から飛び出した艦載機の行方をじつと目で追つてゐる。機は舵を取直して、こつちへ向つてくるやうだ。

ハンドレールの傍には、副長が立つて、これもわが艦載機を注目してゐる。



機はだん／＼高度を高めつゝ、本艦の上をぐると旋回する。機上から搭乗員が本艦に向つて擧手の禮をする。あれは〇飛行長だと誰かがいつた。

『うまく見附けて呉れるとよいが……』

當直將校の聲だ。

『敵の驅逐艦が〇〇島のところまで突込んでくるなんて、大膽すぎるね。間違ひぢやないかね。』別の士官がいつた。

『しかし敵は最近、〇〇基地をしきりに狙つてゐる様子ですから、やつぱり本當ぢやないですかね。』

すると又別の士官が、

『潜水艦がやつて来るなら分つてゐるが、驅逐艦二隻が、〇〇島の傍へやつて来るとは、アメリカらしい亂暴なやり方だ。油断はならん。』

『その二隻の驅逐艦のうしろに、大物がついてゐるのぢやらう。そいつを早くはつきり見附け出すことぢや。』

『機動部隊が斬り込んで来るか。もしさうだつたら、わが第〇戦隊も、うどん華の花咲く時節到

來だ。』

『は／＼／＼、電信柱にも花が咲くぢやらう。』

『こゝらで、せひさう願ひたいものだな。』

『貴様のクラスで、金鷄勳章になつてゐないのは貴様ばかりだからな。は／＼／＼。』

『いや、わしばかりぢやなく、第〇戦隊に乗つてゐる奴は、殆ど皆さうなんですから、くさるね。艦長だの貴官だの、支那事變組は別ですよ。これまで敵が来る、今度こそ敵が来るといふので悦んでゐると、いつももうすこしといふところで逃げてしまふ。かうたび／＼逃げられては、神経衰弱になるよ。』

『それも敵が狙ふおそるべき神経戦の一種ぢや。』

『え、神経戦？ まさかそんな神経戦がね、は／＼／＼。』

『とにかくわが第〇戦隊は損だよ。かういふすごい恰好をしてゐては、敵が一目見て逃げ出すのも無理はないよ。』

『仕方がない。一つ上へ進言して、鎌倉丸に偽装するか。』

いつ上つて來たのか、軍醫長の聲。



『それは軍醫長、名案だぞ。軍醫長にして置くのは勿體ない。軍醫長をやめて兵科へ——』

『まあええよ。私は軍醫參謀で我慢する。』

『軍醫參謀はどうぢや？ はゝゝゝ。』

『はゝゝゝ。』

上甲板の喫煙所は賑かだ。

士官たちは、それぐの配置を整へ終り、この上は敵よいつでも來れである。

艦載機は、それぐの向きに進撃して、もう機影は見えない。歸艦豫定は、今から〇時間のち、乃ち午後九時だといふ。

(六)

〇月〇日(續)

夜は更けた。

港内は暗黒、空にはいつものやうに、うつくしく閃めく星の海。

艦長が、こつくと靴音をさせて、上甲板の士官溜りの席へ來られた。

詰めてゐた一同、擧手の禮。

艦上は暗いが、闇に慣れた目には、艦長の姿などすぐ分る。私にも分る。

『艦長、本艦の飛行機は感度がなくなつたさうですな。』

機關長の聲だ。

機關長は艦内隨一のゲ・ペ・ウーだ。早耳で、何でも知つてゐる。機關のことだけではない。

艦内に於けるあらゆるニュースをちやんと知つてゐる。また陸上のことについてもすこぶる情報に通じてゐる。そんなに度々上陸するわけではないが、艦内にゐる陸上の出來事が手に取るやうに分つてゐるのであるから、大したものである。沉んや飛行科のニュースなど何でもない。

『うん。相當奥へ突込んだから、要慎してゐるのかもしれないが、それにしても、もう何か向ふから云つて來てもいい時刻だ。』

艦長は、偵察に赴いた本艦の飛行機が音信不通なのを心配して、かういふ具合に云つた。

感度がなくなつた飛行機は、本艦のだけである。他の僚艦のものは、いづれも連絡がついてゐる由。

一同は、黙つた。皆本艦機の安否を心配して、じつと考へ込んだのである。



夜空は暗い。

風も死んでしまったやうだ。むん／＼と暑くなつた。

ばかり。

とつぜん闇が光つた。

はつと思つて、私は光つた方向を見た。島の山上から、さつと探照燈が照らし出されたのであつた。

『もう飛行機が歸つて来るんだな、きつと軍艦〇〇の飛行機だらう。』

と、艦長が云つた。僚艦機が第一着に歸つて来るらしい。

探照燈の數が殖えた。あつちからも、こつちからも、青白い強烈なる光芒が、沖合を照らす。

沖合はるかに、珊瑚礁があつて、それに白く波がくだけてゐるのが、まるで眞晝見るのと同じに、はつきり見える。珊瑚礁の傍の、あの綠青を溶かしたやうな淺瀬までが見える。——かうして、歸つて来る飛行機に、この港の位置を知らせてやるのだつた。

『あゝ聞える。爆音が聞えます。』

若い士官が云つた。

爆音が聞えるといふ。私はじつと耳を澄ました。しばらくすると、微かにぶーんと爆音が入つて來た。

『あ、〇水道の上空だ。』

探照燈が、しづかに動き出した。飛行機に着水地點を指示するためだつた。

『艦長、軍艦〇〇と軍艦〇〇の飛行機、歸ります。』

當直將校の聲だ。

『はゝ。』と艦長は返事をして『本艦機からはまだ何もいつて來ないか。』

『は、今何か入つたやうであります。今、U參謀が參ります。』

と、當直將校がいつてゐるとき、U參謀が來た。

『艦長。本艦機の感度が出ました。豫定より約一時間遅れて歸投する状況であります。』

『さうか。感度が出たか。それはよかつた。よかつた。』

艦長は、よかつたを三遍もいつた。傍で聞いてゐた機關長はじめ皆も、ほつとする。

空と海とを照射する探照燈の強烈な光芒。そのために艦上はいよ／＼暗く、お互は聲がするばかりで、姿は見えなくなつた。



## 出 撃

(11)

〇月〇日

午前三時五十分、總員起し。

事態は明瞭でないが、萬一の場合をおもんばかつて、敵機來襲に備へるためのこの早起だ。上甲板へ出てみたが、まだ外は眞暗だ。眞夜中とすこしも違はない。もちろん、基地の市街も分らないし、僚艦の位置も分らない。風だけが生きてゐて、下から持つてきた膚の汗をさます。

『どんな様子ですか。』と私は、舷門の脇をこつ／＼と歩いてゐる當直將校に聲をかけた。

『分りません。しかし午前中に、敵の様子は大体はつきりするでせう。』

『本艦の飛行機は、ゆうべうまく歸つて來たやうですね。』

『歸つて來ました。海面を念入りに搜索したが、何にも見えなかつたさうです。』

『すると、昨日の警報は、ありや間違ひですか。』

『さあ、それは俄に決められませんね。飛行機で搜索してみても、海上は手荒く廣いから、やっぱり見逃がすこともあるです。』

さうでもあらう。暗夜の海上に漂ふわづか二隻の敵駆逐艦を見附けるのは、たいへんな仕事である。

夜が明けたが、敵機は遂に來襲せず。

基地の市街をふりかへつて、その安穩な姿を見る。まあよかつた。

警戒は、飛行科だけとし、他の科については一應解かれた。

士官室へ行つてみる。

59 撃 出  
そこにはいつもの明るい光線はない。電燈は消したまゝになつてゐて、長椅子の上には、誰か分らないが、士官がごろ／＼睡つてゐる。卓子と長椅子との間の空いたところには假設ベッドが四個出てゐる。その上にも誰だか分らないが士官たちが、ぐう／＼睡つてゐる。いづれも昨夜來の嚴重な警戒に當つてゐた人たちばかりだ。今警戒が一應解かれたので、倒れるやうにしてベッドの上に乗つたところらしい。



私も、何だか睡ねむくなつた。一つは、氣づかれのせゐであらう。  
自室へ戻る。

下のベッドには、既にC隊長がもぐり込んで睡つてゐる。C隊長は汽罐を預かつてゐるので、昨夜は一睡もしなかつたらしい。昨夜この部屋で寝たのは、私一人だけだつた。

私は上衣うはぎを脱ぐと、鐵梯子てつしじに手をかけ、なるべく音のしないやうに上のベッドへもぐり込んだ。そして間もなく、ぐう／＼と睡つてしまつたのであつた。

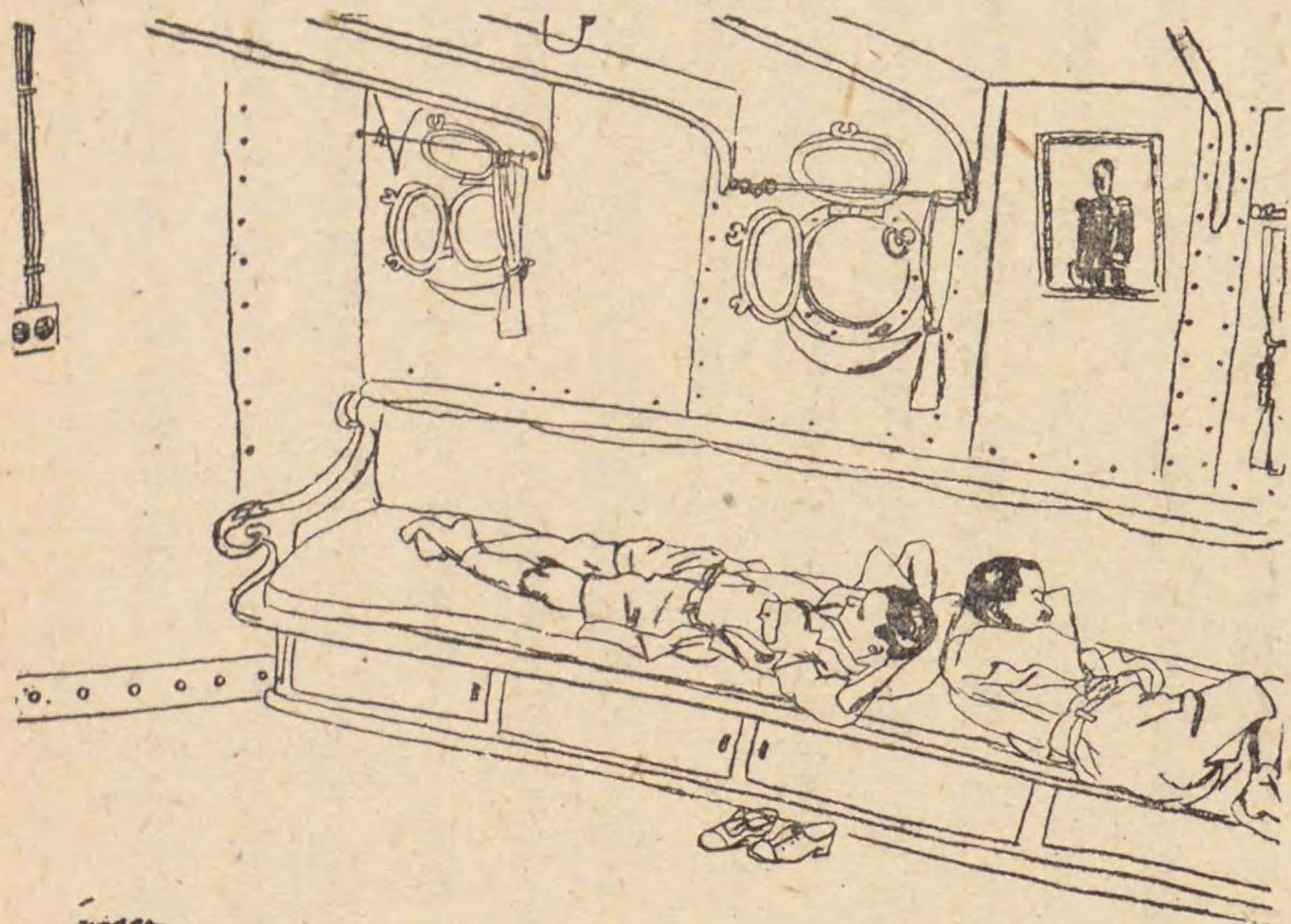
それからどの位時間がたつたか私には分らなかつたが、夢心地ゆめごちに扉がノックされる音を聞いたやうに思ひ、睡りがさめようか、それとももう一度ぐつと深く睡らうか、どつちにならうかといふ不安定な状態の下に、私の意識が曇り硝子がらすのやうに朦朧もうろうとしてゐるとき、すぐ身近かで、劈つんざくやうな兵員の聲がした。

『……出港用意で、各罐點火かくくわんでんくわを了りました。』

(なに、出港用意！ 本當か。)

私は、がばとベッドの上に起き上つた。

C隊長は早くもベッドを下りて、服をつけ、帽子と手袋へ手を伸ばしてゐるところだつた。



『C隊長、出港用意ですか。』

と私は追ひすがるやうに、聲をかけた。

『あゝ先生。起きとられましたか。』

C隊長は、にんまりと笑つて、私の顔を見て、

『いよ／＼出港ですよ。又新しい警報けいほうが入つたのです。それによると、昨日の〇〇島の南東七百海里ななひゃくかいりのところに、敵の大部隊が現れたさうです。先生、いよ／＼面白いことになつてきましたよ。』

(11)

〇月〇日(續)

敵の大部隊、〇〇島南東七百海里の地點



に現る！

大部隊とは、どんな部隊か。

大部隊といふからには、少くとも敵は航空母艦と巡洋艦とを根幹とするいはゆる機動部隊をもつて進攻してきたものと思はれる。

いや、ひよつとすると、またその上に、巨砲を持つた戦艦が加はつてゐるのかもしれない。『敵の大部隊』とのみで、その艦種がまだ判然としないところに、非常に無氣味な戦力が感じられる。

わが軍艦内は、俄かに活氣づいた。

艦隊命令が出た。

「第〇戦隊へ、〇〇節即時待機、最大戦速一時間待機トセヨ」

そして各艦の艦載機は、直ちに爆音高く舞ひあがり、南方に機影を没した。

更に、二番機以下が、即時待機となつて、カタパルトの上に載りエンジンは轟々と軍港の空気を壓してゐる。

日頃は、坊やのやうに可愛い顔をしてゐる若き飛行長が、きりつと唇をむすんで、飛行船橋の上に突立ち、じつと南方の空を見詰めてゐる。それは先發した部下の身の上を想つてか、それと

もいつわが上空に飛來せんとする敵機の影を求めてか、そのどつちかであらう。

〇〇時、出港のラツパが唸唸と鳴りひびく。錨はがら／＼と捲きあげられた。上甲板は甲板員が次から次へと見事な團體行動を起して、いつも廣々とした甲板も狭いやうに見える。

艦橋には、〇〇官以下が詰つてゐる。下から仰ぐと、りつばな提督髭の司令官の顔が見える。

艦長のトマトのやうに赤くて丸い顔が見える。双眼鏡を目にあてて、前へのり出してゐるのは、先任參謀だ。

艦はいつの間にか動き出してゐた。

基地の島影が、ゆるやかに横にすべつていく。

出 　　うしろをふりかへると、僚艦がびつたりとわがうしろに従つてゐる。嚴かな陣形が、既にして出來てゐたのだ。

わが第〇戦隊だけではない。第〇〇戦隊も動いてゐる。そしてわが隊列よりも一足先に水道を出ていく。

目をはるか前方にやると、輕快なる第〇〇水雷戦隊が、速力を早めてすつとぶやうにして出ていくと、頭上には、手荒き爆音が起る。



中攻だ。萬年筆のやうな形をした爆撃機が、つぎ／＼に飛行場を離陸して、頭上にとんで來る。一機、二機、三機……六機、七機、八機……十三機、十四機……十九機、二十機、二十一機……とても數へ切れない。それがいづれも軍港の上を一巡する間に〇機宛の見事な編隊を作つて高度をあげていく。そしていづれも同じ南方をさしてゐる。そして間もなく煙霧の中に機影を没してしまふのであつた。すばらしい速力だ。

基地の空も海も、今や出撃の大渦巻の中にある。

氣がつくと、港内に碇泊してゐる各艦の上は、並ぶ兵員で眞白になつてゐる。そして盛んにこつちへ向けて帽子を丸く輪にふつてゐる。

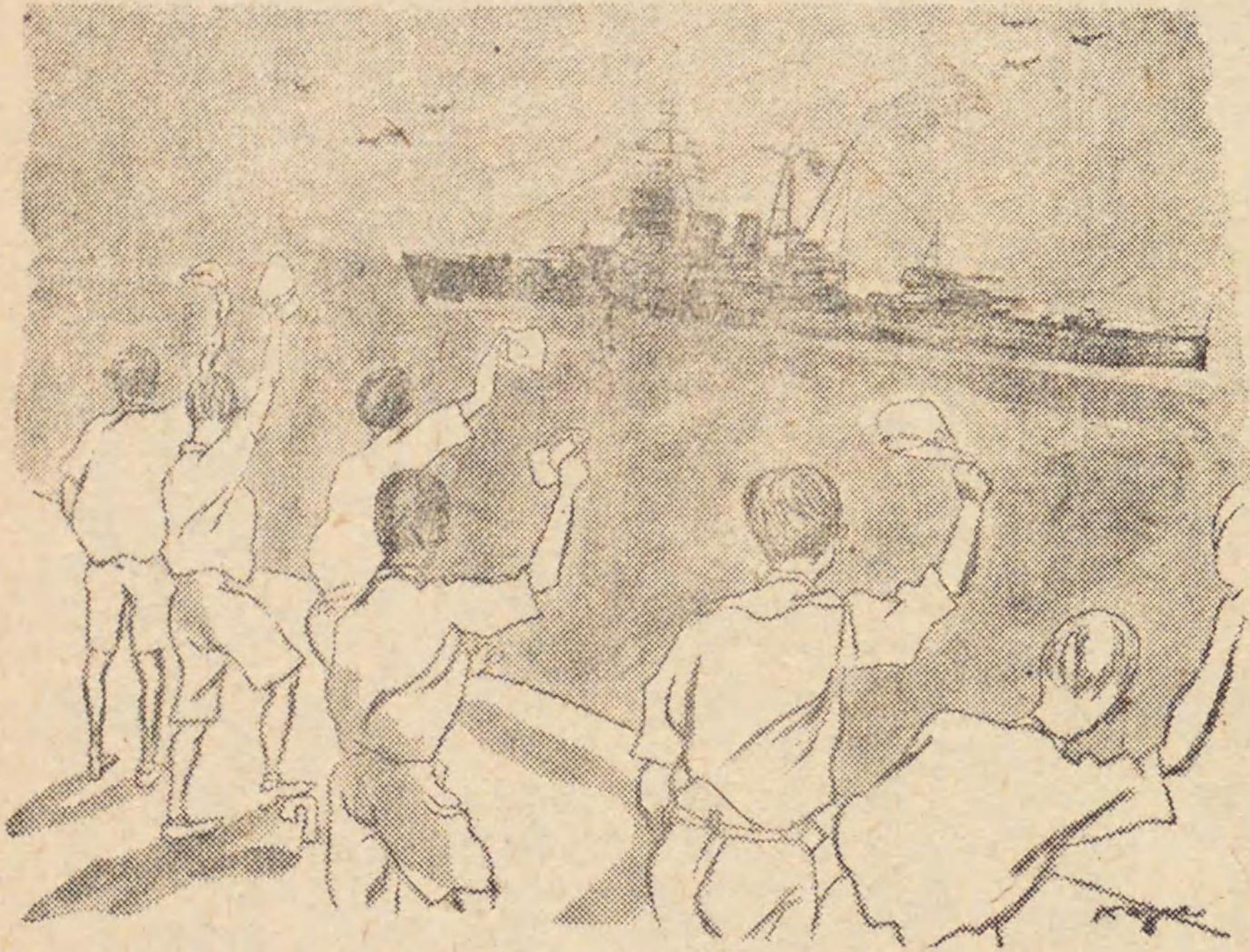
本艦は、もうかなりのスピードを出してゐて、滑るやうに碇泊艦の艦列の前を縫つて出ていく。向ふの軍艦の檣に、する／＼と信號旗があがつた。

「豫メ御成功ヲ祝ヒ申上グ」

間髪を入れず、わが斜桁にも信號旗があがる。答禮の信號だ。

「誓ツテ成功ヲ期ス」

鬨はざるその前にわれは必勝の信念に燃え、敵の大部隊を一呑みに呑んでしまつた氣配だ。



白い帽子は、なほも盛んにくる／＼廻る。

(三)

○月○日(續)

基地は既に北方に小さくなり、模糊たる一塊の島影と化してしまつた。しかしいつまで経つても見えてゐる。勇しい征途にのぼるわが艦隊を、じつと見送つてゐるやうに感じられる。

さうだ。この次、基地へ戻つてくるのはいつのことであらうか。ことによると、最早これが基地の見納めになるかもしれない。いや、そんなことは、今考へる必要はないのだ。基地を再び見られようと見られ



まいと、そんなことはどうでもよいのだ。今は、敵艦隊をうまく捕捉して死闘を挑み、彼を悉く赤道直下の海底に葬り去ることだけを考へておればよいのだ。

檣の上を、一羽の白い海鳥が、いつまでもぐる／＼廻つてゐる。どこまでついてくる氣かしらん。

海上は至極穩かに見える。

空は半晴れ。西と南とは、雲が高い。しかし東と北とは煙霧に霞んでゐる。どうやらスコールの雲があるらしい。

陣形が、いつの間にか改まつてゐる。戦闘に備へるためだ。

上甲板のハンドレールの傍に立つてゐると、ばさ／＼と音がして冷いものが頬に當つた。海は穩かだが、スピードが出てゐるので、舳からかき上げる浪がくだけて雨のやうにふり濺ぐのであつた。

各艦は、天に噛みつくやうな表情で駛る。針路は眞南だ。海は、ゼリーのやうに青い。

『総員體操用意！』

これから戦闘だといふのに、やつぱり総員體操の號令が出る。ふしぎな氣持がする。

やがて甲板に、いつものやうに士官も水兵も、上半身を裸にしてあらはれる。

司令官もいつの間にか、艦橋から下りてをられて、皆と同じやうに體操の仲間に入る。司令官だけは、上半身を縮みの襦衣につゝんでゐる。艦長は、大關のやうに肥つた上半身を見せる。

お一チ、二ツ。お一チ、二イ。

敵艦隊の來襲する方向を睨んで元氣のいゝ體操が始る。もちろん私も、その間に挟まつて、お一チ二ツをやる。何だか、いつもよりは力がはいり、そして腕も脚もぐーんと伸びるやうだ。

お一チ、二ツ。お一チ、二ツ。

餘裕綽々とは、正にこのことだ。このところを、ちよつと敵の奴に一目覗かせてやりたいと思つた。

體操の後で晝の食事の號令がかかる。これもいつものとほりだ。私は汗を手拭がはりに襦衣でふいて、その襦衣の兩袖に手をとほした。それから上衣をつけた。バンドをきちんと結び直した。そして士官室へ下りていつた。

おかずは又もや冷凍秋刀魚の煮附に、馬鈴薯をつけあはせたもの。その外に澄し汁があつて、中には小さい冷凍鰹の切り身と葱を薄く刻んだのが入つてゐる。戦闘が始る前だとして、別に御馳



走はない。私は心中、御馳走を期待してゐたのであるが、こいつは不覺の至だつた。何事も、平生のまゝである。そこがいゝのであつた。

だが、この士官室にも、平生とちがふものが些かあつた。それは何であつたか。

士官室の食卓が、やゝ寂しいのだ。それはいつも食卓に並ぶ士官が、幾人か缺けてゐることだつた。航海長の姿が見えない。通信長も顔を見せない。F隊長も來ない。席はあるが、いつまでたつても現れない士官もある。私の席も、いつもとは違つたところへ移つてゐる。おつゆの中から拾ひあげた冷凍鯉の身が、咽喉に通りかねる。

『敵の大部隊を最初に發見した味方の哨戒機は、自爆したらしいね。』

と、早耳先生の機關長が副長の方をちらつと見て、それから山羊髭の顔を全卓へ廻す。

(四)

○月○日(續)

殊勲の哨戒機が、残念にも自爆したといふのだ。それを聞いた瞬間、私は急に胸元が壓迫されて、箸を下に置いた。食卓を圍んでゐる士官たちの眼が、一樣に氣色ばむ。

そのとき、機關長の前の副長が顔をあげて、

『二番機が敵部隊に觸接したさうだ。』

といつて、茶碗の中の飯をかきこんだ。別に平常とすこしも變つたことのない副長の落着いた態度。一瞬、私の氣持は救はれた。

『で、二番機から、何か報告がありましたか。』

と、私と反對の端の食卓から、主計長の聲がした。

『ワレ、敵主力部隊ヲ見ル。それだけさ。』

副長は、太い頸をねぢ曲げて主計長を見る。

『敵主力部隊ヲ見ル? ふーん。一番機からは、敵大部隊ヲ見ゆ。二番機からは、敵主力部

田

隊ヲ見る。敵は大物だといふことは分るが、もつとくはしいことを知りたいものだな。』

砲術長がさういつて、

『おい従兵。おかはりだ。』

と、空になつた茶碗を、自分のくるく坊主廻りの頭上にさしあげる。従兵が後へ廻つて、盆を高く差しだして、苦しさに笑ひをかみころす。



『おい、從兵。大山盛おほやまもりによそれ。』

さういつたのは、砲術長でなくて、隣席の機關長だつた。皆の眼が、機關長の山羊髭やまぎひげへ動く。大兵の砲術長は、目を丸くして、機關長の方へふりかへる。

機關長は、眞面目くさつて、

『砲術長には、今のうちに心残りのないやうに飯をうんと喰はせて置かんことにや、砲戦が始ると、とても砲塔はうたの上から降りて來られまい。』

『いや、お氣づかひ、ありがたう。』

と砲術長が、わざと四角ばつて頭を下げる。

『なんしろ、艦内で一等腹の減る選手は砲術長なんだから、わたしや心配だよ。砲戦最中に腹が減つて、砲術長の眼がくらむと、こいつはたいへんだからなあ。』

機關長は、さういつて眼を細くした。

『これ、機關長。私は、そんなに飯をたくさん喰ひますかね。』

砲術長が照れて云ふ。

『帝國海軍においては、わが砲術長が少食だと考へる者は一人もないよ。はゝゝゝ。まあうんと

喰ひ溜をして置いて敵艦が見えたら、一つ大いに頼みますよ。』

『こと砲術に關しては不肖ふせうが引受けました。なあに、腹が減る方は既に從兵に握にぎり飯を頼んであるから大丈夫。しかし機關長、本艦のスピードは、うんと出して貰はにやねえ。機關長に、その用意ありや。』

こんどは砲術長の逆襲である。士官連中、飯の味も、味方一機喪失の慨なげきもこの掛合ひ話でもよつと忘れかける。

『こと機關に關しては、憚はにかりながら、われに成算あり。——おい從兵、砲術長、御飯のお代りだぞ。さつきのは、まだ盛り方が少い。四十サンチ砲彈のやうに、もり／＼と盛りあげろ。』

『はゝ。』

出

從兵が、うしろで眞面目に返事をする。

『機關長の成算ありといふのは、具體的にいふとどういふのですかなあ。』

『それは分つてゐるよ。最大戦速以上の超々てつてつ戦速を出す用意ありさ。〇〇ノット出すぜ。』

『ほう〇〇ノット。まさか。』

『その代り、この士官室にあるものは皆燃もしてしまふ。食卓も燃すし、椅子も燃すし、將棋盤しょうぎばんも



燃す。叩き壊して、どん／＼燃してしまふから、豫め了解しておいて貰ひます。』  
 『ほう、やりますなあ。ちや、私の寢室の椅子も机も燃して下さい。』  
 『もちろん、それも私の計畫に入つとる。砲術長の机の引出しにしまつてある令夫人からの手紙も燃す。あの手紙は燃すと屹度手荒く熱量を出してくれることぢやらう。私は大いに期待してゐる。はつ／＼。』

## (五)

○月○日(續)

敵大部隊に對し、大膽にも觸接したわが哨戒一番機は、一通の電文をかたみとして自爆、ついでその志を承けて果敢なる觸接をつけたわが二番機も、これまた一通の電文を残して自爆してしまつたらしい。その後、杳として報告が入らないのだ。

(残念、無念！)

私は一體どうなるのであらうかと氣が氣でなく、浪に揺れる上甲板へ駆けあがつてみたり、また戦況報告の逸早く出る士官室の黒板の前へいつたり、落着かうとしても仲々落着けなかつた。

夕刻ちかくなつて、敵の位置と針路とが始めてはつきりした。その針路を、ずつと先へのはして豫定線を引いていくと、果然その矢の先はわが、南洋の〇〇港に申刺しになるのであつた。

(敵大部隊は、わが〇〇を狙つてやがるんだ！)

生意氣千萬とは、正にこのこと！ さうやす／＼とわが南洋が侵されてたまるものか。私はむら／＼と癪にさはつた。

そのうちにも、わが航空隊の攻撃部隊は捕捉した敵艦隊に向つて勇猛果敢なる攻撃を開始したやうである。その攻撃報告は、夕闇の中を電波にのつて、本艦にも届いた。その報告こそ、士官たちや私が、この息づまるやうな半日の間に待ちあぐんでゐたものであつた。

航空隊の暗號電文は、翻譯されて、例の黒板の上に書きつけられた。白墨を手にとる水雷長の口許がきりつと結ばれてゐる。

敵ハ米艦隊。主力部隊戦艦一隻、航空母艦一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦九隻ヨリ編成、輪形陣ヲ以テ〇〇〇時〇〇地點ヲ北西ニ進航シアリ。其ノ速力〇〇。敵ハ戦闘部隊ヲ驅使シ且艦上防禦砲火熾烈。吾レハ果敢ニ反復ニ攻撃中ナリ。たうとう敵の正體がはつきりした。



戦艦に護られてやつてくる航空母艦だ。今までにない有力なる部隊だ。その上に巡洋艦三隻と駆逐艦九隻を従へてゐる主力部隊である。相當の大部隊だ。私は、讀み了つた瞬間、敵の轟々たるエンジンの響きが耳底に聞え出したやうに思つた。相手にとつて不足なした。

「やつぱり、機を外さず航空隊が攻撃を始めたね。」  
士官の聲だ。

「〇〇から行つたんだな。あそこから現場までは、ちよつと遠いが、やつぱりやらすにやをられんだらう。」

「味方の戦闘機はくやしがつてゐるだらう。現在の位置では戦闘機隊は攻撃を加へることができないからなあ。」

「弔合戦だ。こつちの攻撃部隊ははりきつてやつてゐるだらう。」

そのとき機關長が、士官室へぬつと入つてきて、黒板へちよいと目を走らせたかと思ふと、

「おい——冗談ぢやないぞ。もうこつちの航空部隊が取附いて、どつかん／＼やつてゐるといふぢやないかね。この様子ぢや、明日まで生き伸びる敵艦は、いくらもありやせんぞ。すこしは敵艦を残しておいてくれんとこつちは張合ひがない。」

といつて、天神髭をぎゆつと引張つた。

「全くだ。ぢや航空部隊へ無電をうつことにするか。貴隊は航母一隻にて我慢をせられよ。残りわが〇戦隊に於て處理いたしたし。右申入れるといふのはどうかね。」

別な士官がいつた。

「駄目だ、そんな申入れは。返電が来て、貴〇戦隊は次回の武運を俟たれよと來るにきまつてゐる。航空部隊には、獲物を他へ譲るやうなそんな食欲不振の奴はゐないよ。」

「まあ／＼、いざそのときになつて見なけりや、何ともいへないよ。」  
副長が慰めるやうに、さう云つた。

(六)

〇月〇日(續)

夜に入つて、艦内の緊張は、さらに加はつた。

士官室は、夕食に出て來る士官の數もぐつと減つた。食事のあとには、隅の電燈が消され、そして假設ベッドの數が、さらに殖え、室内を歩くのに骨が折れた。又入口に掲げられた木札に



『第〇戦時治療室』と書かれた赤い文字が、目の中にとび込んでくるたびに、何だか痛いやうな感じがした。

砲術長が、双眼鏡を頸にかけたまゝ入つて來た。そしていきなり黒板に向つた。

士官室の長椅子に休んでゐた士官たちは、或はむつくり起き上り、或はまた肘をついたまゝ眼をきらりと動かす。

チョークが黒板にあたつて、いつになく高い音を出す。

「……〇〇航空隊ハ敵部隊ニ對シ反復攻撃、敵大型艦一隻ヲ撃沈セリ、我ガ方自爆機數機アリ、書き終つて、砲術長は巨軀をゆすぶつて、

『おい従兵、水を一杯。』

と命じて、卓子の前に腰を下ろす。

『大型艦一隻撃沈ですか。たうとう見事に仕留めたね。』

軍醫長が悦ぶ。

『大型艦といふのは、何かね。航空母艦か、それとも戦艦か、甲巡か。』

機關長は、曖昧なことがすぐ氣にかゝる性質であつた。

出

『電文簡にして、艦種は不明です。しかしもちろんこれは航空母艦ですよ。』

『さうだ。砲術長のいふとほりだ。當節は何といつても、第一に航空母艦をやつてしまはにやいかん。飛行機は、どうもうるさくていかんよ。』

軍醫長がいふ。軍醫長は、敵の飛行機が大きらひである。

『味方の自爆機數機といふからには、もつと戦果があがつてゐると思ふ。その後、何にも戦況報告は入りませんか。』

機關長が砲術長に訊く。

『ありません。今黒板に書いたのが、最新のニュースです。』

『恐らく、もつとどかん／＼とやつてゐるだらうな。これはいよく／＼残りの獲物が減るわい。砲術長も今日のところは夜となつて遂に仕事にあづれたか。やれ氣の毒な。』

『あとは水雷長に引繼いだです。闇に鐵砲の自信はあれど、今夜のところは、水雷長に花を持たせませう。これも武士の情でね。』

『あんまり皆がそれ／＼で謙讓の美德を發揮すると、得をするのは敵艦だけぞ。』

『なあと機關長。今夜は譲つても大丈夫です。明日にならなければ敵は射程内に入つてこないで



すから。』

『それはさうだ。しかしいつ敵の伏勢ひそげいが現れるかも知れずだ。たとへば、敵機動部隊が何かの手段により、飛行機で襲撃してきたらどうする。』

『闇に飛行機ですか。こつちからも見えないが、向ふでも仲々見えないでせう。しかも敵の目標は、南洋の〇〇港に在り、わが〇戦隊にはないですから、今夜は大丈夫。その代り、明日になったら、それこそ血みどろの戦闘せんとう繪巻まきの連続でせう。お互に、今夜は暇ひまがあつたら遺書でも書いて置くことすなあ。』

『遺書か。遺書は、あんまり何遍なんべんも書きかへたので、もう書くのが厭いやになつた。今度の分は一つ砲術長に代筆してもらふか。』

『いや、それは駄目。わしは最初に書いた一通でいつも間に合はしとるです。』

『ところが、遺書は一通ぢやいかん。一通ぢや亡失はうしつするおそれがある。艦と共に沈んだり……』

『なあに一通でも亡失の心配はありません。』

『いや、大有りだよ。』

『いゝやわしは自宅の机の引出しに入れて来たから、大丈夫です。』

(七)

〇月〇日(續)

士官室の夜は、敵艦隊を待つて、さらに眠かさを増す。

艦隊からは、刻々に無電が入つて、わが部隊の動きが知らせられる。

廣大なる太平洋上に、今ぞくろがねの大渦おほうつまき巻が起る！

敵艦隊は、それを知るや知らずや、多分それを知らないであらう。刻々と、わが布陣ふぢんは鐵壁てつへきの堅さを加へ、その攻撃力は物凄く高められていくのであつた。

黑板の上の文字を読みつゞけながら、私は血湧き肉躍るの想ひに興奮を禁じ得なかつた。

わが第〇部隊は友隊と共に、いよ／＼速力を高め、〇隊司令部からの命令どほり、明日の夜戦決行を企圖きとしてゐる。しかし若し機あらば、晝間決戦に撃つて出る用意も出来てゐるのであつた。航空部隊は、全力反復攻撃の命令をうけて、今も尙、果敢なる攻撃をくりかへしてゐることであらう。

雄渾ゆうこん極きまみなき海戦は既に始つてゐるのだ。とつぷり暮果てた海上に、目に見えない火花がばち



ばちと散つてゐる想ひがする。

征かうぞ！ 征かう！

敵部隊を一隻のこらず撃滅するまでは、断じて攻撃の力をゆるめまい。

上甲板に出てみると、空には星が鈍く光つてゐた。どうやら天候はぐづつきだしたらしい。夜半になつてスコールがやつてくるのかもしれない。

甲板員の水兵たちは、忙しさに、そしていつもより一層元氣に甲板の上を走りまはつてゐる。それは彼等の傳達する號令や懸聲の強い響きによつても、それと知れる。

(何だか、これからお祭りが始まるやうな調子だ。途方もなく朗らかで、そして莫迦に景氣がいゝぢやないか！)

さう思つた瞬間、私までがいつの間にか共に笑顔になつてゐた。これが死闘の海戦の前夜なのだらうか、死んでいく者の悲哀もなければ、又不吉な影さへ更に認められない。お祭りだ。どうしてもお祭りの前夜の風景である。ふしぎな氣がするが、この通りなんだから仕方がない。

(司令官艦長以下〇等水兵まで〇〇名が一緒になつて地獄行きなんだ。なんと賑やかな冥途の旅ぢやないか。これだけで乗込めば、冥途を掃蕩してしまふなんかわけはない。そこでこつちから

持つていつた軍艦旗を高々と樹てるさ、ふふふ、こいつは悪くないぞ。)

さつき誰かがそんな冗談をいつてゐたのを思ひ出した。

(八)

〇月〇日(續)

私は、やたらに腹が減つた。

その夜は、夜食に大きな井どんぶりに山盛りのうどんが出たが、私はその底に残つた一滴のおつゆまでべろりと嘗めてしまつた。

それでもまだ腹が減つてたまらなかつた。

從兵にいつて、パイナップルの罐詰をあけてもらつて、むしやく喰つた。

しかしそれでもまだ腹がはつたやうな氣がしない。そこで自分の部屋に戻り、引出しにしまつてあつたビスケットの紙袋をべりく〜とやぶいて、手づかみでむしやくやつてゐるところを、部屋へ歸つて來たC隊長に見られてしまつた。

『やあ先生。仲々悠々たるものですなあ。』



「いや、とんでもない。C隊長、どういふものか腹が減つて仕方がないのです。いくら喰つても腹が膨れないのですよ。」

「は、あ、そんなに腹が減りますか。ふしぎだなあ。やつぱり、今日は艦内がごた／＼してゐるので、先生もあつちこつちと動き廻られるせいでせうが。」

「さうかもしれないね。そしてやけに眠くなるんです。ちよつと椅子に腰をかけたとしても、のなら、すぐ居睡りが出るのですが、へんですね。」

「ふーん、そんなに睡いですか。それはどういふわけかな。」

いつもなら、まだ眼が冴々してゐる筈なのに、夜に入つてから眠くてならぬ、いや夜に入つてからだけではない。さういへば晝間も急に睡魔に襲はれることがあつた。興奮してゐながら、ばかに睡くなくなることがあつたのである。決戦前夜の不思議な現象であつた。

C隊長は、防暑服の上衣だけ脱ぐと、すぐベッドの中にもぐりこんだ。

「C隊長もおやすみになられますか。今日はすゐぶんお疲れになつたでせう。」

と私がいへば、隊長はベッドの中につこりと笑つて、

「いや、疲れはしませんが、今のうちに一時間ばかり眠つて置かうと思ひます。部下があまりに

心配しますので、ちよつと休憩をするわけです。」

C隊長にやすんでくださいと、部下が極力すゝめたものらしい。

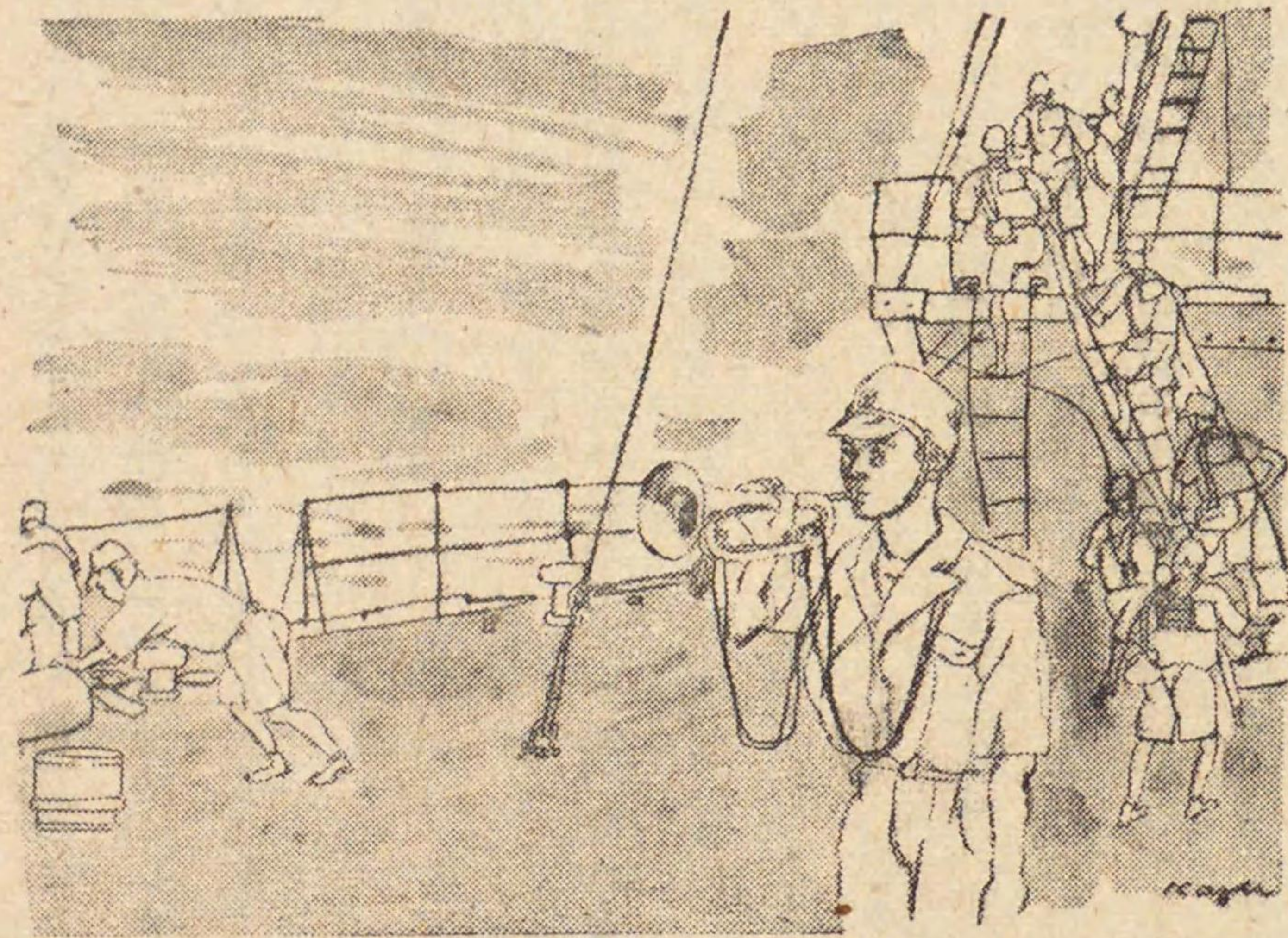
軍艦の中ほど、上と下とがしつくりいつてゐるところは他にはないであらうと、私は思った。

上は司令官や艦長を始め、下は三等水兵に至るまで、生れた年月日はちがふが、死ぬるときは一緒だぞといふ心が、上下をこの上なくしつくりと抱き合はせる。上の者は下の者のことを、うるさいほど面倒を見てやり、又下の者は上の者を身をもつてかばふのであつた。艦内は家族同様の。いや、家族にしても、こんな仲の良い家族はめつたにないと思ふ。

私がビスケットを喰べ終へて、うしろをふりかへつてみたら、C隊長はもうすや／＼と深い睡りにおちてゐた。やがてC隊長の部下が起しに来るまで、ぐつすりと睡られることであらう。私も睡らうかと思つたが、それはやめにした。私が上のベッドにのぼれば、梯子もぎい／＼いふし、ベッドもぎい／＼鳴る。そんなことで折角のC隊長の睡眠を妨害しては、本艦の戦闘に悪い影響が起るやうな気がしたので、それはよした。そして私はそつと部屋を脱け出た。扉も音のしないやうにそつと開いて外に出たのであつた。

上甲板に立つと、舳を洗ふ潮が大きく鳴つてゐた。空には星の光が冴え海は暗黒であつた。私





戦闘用意である。私の身体は急激な緊張に筋肉がぎし／＼鳴るやうに思った。

「敵味方不明の飛行機、〇〇度、〇〇海里……」

敵機来襲か。見張員は塑像のやうに身体を固くして、大きな双眼鏡について機影をじつと追つてゐる。

「水艇だ。」

と、見張員の一人がいつた。

「味方機ぢやないか。」

「距離が遠いから、まだ分らん。」

問ふ人も答へる人も、早口だ。

私は、首にさげた双眼鏡をとりなほして目に當てたが、もちろん機影は見えなかつ

はじつと目をこらして舳の向ふを見詰めた。後續艦の影が、かすかに見える。

(仲間は、今ごろ何をし、何を想つてゐるかしらん。)

共に決戦に征く仲間の報道班員の身の上、俄に心配になつた。

戦 況 電 報

(一)

〇月〇日

早曉起床して、艦橋に立つ。

海暗けれど、晴天である。星影のこりて、瞬かす、壁に描きたる星の如くである。

僚艦より飛行機飛び立ち、翼をそるへて南方に去る。もちろんこれは索敵のためだ。

午前五時少し前、突如としてラツパが鳴る。

『配置につけ!』



た。たゞ朝やけの雲がぼんやりと空中に漂つてゐるのが鏡底にうつつただけ。

先任参謀が、大きな双眼鏡の一つにとりついた。その下から先任参謀の太い髭が見える。私はその髭をじつと見守つてゐた。しばらくして髭がびく／＼と慄へた。と思つたら先任参謀の口が動いた。

『味方機だ。味方の水艇だ。』

何のことだ。

當直及び要部の部員だけ残つて、一先づ分れとなつた。

私はやつぱり艦橋に踏み停つてゐた。

電報が入るたびに、少しづつ戦況が明かになる。

総合すると、わが航空部隊は、昨日以來〇〇基地より敵の機動部隊に對して果敢なる攻撃をくりかへし、敵の航空母艦一隻を撃沈したる外、更に航空母艦又は戦艦一隻に大火災を生ぜしめたが、この際わが機は體當りをもつて敵をやつつけたといふのであつた。

私は、わが航空部隊の損害程度が氣に懸つて仕方がなかつた。しかし電文には、まだそのことがはつきり出てゐなかつた。どうかなるべく損害の少いやうにと心の中で祈つたのであつたが、

島より遠方の洋上に於ける急速果敢なる攻撃のことだし、敵は航空母艦や戦艦を持つてゐるので、その戦闘機の攻撃や、艦上からの對空火器が頗る威力あるものであることを想ひ、仲々軽い損害ではすまないやうな氣がした。

食事時間となつたので、私は艦橋を下りて士官室に入つた。

士官室の食卓は、目下のソロモン沖の戦況で賑はつてゐる。

『隊長機が體當りをやつたさうぢや。あの男なら、それ位のことをやるだらう。』

『やつぱり、體當りをやつたか。あの隊長は輕率に體當りをやつちやいかんと、部下によういつとつたさうだが、それを自らやつたといふのは、よく／＼のことだつたらしいのう。』

『眞先に體當りをやつたといふ話だ。だから、慎重に考へた末、やつたにちがひない。これはつまり敵が意外な大物であるから、どうしても早くこれを確實に撃沈しなければならぬといふので、遂に體當りを喰らはしたのだらうと思ふ。體當りをやれば、命中度は最も正確だからなあ。』

『さうぢやらう。あの際確實を期するためには、體當りが必要なりといふ情況判斷でやつたに違ひあるまい。立派な事をやりよつた。』

『さうなると、すこし心配になつてきたぞ。』



『何が心配か。』

『敵艦隊は逃げてしまやせんかなあ。折角の艦隊が空母一隻撃沈、空母又は戦艦一隻大火災では、もう敵の攻撃力は半減以下となつたぢやないか。さうなると、もういかんといふので引返しやせんかなあ。さうなれば、昨日以來お互にうんと膨らました力瘤のやり場に困るぞ。』

『つまり豫言をするな。敵にさうたびく逃げられて、たまるものか、敵よ來々だ。』

『さう聞くと、俺も心配になつてきた。』

敵艦隊が逃げかへりはせぬかと心配する士官の數が殖えてきた。その答を決するのは、索敵に出た飛行機からの報告であるが、どうしたわけか、その報告は未だに無し。

(11)

○月○日(續)

朝食後、私は自室へ歸つて、少しばかり眠つた。腹が膨れると、ぶつたふれさうに眠くなり、どうにも仕様がなかつたからであつた。

いつの間にかぐつすり睡つて一時間ほど経つたが、その覺め際に私は一つの夢を見て、はつとした。はつとするやうな夢を見たから目が覺めたのであつた。

その夢の中で、私はソロモン沖に出撃して敵の空母をしきりに追ひかけまはしてゐた。私は自ら中型攻撃機を操縦してゐた。私は敵の空母の一つくを狙つては、爆彈投下の號令をかけた。するとそのたびに爆彈が兎の糞のやうにぼろくくと落下した。爆彈は必ず敵艦に命中した。眞赤な花のやうに炸裂するのが私の席から手にとるやうに眺められ、ついで白い波紋が擴がつて敵艦が海中に吸込まれるやうに沈没していくのが分つた。私は、この勢ひに乗じて敵艦隊を殲滅してしまはうと思ひ、敵の空母を一つく正確に片づけていつた。

ところが、いくら私が忙しく爆撃をしても、敵空母の數が減らないのに氣がついた。あとからあとへと、新手の空母が現れるのであつた。これはいかん！と思ひながら、尙も一生懸命爆撃をやつてゐると、うしろから私の肩を叩く者がある。ふりかへつてみると、仲間の報道班員の田方君だつた。彼は眉をひそめて、

『センセイ、もつとあると思つた爆彈が、もう一つもないんだ。これぢやもう仕事ができな  
しよ。』



といふ。私はどきんとした。

『そんな筈はない。南部君が知つてゐるよ。爆弾はうんと積込んだ。』

『いや、それがさうぢやないんだ。トノサマが積込んだのはパイパイだ。爆弾の代りにパイパイを積込むなんてけしからん。』

私はびつくりした。しかしトノサマこと南部記者のやりさうなことであつた。

『ぢやトノサマをこゝへ呼んでこい。』

と私がいふと、奥から南部記者が、青いパイパイを手にして傍へやつてきた。

『おい南部君、パイパイは陸へあがればいくらでも喰へるぢやないか。われ／＼に無断で、爆弾の代りにパイパイを積込むなんて困るよ。』

と、私が突込むと、南部記者は平氣な顔でパイパイを私の方へさしだし、

『まあ、これを持つてごらん。』

といふ。私はふしぎに思つて、その青いパイパイを持つと、ずつしりと重い。さてはと思つたとき、南部記者は、

『そら分るだらう。これはパイパイの形をした偽裝爆弾だ。僕が大事にしてゐたことがわかるだ

らう。これぢやなければ、敵のサラトガは参らないんだ。ほら、今見える一番大きいのがサラトガだ。僕がやつてみるから見てをれ。』

といふが早い、窓硝子を開いて、えいやつとパイパイを投げ下ろした。それが見事にサラトガに命中して、敵の艦載機は、まるで飛魚のやうに海中へ投出され、艦はぐらつと右へ傾き、濛濛と黒煙をふき出して沈み始めた。敵兵は左舷の上甲板にしがみつき、悲鳴をあげる。もうすぐ沈没だ。

『ほつほう。待つてゐました、こいつは金勳の報道寫真だ。』

と、私の前に乗り出して來てカメラを向けたのは寫真班の蘆田君だつた。が、彼は私の方をぶりむいて、

『センセイ、ちよつと敵に英語で聲をかけてくれませんか。海中へ飛び込むのは、ちよつと待つてくれ。甲板にしがみついたところを一枚寫真に撮るから……』

といふ。すると南部君も前へ乗り出して、

『さうだ、沈没は少し待つてもらつたがいゝ。僕は彼等の感想を聞いて記事を取る。』  
といつて手帖をポケットから出す。私は時計を見て、



『とてもそんな時間はないよ。わが機が體當りするまで、あともう四秒かない！』といふと、

『もつと我慢をして、もうあと十二分、時間を延ばしてくれ。』

『駄目だ。さうはいかん。もうぎり／＼だ。』

『いや、もつと延ばせ。』

『いやもういかん！』で目が覺めた。

私の膀胱は、ゴム毬のやうに膨らんでゐた。

## (三)

士官室を出て、私は上甲板に出た。

風は鋼索に呻つてゐる。艦は第〇戦速で、まつしぐらに南下を續けてゐるのだ。

舷の下を、泡立つ白浪が一面にひろがり、洪水のやうに流れ去る。

私は、ふと目をあげて、ハンドレール越しに海面を見た。

『ほう、これはすごいぞ！』

と、私は思はず、聲に出して愕いた。

いつの間に集つたか、本艦の周囲には、各種の軍艦が夥しく集つてゐる。いつの間にか大艦隊になつてしまつたのだ。手荒く浪を蹴つて、南を指して進む大艦隊の威容！

『すごいなあ！』

私は、再度聲を出した。

決戦はもう間近だ。誰でも、一同この海を壓する大艦隊の威容を見れば、それと分るにちがひない。後續の軍艦〇〇に乗つてゐる報道班員の蘆田君や田方君は、さぞ夢中になつて、レンズを今盛んに向けてゐることであらう。私はハンドレールにつかまつて、後續艦の方を見た。後續艦は、大きなうねりの上に、ゆつたりと艦體を左右に揺すぶりながら、ついて来る。

これで、敵艦隊にぶつかつたとすると、更にすごいことが始るにちがひない。敵に戦艦ありとも航空母艦ありとも、何程のことがあらうか。

見敵必殺！

さつきも士官室の黑板に、わが砲術長がこの四文字を謹書してゐるのを見掛けた。それは砲術長の癖であつたが、本日は、この見敵必殺の四文字が特に意義ふかい。

『海野さん。』



と、私はうしろから呼びかけられた。ふりかへつてみると、副長が立つてゐる。西郷隆盛のやうに大きい身体と大きい肩と、そして大きい眼とを持つてゐるこの副長は、本艦の中で一番やさしい人だ。

「は。」

私が驚いて敬禮をすると、副長もそれをかへし、私の顔を見てにこ／＼と笑み、

「私は心配してゐたが、あなたは船酔ひをあまり感じないですね。」  
といはれた。

「あゝ船酔ひですか。さうですなあ、今だいぶんうねりがあるやうですが、これ位揺れてゐると、却つて食欲がすゝみます。いくら喰つても、どうも腹が膨れないので困ります。」

といふと、副長は私の腹を防暑服の上から見て、笑ひだした。

「さすがは、海軍報道班員ですなあ。」

「ところが、私が船酔ひしないことについては、ちよつと譯があるのです。」

私は、思はせぶりの返事をした。

「譯といふと？」

「お呪ひです。船に酔はないお呪ひを教はつて知つてゐるのです。仲々よく利くお呪ひです。」

「それはどういふお呪ひですか。私も聞いて覚えて置きたい。」

副長は大きな目をぐる／＼動かして、私を催促した。

「そのお呪ひといふは、自分は決して船酔ひをしないぞ、と、自分に催眠術を懸はることで、それがうまく懸つたら、絶対に船酔ひはしないのです。」

「ほう、それがお呪ひですか。」

「とてもよく利くお呪ひです。そのお蔭で、私もこのとほり……」

といつて、私は自分の胃袋の上をとんと叩いてみせた。

(四)

上甲板で私が副長と立ち話をしてゐると、そこへ水雷科の前任兵曹長がやつてきた。何か用事があるらしい。

この兵曹長は、身体はさう大きくないが、まつくろに潮やけた顔は、見るからに逞しく、しかも兩頬に鬚が濃く、甲冑を着たらさぞよく似合ふだらうと思はれる古武士然たる仁だつた。い



つもとこやかに笑ひを含んで朗かに見える兵曹長だつたが、どういふわけか今日はいやに眞面目な顔をしてござる。

副長の大きな目が、ぐるつと動いて、兵曹長の顔に釘づけとなる。

『副長。』

先任兵曹長は、改まつた聲を出して、副長の前に直立した。

『おう。』

副長は、兵曹長の様子がいつもとは違ふので、おやといふ風に、ちよつと微笑する。

『副長に、特にお願いがあります。』

『願ひ？ 何か。』

『それは、今夜ぜひとも魚雷をうたせていたゞきたいのであります。』

先任兵曹長は、魚雷の係りだから、魚雷をうつのにふしぎはない。しかるに改まつてこの願ひだ。

『うん、多分さうなるだらう。』

『そこで副長、きついお願いであります。今夜は本艦を敵の空母から〇〇米以内のところまで

近づけていたゞきたいのであります。』

『〇〇米？ すゑぶん敵艦間近だね。』

『はい、間近であります。副長、ぜひさうしていただゞきたいのであります。私としましては、もつと遠くから發射しても充分自信があるのであります。今夜の魚雷攻撃は絶対命中でなければなりません。本艦の責任は重大、従つて私の責任亦甚だ重大であります。命中か否かは、私一個の名譽の問題ではなくて、實に皇國の安危に懸つてをります。故に、私としては、自信のある上にも、もつと自信があつて、これなら絶対外れること無しといふところまで近づいて、魚雷を敵空母の胸中にぶちこみたいのであります。それでありますからして、決して私の自信が鈍つたのではないが、ぜひ〇〇米以内へ本艦を突込んでいたゞきたいのであります。發射距離を私が短縮したといつて、嗤ふ者あらば勝手に嗤へ。この二十年叩きあげた私の名譽なんかどうなつてもよい。私は今夜一射をもつて間違ひなく敵艦を海底に葬り去らねばならない。副長ぜひそのやうにして、私に一射命中をさせていたゞきたいのであります。』

先任兵曹長の一言一句に、くろがねのやうな力が入る。自分の名譽を犠牲にしていゝから、ぜひとも絶対一射命中のところまで本艦を敵空母に近づけてくれと懇願してゐるのだ。



副長は、無言で二三度肯いた。前任兵曹長の奇特な決意に對し、云ふべき言葉が俄に見つからないためであらう。

『副長。どうか願ひます。』

兵曹長は、眞心を顔一杯にあらはしていつた。

副長は、形を改め、

『心配はいらん。前任兵曹長は二十年叩きあげた名譽を今日今夜の魚雷攻撃に懸けるといつたが、本艦の艦長はそれ以上の長い年月を今日今夜のために精進して來られたのだ。又司令官に至つては、もつと長年月を懸けて、今日今夜の爲に鍛錬して來られたのだ。だから心配はいらん。司令官や艦長の方が、何事もずつと深く決心してゐられるのだ。前任兵曹長を失望させるやうなことは決してあるまいと思ふ。安心せよ。』

と、嚙んで含めるやうに云ひきかせた。すると鬼神の如き兵曹長は、始めてにつこりと笑み、『あゝ副長。さういつて下さつたので、私はやうやく氣が晴々となりました。やれ／＼ありがたい。』

といつて、兩肩を隆々と聳やかしたのであつた。

(五)

それにしても氣にかゝるのは、敵艦隊の所在であつた。

本早曉艦を發したわが戦隊の飛行機は、命令された海域をその後もずつと索敵をつゞけ、相當奥深く入つてゐる。しかし更に敵影なしとのことであつた。

一體敵艦隊は、どこへいつてしまつたのであらうか。

前日は、あれほど頻々と敵艦隊の存在を知らせてきた現場に近いわが航空部隊からも、今日はさつぱり報告が來ない。

どうしたことであらうかと、上甲板に集つてくる例の士官室の士官たちの話も、いづれもそこに落ちる。

『やつぱり、逃げたかな。』

『昨夜半までは、敵はたしかに例の針路をとつて北上してをつたさうだ。さつき、さういふ暗號電報を見たよ。しかるに夜が明けてからこつち、さつぱり敵の所在が分らん。』

『ふーん、すると夜半に至つて、敵は遂に襲撃の企圖を放棄して、急遽引返したものだと思はれ



る。折角あそこまで大部隊をもつて突込んで来ながら引返すとは、なさけない敵だ。』

わが士官には、敵が戦意に乏しいのが齒がゆくてならぬのであつた。

『あんなに小つびどくやられるとは思はなかつたので、遂に戦意喪失したにちがひない。頼みに思ふ航空母艦を一隻撃沈、一隻大破されれば、あとは目ぼしいやつは残つてゐないからなあ。』

『いや、まだ戦艦も残つてゐるらしい。ひよつとすると航空母艦一隻か二三隻はまだちゃんとしてゐる。そのあとには甲巡が四五隻控へてゐるだらう。逃げることはないと思ふんだ。堂々とわが艦隊にぶつかつて来にや嘘だ。』

『はつ／＼、さう思ふのは日本海軍の戦術常識だ。遺憾ながらアメリカ艦隊ではそんな戦術は流行らんのだ。安全第一で逃げていく。軍人としての恥かしいとも何とも思はない。〇〇沖まで押していつたことだけで、大した手柄をたてたと思つてゐるんだよ。』

『なるほど、アメリカ側ぢや、そんなものかな。』

『味方は空母一隻撃沈、一隻大破された。それだけで退却する理由は十分出来たといふので、生残つたアメリカ艦隊の奴らは今ごろはにこ／＼笑つて、こつちを向いて拜んでゐるかもしれん。』  
『D隊長は敵艦隊の中へはいつて見て来たやうなことを云ふね。』

『あゝ何にしても、くそいま／＼しい。戦意のない敵が相手ぢや、こつちはやり切れん。神経衰弱になるよ。』

『神経衰弱？ ふん、なるほど、敵艦隊の來襲目標は、神経戦に在つて、海戦にはなかつたともさへないことはないぞ。こいつはお互に用心せにやららん。』

『やれ／＼、や／＼こしい戦鬪になつたものぢや。』

士官たちは髀肉の嘆にたへないといふ風情に見えた。

正午に近く、わが艦隊の針路は變更された敵が遁走したと推定される方向へ、舳をぐつと向けかへた。

氣が短くて、先の／＼ことがすぐ心配になる性質の私は、このへんでもうがっかりし始めた。

〇〇沖の海戦はこれでもう終つたのだといふ感がしてきて、張りつめた氣持の持つて行き場につた。

その日の晝食は、實にまづかつた。出撃以來、あれほど續いてゐた食慾が、俄にがたと落ちてしまつた。尤もその日の晝食は、赤道直下の手荒く暑い光線がさし込む食卓の上で、ぼつ／＼湯氣のたつ満月井であつたからでもあるが……。



満月井といふのは、親子井の鳥肉の代りに、冷凍の兎肉が身替りになつてゐるしろものだ。満月のときは、黄色いまんまるのお月さまの中に兎がのさばつてみえるところから、この名が由来してゐる。

## (六)

○月○日(續)

その夜の七時半のことだつた。

私は、前にも書いたやうに、敵艦隊にもう遁げられてしまつたと思ひ、がっかりして、くらげのやうになつた身體を士官室の長椅子の上に伏せてゐた。

夕食の味も、さつぱりなくなつた。

身體はすつかり疲れ切つてゐるくせに、さて睡らうかと思つても睡られない。出撃後の身體の調子とは全く反對になつて、目が冴々して睡られなくなつてゐた。どういふわけか分らない。それに引きかへ、士官たちは相變らず假設ベッドの上でぐうぐう睡つてゐる。羨ましくてならぬ。

起きてゐる士官たちは、戦況の話に花を咲かしてゐる。いつもだと、もう將棋や圍碁が始つたり、ランプを切つてゐたり、ギターがぼろん／＼と鳴つてゐる時刻なんだが、さすがに今夜はさういふ風景は全く見られない。

士官たちの話は、〇〇沖に於て敵機動部隊に文字どほりの猛攻をくりかへした航空隊の勇士たちの上に懸つてゐる。

『あいつのことだから、念入りにやつて正確無比の記録を遺憾なく發揮したことだらう。』

『もうちよつと、生かして置きたかつたなあ。せめてサラトガ、レキシントンにぶつつかるときまでは……』

『でも、まだました。主砲一發うたないで終つた武運拙きわれ／＼に較べればなあ。』

『まだ／＼、われ／＼とて、あきらめるのは早すぎる。』

『しかし、たとへ今からぶつかつても、大物がゐないのではつまらん。巡洋艦なんか何隻やつつけても大したことはないよ。』

『いや、まだ空母一隻は残つてゐる筈だ。今回はぜいたくを云はんことにしよう。』

『さうだ。ぜいたくは敵だ!』



『ぜいたくは敵か。おや變だ。こんなときにも、そんな標語を使はねばならんのか。』

『さうとも。そら、例の神経戦のすぢさ。』

わつはつはつと、士官たちは哄笑する。

そのときであつた。士官室の隅にある擴声器から、いきなり勇ましいラツパの音がとび出した。

「配置につけ！」

すは敵襲だ！

士官たちは、『おつ。』と叫ぶと、ばね仕掛の人形のやうに、一せいに椅子からとび上つた。そして壁に突進して帽子と双眼鏡と手袋とを掴み取るが早いか潮の引くやうに、さつと士官室をとび出ていつた。それは全く瞬間の出来ごとだつた。

私はいつか兵學校を見學にいつたとき、あの潑刺たる若き生徒たちが、ラツパの號令一下、部屋から吾勝ちにどつととび出して、廊下をものすごいスピードで駆け出し、階段を二段づつとびあがつていくあの元氣にあふれた光景を見たことがある。私は今士官室で、副長以下の艦の首脳者たちが、配置につけのラツパの響きと共にぱつと立ち、帽子その他を引摺んで艦橋さして駆け出していつたのを見て、先年かの兵學校で見た實に氣持のいゝ光景を想ひ出したのであつた。副

長以下の首脳部の士官たちは毫も老いてゐないのだ。なんといふ元氣、なんといふ頼母しさ。びち／＼してゐるところは、兵學校生徒とすこしも異ならない。何だか、配置につけのラツパと共に、士官たちが急に兵學校生徒に若返つたやうな感じを、私はうけとつたのであつた。

士官室は、空っぽになつた。

いや、完全に空っぽではない。一等隅つこの絶好場所の假設ベッドから、むつくりと軍醫長が起き上つて、うーんと兩臂を伸ばした。

『さあ、今度といふ今度は、本當かなあ。』

戦闘開始となれば、この士官室は忽ち變じて戦時應急治療所となり、軍醫長はこの部屋の主に納まり、この部屋が軍醫長の戦闘配置なのであつた。ひとり悠々たるのも、無理ではない。

(七)

ひとり私は、實は大當惑の渦巻の中にあつた。といふのは、かうして今ごろ戦闘配置につけの號令が出ようとは豫期してゐなかつたのである。例の私の氣短さと、そして先き行き洞察力——實は早合點であることが少くない。——によつて、もう敵の機動部隊は、このあたりの海域から

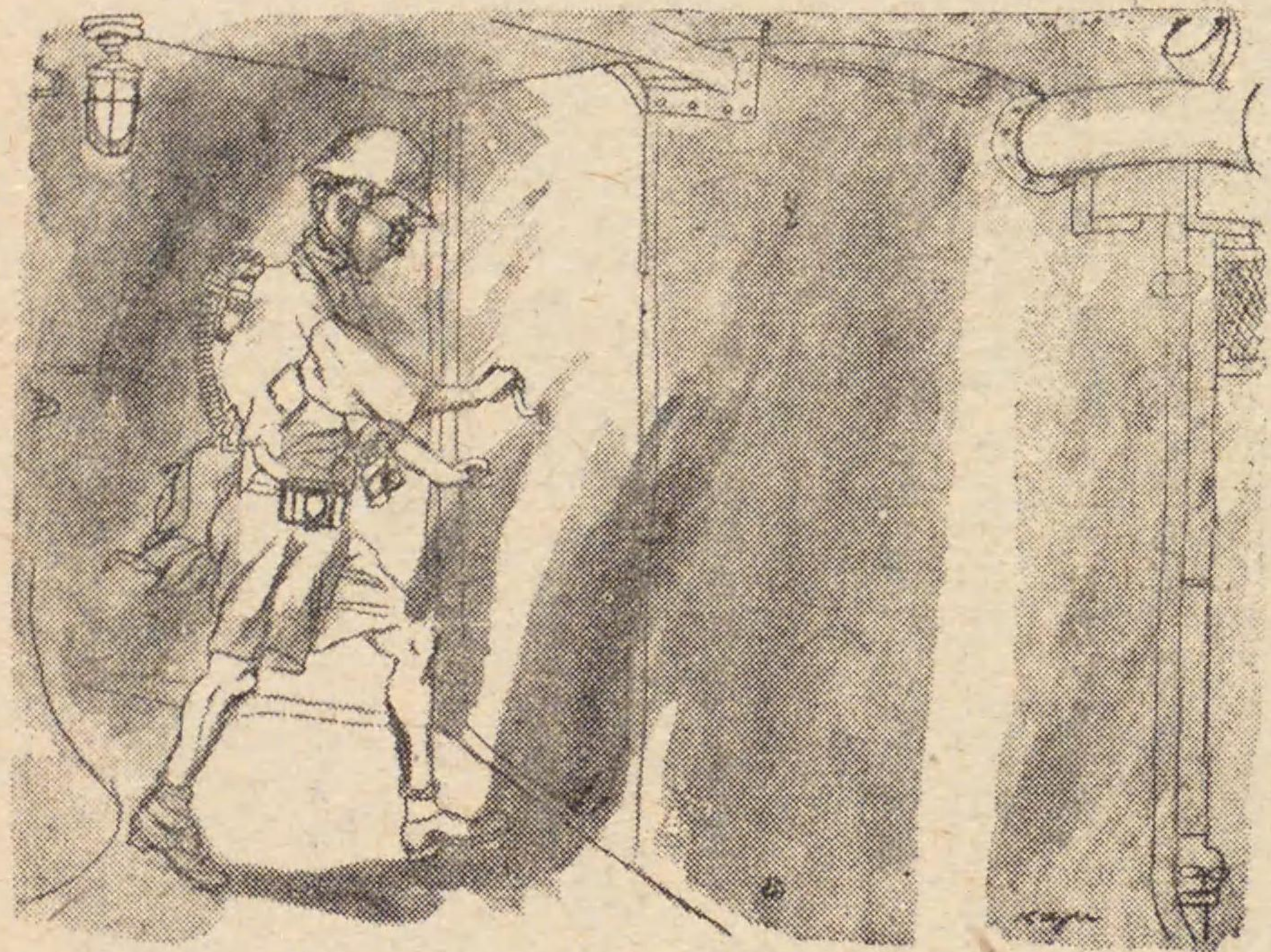


遠く逃げ去つたものと信じてゐた。だから、今艦内に鳴り響いた配置につけのラツパは、私にとつて全く不意打だつた。

しかし私は、おくれを取つたわけではない。大當惑したわけは、私はもう戦闘はないものと思ひ、身のまはりの戦闘用意品をすつかり取外してゐたのであつた。靴さへはいてゐない。水蟲の關係もあつて、草履にはきかへてゐた。双眼鏡も防毒面も、みんな部屋に置いてきた。負傷手當用の日本手拭はもちろんのこと、大砲をうつとき耳の穴につめる綿や懐中電燈もみんな置いてきた。油斷大敵とは正にこのことである。

さういふものなしで艦橋に駈上ることは、甚だ面白くない。誰に見られても、報道班員大いに周章してゐるやうで、私の恥ばかりでなく仲間の恥となる。いかゞせんかと焦慮に赤くなることしばし、遂に意を決して一旦自室へかへり、戦闘用具をつけることにした。そのために艦橋に上る時刻はおくれるが已むを得ない。その間に戦闘がはじまつて、えらいことになれば、私の運がわるいのだといふことに決めた。かういふときには、最後は何でも運命といふものに負んぶするにかぎる。

私は、急ぎ士官室をとび出すと、昇降口をとつくと下に降り、狭い廊下を馳けて自室に戻つ



た。机の上に放り出してあつた防毒面を肩から引つかけ、寫真機を又引つかけ、双眼鏡を又引つかけ、何でも引つかけた末、靴をはき、鐵兜まで被つて、やうやく仕度は出来上つた。この間五分間を要した。

さあこれでよしと、外へ出た。昇降口に手をかけ登らうとするとさあ失敗つた、昇降口の上が、びしやりと閉つてゐる。鐵蓋が下りてしまつたのだ。こゝからは上へ上れない。

これはいけないといふので、私は一旦足をかけた階段から下りると、別の昇降口を探しまはつた。

ところが、かねてこの層から二つか三つ



の通路があつた筈と思ふのに、そこへいつてみると、どうしたわけか、通路が見附からない。いづれも嚴然たる鐵扉が下りてゐる。私は完全にこの小さな區劃に罐詰にされたことを知つておどろいた。(どうしよう?)

私は途方に暮れた。

仕方がないからこの儘部屋へ戻つて、ベッドの中へもぐり込んでしまはうか。いやそれは、あまりに情ない。第一、もし本艦が一發魚雷にやられたとしたら、どうなる。生憎と魚雷がこの小區劃に命中したら、どうだ。この小區劃だけが、ごぼく／＼と浸水して、そして私只ひとりがかゝで溺死するといふ場合も豫想される。もしそんなことがあつたら、私は生命を捨てた上、大恥をかくことになる。

(これはいけない。何とかして、この小區劃から匍ひ出さねばならない!)

私はさう決心した。そこでもう一度昇降口の下に立つて、ぴつたり閉鎖してゐる鐵蓋を見上げた。何とかあの蓋を開く工夫はないものか。

しばらく見上げてゐるうちに、私は鐵蓋の下にハンドルがついてゐることを發見した。あれを廻せば、蓋が開きさうな氣がした。そこで私は階段を昇つて、思切つてそれをやつてみた。

ごとんと音がして、蓋は開いた。そのときのうれしかつたことといつたら……。

(八)

○月○日(續)

昇降口の鐵蓋がうまく開いたので、私はやうやく落着をとりもどすことができた。

その勢ひで、遅れ馳せながら艦橋に駆けのぼる。但し途中で二度ほど向ふ脛をいやといふほどの鐵の階段にぶつつけた。

艦橋に出ると、途端にびゆうつと涼しい風が頬をうつた。潮の香が、ぶうんと鼻をつく。すぐ傍で、鋼索が風に鳴つてピアノ線のやうにびゆん／＼唸つてゐる。艦はもう相當のスピードをあげ、戦闘に備へてゐるのだつた。

私の眼が闇に慣れると、配置についてゐる士官や水兵の姿が見えてきた。左舷前方に、何物かがゐるらしく、双眼鏡も測距儀もみんなその方を向いてゐる。

ふと氣がつくと、私の隣に戦隊機關長が立つてゐて、やはり双眼鏡をそつちの方に向けてゐる。

『戦隊機關長。敵は何者ですか。』



と、私はたづねた。

『やあ、上つてきましたね。船が一隻走つてゐるのです。そら、この見當に灯りが見えるでせう。』

『えつ、灯りをつけた船ですか。そんな大膽なやつがゐるのですか。』

私は、戦隊機關長に教へられてその方向に自分の双眼鏡を向けた。ピントを合はせるためにすこし暇どつたが、その結果辛うじて暗夜の海上にぼつんと灯がついてゐるのを見つけることが出来た。

『見えるでせう。』

『え、點のやうに見えます。』

『ぢやあ、その大きいめがねで見てごらんさい。』

戦隊機關長は、水兵にいつて大きい双眼鏡を私に覗かせてくれた。見える、今度はよく見える。私は愕いた。たしかに船である。輪廓はつきりしないが黒い船體が水平線に横たはり、そして明るい燈火が四つ五つついてゐる。たしかに舷窓の灯と思はれるものが並んでゐる。

『見えます。あれは何者ですか。ずるぶん大膽不敵ですねえ。』

『どうも漁船らしいね。』

こんな話をしてゐるうちに、艦橋からは次々に號令がかけられる。刻々彼我の距離が知らせられる。探照燈がぐるつと向きをかへ、いつでも照射できる姿勢となる。大砲は、ぎい／＼と廻つて、闇の中に敵影へびつたり狙ひを定める。私は何かひやりとしたものを感じた。

號令一下、とたんにかの船は周圍から一齊に探照燈を十文字にうちかけられ、間髪を置かず、全艦隊の砲彈がその上に瀧のやうに落ちかゝるであらう。さうなれば瞬間にかの船も乗つてゐる人たちも煙と化して天空に吹きとぶに違ひない。さういふ恐い運命をさつぱり知らぬげに、かの船は煌々と明りをつけて航行してゐる。見てゐることだが、はらく／＼させられる。

私は寫眞機のレンズの蓋をとつて、艦橋から高く差上げた。今に一齊射撃が始つたら、その壯觀極りなき海戦を寫眞にとらうといふつもりであつた。今は、リリースの端を指で軽く抑へながら、撃ち方始めの號令のかゝる瞬間を今か／＼と固唾をのみながら待つた。

ところが、とつぜん『分れ！』の號令がかゝつたので、拍子ぬけがしてしまつた。敵船かと思はれたのは、やはり漁船であつた。しかも日本の漁船であることが判明したのであつた。私は寫眞機をしまひながら、今度もたうとう武運の神に見放されたと思つた。



傍らを通る士官の話聲が聞えた。

『……向ふちや明りをつけて歩く方が安全だと思つてゐるんだよ。すぐ日本船だといふことが分るからね。それにこの邊にゐるのは、日本の艦隊ばかりだからなあ。たしかに一理はある。』

歸 投

(1)

○月○日

艦隊は、再び○○基地へかへつてきた。

出撃以來、前後○日間の長い索敵行動を終へ、ぐるつと廻つて再びこゝへかへつて來たのであつた。

私たちの乗つてゐる第○戦隊はこの前と同じところにならなくと錨を入れた。

舷窓が久振りに開かれた。さつと涼しい風が、部屋の中に流れ込む。悪くない氣持であつた。

それと同時に、舟艇が下され、活潑に動きだした。舷梯も下ろされた。陸上向けの一番の艇には、先任參謀たちと郵便物の袋がのつてゐる。

舷門には衛兵が立ち、候補生の副直將校が忙しうに海面に目を走らせてゐる。マークもないのに、どうして見分けるのか、本艦へ近づく舟艇を一目で見分けて、その都度當直將校に報告をする。

『軍艦○○の舟艇が來ます。』

『本艦の舟艇が歸ります。』

さうかと思ふと、

『軍艦○○の艦長の舟艇が來ます。』

などと、はつきり乗つてゐる人まで云ひ當てる。私には副直將校がまるで魔術師のやうに思はれた。

水兵が、砲塔の中からぬつと出てくる。その向ふに、別の水兵が艦橋の下蔭から熱心に港の方を眺めてゐる。砲塔から出て來た水兵が、それを見附けてうしろから、びしやりと音のするやうな聲を投げつける。



『おゝ、〇〇一水、何に見とれとるかッ。』

艦橋の下の水兵が、びつくりして後をふり向く。

『あ、なあんだ、〇〇一水か。脅かすなよ。貴様、ちかごろ甲板士官の聲色こゑいろが上手になりやがって、人さわがせだぞ。』

『俺の知つたことか。勝手に貴様らがさわぐのぢや。ところで見えるか。』

さういはれて、相手はきよんとしたが、すぐにやつと笑つて、

『うん。どうやら、やつて来さうな匂におひがするんだ。』

『匂ひがするだけか。まだ見えるのか。』

『もう見えるころだ。あそこに五六艘も、やつてゐる艦船の舳むしのところから、そろ／＼面を出す筈なんぢやが……あつ、来た／＼。噂うわさをすれば影とやらあ……』

非番の水兵の語尾が、すこし虎造張とらぞうばりになる。

『えつ来たか。本當か。』

『たしかに来た。あれに違ひない。舳むしからかきあげる波の恰好かつかうから考へて、たしかにあれだ。』

『さうか、いよ／＼来たか。しめたな。はて、今度はだいぶん溜ためつたらうなあ。少くとも手紙が

五通に小包が二個か一個……』

何を水兵たちがひそかにさわいでゐるのかと思つてゐたら、それは郵便物を搭載たふました船が本艦指して来るのを待つてゐたのだ。いや船ではない。その船が積んでゐる手紙や小包だつた。もちろんそれは、なつかしい内地からのものだつた。

『あんまり前から悦よろこびすぎなよ。この前のやうなことがあるけんう。分隊へ取りにいつたらよ、貴様宛あなた宛のものは一通もなし、嘘うそだと思つたらその邊を匂におひ廻まわつて念入りに探してみろーとやられるぞ。』

歸

『あゝ、あのときは、配置變更の直後のことぢやつたから、仕方がない。今度は必ず来るんだ。なあいゝか。まづおふくろから一通、妹から一通、松坂屋の娘から一通、あとはこの前海南島かみなんとうにゐたとき慰問袋を呉れた國民學校の女生徒二人から一通……』

『あれつ、皆女から来る手紙ばかりぢやないか。こいつそんなに慾張よこしまつて、あとで俺に慰めてくれと泣きついてくるなよ。』

『誰たれがそんなことを……』

115 投

この和やかな風景ふうけいも、〇〇基地に歸投きとうしたればこそである。



○月○日(續)

待ちに待った郵便物がついた。

さつき陸上へいつた本艦の舟艇が、それを受取つて戻つてきたのである。

舷梯を、ズツク製の眞黒な大きい郵便行囊を擔いでどやくくと上つてきた公用使の水兵たちは、それを上甲板にどさりと置いた。

『郵便行囊八個持ち帰りました。』

當直將校に報告する。

囊は舷門前で直ちに主計科の兵員たちで口が開かれる。中からは束になつた手紙類や、色とりどりの包装紙に包んだ小包類があとからあとへ出てくる。そして甲板の上に手紙と小包の小山ができる。

それから紐をといて手紙の選り分けが始る。分隊のものは、甲板に白墨で數字をすらりと書いて、その前に選り分けた郵便物を並べていく。



そのころになると、あたりの砲塔の蔭や艦橋の上や上甲板通路の彼方からも水兵の顔が急に殖える。昇降口からもやたらに水兵がとび出してくる。邪魔にならぬ程度の近き物蔭に人垣を作つてゐる連中もある。皆、選り分け中の郵便物に吸ひつけられてゐる。誰の顔も、にこ〜である。にこにこ顔を見合はせて、肘を突つきあつてゐる者もある。用もないのに用のありさうな顔をして郵便物の傍を通る水兵がある。じろりと郵便物の山を一晒したのはいゝが、とたんに嬉しくなつて急にくづれる自分の顔の始末に困り果て、吾れと吾が頬つぺたをぎゆつとつねつて通りすぎる。



郵便物の人気は下士官や水兵だけではない。士官たちも、いつの間にやらみんな舷門に集つてくる。その前の士官用甲板椅子は満員になる。笑顔でない士官はひとりもない。それが、郵便物の山と、方々からこつちを覗いてゐる水兵の顔とを等分に眺めての上のことである。

『皆、喜んでゐるぞ。水兵の一等喜ぶものはいふと内地から来た郵便物だな。』

『水兵ばかりなものか。貴様も、だらしなくこ／＼しとるぢやないか。』

『ばかをいへ。俺のこ／＼は水兵のこ／＼とは違ふ。どうせ俺のところには今度も又一通も来ないだらう。まあ見てをれ。』

『今度も又といふが、この前は一通来たぢやないか。貴様受取るのを見たぞ。』

『あゝあれか。あれは中學の同窓會の會費領收證だ。全部印刷、名前だけペンで書いてあつただけだ。』

『なあんだ。會費の領收證だつたのか。』

『さうなんだ。しかし會費の領收證でも、郵便物がともかくも一通来たわけだ。一通も来ないよりはまだましだ。はゝゝゝ。』

『さういふ話を聞くと、謹んで前言を取消して、今度は手荒く桃色の封筒入りのやつが来とるこ

とを貴様のために祈るぞ。』

私の掛けてゐる席のとなりへ、水兵が赤い布のついた甲板椅子を持つて来て据ゑた。艦長が来られたのだ。私は立つて敬禮をした。

『やあ海野さん、あなたのところへは郵便物が来ましたか。』

私は残念ながらまだ来ない由を述べた。内地を出てからもう三月になるが、まだ一通も内地から手紙が来ない。女房め、何をしてやがるのだらうと腹が立つ。腹を立てながら、私は家宛にもうずるぶん手紙を書いた。十通位は出した。いやもつと多いかもしれん。

艦長は、小包の山に目をやつて、

『今度は小包が大分多くなつたわう。』

と、につこり笑はれる。

『お留守宅から参りましたか。』

と私が聞けば、艦長は即座に首を左右にふつて打消し、

『僕等士官たちは、小包にはさつぱり縁がない。あの小包はみんな水兵宛ばかりですよ。』

さういつて巨軀をゆすぶつて破顔せられた。



○月○日(續)

『郵便物を渡す。分隊當番、舷門へ集れ。』

舷門の擴声器へ、うれしい號令が吹きこまれる。

待つてゐましたとばかり、方々の昇降口や物蔭から、分隊當番が兎のやうにびよん／＼はね出して駆けつける。その大きな兎諸君の中には、むつかしい面をしてゐるのは一人もゐない。

『おう○分隊、こつちにも一個あるぞ。』

『は／＼！』

あんまりうれしくて、郵便物の山を一つ忘れて駆けだす分隊當番がある。

『持ちきれんぢやないか。分隊からもう一名来いとさへ。』

『は／＼。』

當直將校から何をいはれても感激のは／＼つである。

箱根連山のやうに、あつちにもこつちにも積み上げられてゐた郵便物の山は、また／＼間に綺

麗に無くなつてしまつた。あとに残るのは、白墨で書かれた分隊當番の算用數字と、そして小包の隅からこぼれ落ちた菓子のかげらに煎豆少々。

『甲板掃除。』

ちよつとの間も、ぐづ／＼してゐない。早や次の號令がかゝる。箒を持つた水兵がどや／＼と現れて、郵便物分配でごみつぼくなつた甲板を掃除にかゝる。

そのころ、士官のところへ從兵が郵便物を届けてくる。直ちに甲板で開いてみる士官もある。大つぴらで開いてゐるのは、奥さんや由緒あるウーからの手紙が入つてゐない分だ。多くは、クレオン畫がとび出してくる。

『おい、來たらう、令夫人は何をいつてきた。』

S參謀が、T參謀にきく。

『何もいつて來ん。』

『そんなことがあるものか。さつき從兵から受取つたぢやねえか。』

『あゝ、あれか。』

といつて、參謀はポケットから二つに折つた封筒を引張り出し、中から折つた紙片を摘まみ



出す。

『うちの坊やのクレオン畫だ。はゝゝゝ。』

擴げてみせたその畫には、朝日の出てゐる青い海上にりつばな軍艦がでつかい軍艦旗を掲げて航行してゐるところが描いてある。その前甲板の砲塔のうしろに、銅像のやうに大きい人物が描いてあつて、双眼鏡を目にあて、そして劍をふりあげてゐる。その上に片假名で、イサマシイオトウサマと書いてある。

S 參謀は、T 參謀の坊やのクレオン畫をとりあげて破顔一笑。

『はゝゝゝ、これは愉快だ。イサマシイオトウサマはよかつたね。君んところの坊やは、今年いくつだい。』

S 參謀は生粹きつすゐの東京ツ兒である。

『今年八つだ。今度いよゝ一年生だ。』

『ふーん、一年生五分前にしちや大した出來榮えだ。おやぢよりははるかに優秀だね。』  
おやぢは、てれくささうに笑ふ。

『しかし、このクレオン畫だけか、令夫人の手紙をどこかへ隠しやしないか。』

『隠すものか。うちの女房は手紙を書いたことがない。今度もこのクレオン畫だけだ。』

『へーえ、それはどういふわけかな。武人の妻の嗜たしなみといふところかね。』

T 參謀は笑つて應へず。

『おゝ來たぞ來たぞ、これを見てくれ給へ。』

その向ふで陽氣やうきな聲がする。それは本艦の陽氣隊長と別名ある戰隊機關長の聲だ。見ると、氏は一束の封筒の中から夥しいクレオン畫を引張りだして甲板に並べる。

『これは、お子さまからのですか。』

『いや、さうぢやないんだよ君。これはみんなうちの近所の子供が描いて寄越したんだ。ほつほつ。まだ有る。いくらでも出てくる。』

甲板の上は俄にクレオン畫の展覽會場となつた。士官も水兵も集つて來て、戰隊機關長の背中に爆笑はくさうが湧く。

歸

○月○日

(四)



けふは久方ぶりに上陸許可が出た。

『海野さん、上陸されたらどうです。』

士官室で、副長がさういつてくれる。

『はあ、ありがたうございます。一一三〇艦發ので上陸させて頂きます。』  
つまり晝食後上陸の豫定だと答へたのである。

『さうですか、さつてさつしやう。』

『副長はいつ上陸されますか。』

『私は上陸しません。』

『またお留守番ですか。』

『はゝゝゝ。』

副長は私にはかうして上陸を薦めるが、副長自身は滅多に上陸されない。或る士官の話によると、副長は昨年十一月以來、土を踏んだ事はないさうである。副長は艦の『主婦』であるが故に、滅多に艦を離れないのだと、その士官から説明があつた。家庭を外にして頻々と銀座や百貨店へと出歩きたがる内地の或る方面の主婦たちには、ちと耳が痛い話である。

士官室の入口の垂幕を押分けて水兵が入つてきた。水兵帽に劍を下げ、大きい鞆を掛けてゐる。室内へ敬禮して、

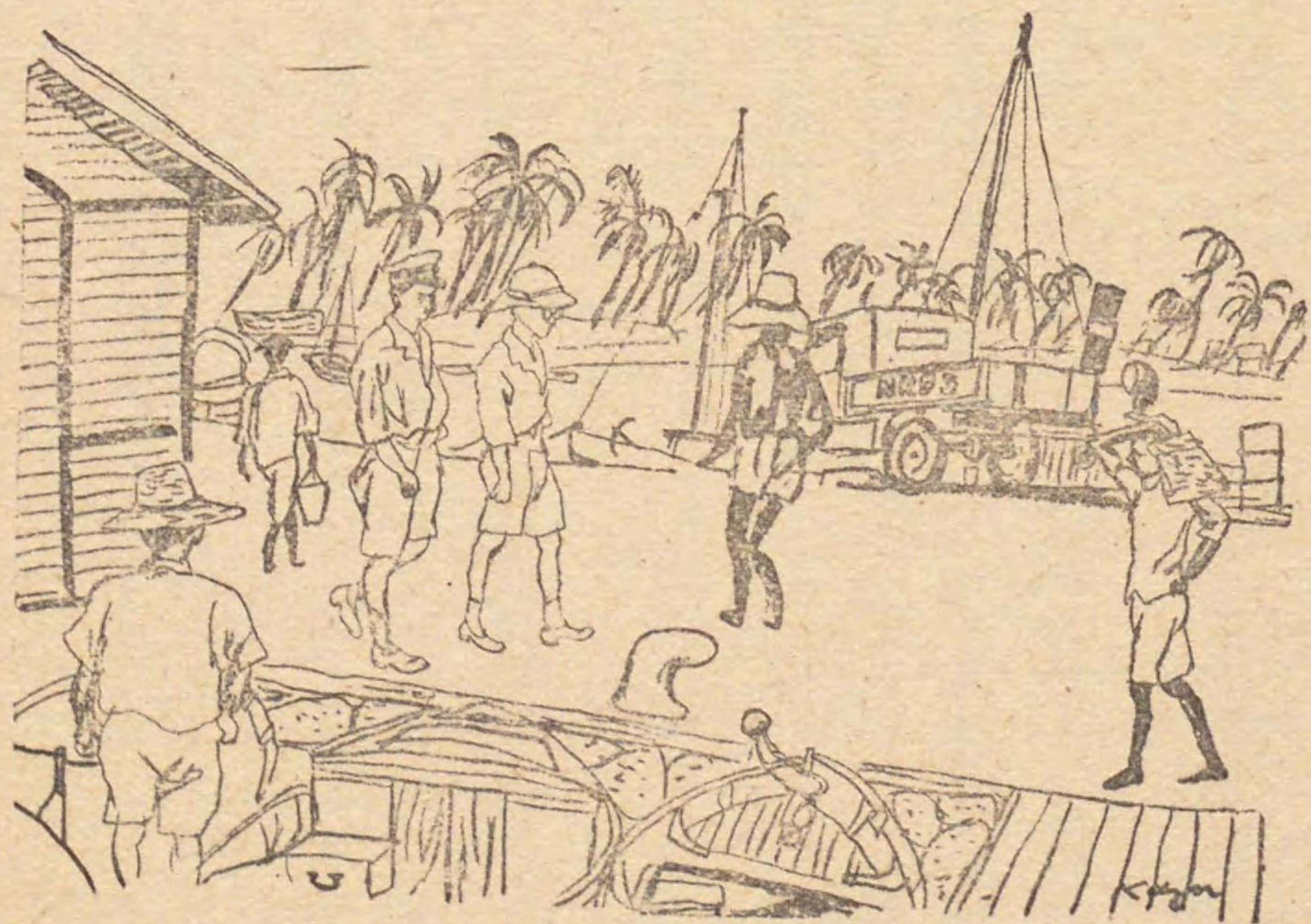
『公用使、出發します。』

と嚴然と唱へる。

それから公用使の水兵は、入口脇の手紙函の中に入つてゐる士官たちの手紙を抜き出し、大きな鞆の口を開いてその中に收めた。いつもは、この手紙函は空であるが、けふは手紙類が一杯差込んであつた。差込み切れないで、その上に載せてあるのもあつた。

公用使が室から出ていく。

『砲術長。ずるぶんたくさん手紙を書い





たね。』

髯ひげの機關長が、例のやさしい横目で、じろりと砲術長の巨軀きよくを見る。

『はゝゝ。機關長は、つまらんことに気がつかれますね。』

立つたまゝ卓上の新聞電報綴の頁ページをくつてゐた砲術長が、童顔をほころばして、てれくささうにいふ。

『士官室の中で、令夫人宛に最も頻繁ひんぱんに手紙を書くのは砲術長だよ。一體毎度何を書くのかね。よくまあ書くことがあるもんだと、わしは不思議でならん。』

『もうよろしい。もうよろしい。』

砲術長は、柄がらになく顔を赭あかくしてゐるが、機關長の髯はまだ動いてゐる。

『わしも家へ手紙を書かにならんと思つて筆をとるのだが、用箋ようせん一枚に文字を填うめるのが骨だ。全く書くことがない。場所を書いてはいかん、戦況を書いてはいかん、暑いと書いてもいかなでは、まだ生きとるぞと書くしかない。それなら一行でお仕舞ひぢや。砲術長にちと手紙の書き方を習ひたいものだ。』

『手紙なら、私より海野うんのさんに教はつてくださる。』

砲術長、たくみに體をかはず。それはいゝが、とんでもないところで、私が引張り出される。『あゝ海野さん。』

と、機關長の髯ひげがこつちへ向く。

『海野さんは、又書くのが専門家とみえて、令夫人宛にずるぶん手紙を書きますなあ。砲術長よりはすつとあなたの方が上だ。わしはちやんと知つてゐますよ。』

機關長は目を細くして笑ふ。私は面喰めんくらつてどぎまぎせざるを得なかつた。

『書くことは書きますが、女房からまだ一通も手紙が來ないので。この點、昨日しこたまお受取りになられた機關長を羨うらやましく思ひます。』

『しこたまも來んですよ。たつた二通だ。しかし内地からの便りは、強力なる砲彈ひつよまに匹敵する。海野さん。令夫人に宛て、さう書くのですよ。わしがさういつたと書いてようがす。すると必ず返事が届く。』

『機關長、實驗ズミと註を入れとくんだね。』

軍醫長がすかさず割り込む。室内に笑聲がどつとあがる。これも歸投風景の一つたることを失はない。



○月○日(續)

晝食後、いよく上陸する。

下士官はうれしさうだ。水兵はそれよりもつとうれしさうで、鬼の首をとつたやうに見える。それもさうであらう。戦死を覚悟した○○沖海戦もまづ無事に終つて一命を拾つたのである。勇士だつて、それがうれしくないといふことはなからう。そして半月目の上陸だから、これもうれしい。しかもこゝはお馴染ふかい○○基地だ。上陸すれば、路でも家の中でもたくさん知人に會へる。

私も、もちろん、兵隊さん以上のうれしい氣持で上陸した。半月前、この地の宿を、仲間、報道班員と共に急遽立ち、わが第○戦隊に乗り込んだことを追憶すると、まるで夢のやうでもあり、はるか過去の出來事のやうにも思はれる。顧みるとこの半月の間に、私もずるぶん變つたやうに思ふ。

色も眞黒に潮やけした。敬禮も、びつたり板について上手になつた。艦と共に戦死の覺悟もつ

いて、あつばれ勇士のお仲間入りしても恥しくない。言葉づかひも、勇士並に齒切れがよくなつた。艦内に於けるたいていの號令も、ちやんと分るやうになつた。すべて我ながら強く逞しくなつた。弱くなつたのは、將棋ぐらゐのものである。南部記者とも、この土地の宿を共に出かけて以來、一度も指したことがない。

(さういへば、今日は軍艦○○の南部君や、それから田方、蘆田の兩君にも連絡して上陸すればよかつたな。)

さう思つたが、これは後の祭だつた。

汽艇が棧橋につく。

士官が始めに下りる。私もそのうしろについて下りる。それから下士官、水兵の順ですこしの滯滞もなくどん／＼下りる。

島は焼けつくやうに暑い。地上を踏んだだけで、これはたまらんと思ふ。一陣の風がさつと過ぎて珊瑚礁の匂ひはぶーんとする。それと共に、白い灰のやうな砂塵が濃々とまひあがる。汗にまみれた頬や首筋が、じやり／＼する。

海上から見てゐるだけの島は、たいへんいゝ。しかし上陸してみても、すぐにがっかりする。そ



の清浄さに於て、艦内生活とは較べものにならな。

だが、日本人が街を通る。色の黒い島民たちが通る。ヘルメット姿の私に會ふと、丁寧に辭儀をして呉れる。私は一々それに對して舉手の禮を返す、艦内ですつかり上達した舉手の禮を見せるはこゝぢやとばかり……。島民たちの顔も、私のきちんとした舉手の答禮に頗る満足のやうに見える。

が、道を行くに從つて、私はますます頻繁に島民たちからお辭儀をされるので、少々肩がこつてきた。お辭儀をされると分つた手前私は胸を張り正しく歩行してゐなければならず、兩側の店內の人物や品物に氣をとられてゐてはならない。つまり大官待遇者として、變な歩き方は許されないわけだ。故に少々肩がこりはじめた次第である。私はさうして、姿勢正しく、島民たちの敬禮に應へて町を歩いてゐるうちに、いつしか〇〇神社に上つてしまつた自分自身を發見して、ありやりやと思つた。

實は、上陸したら、あれとあれとを買ひ、それから例の旅館へいつて冷たい水でも飲ませて貰ひその家族と話をしたり、それからもう一軒、やはり一度宿をして貰つた支店長の宅へいつて、サービスのいゝ店員女史からレモン水でも御馳走にならうかと思つてゐたのであるが、それがお行

儀よく歩いてゐるうちに、自然と〇〇神社へ上りつめてしまつたのである。だからもの勢ひとさふやつは、げに恐し。

(六)

〇月〇日(續)

〇〇神社の階段をのぼりつめたとき、私は急いで涼しい木蔭を求めて、その下に入りこんだ。白いヘルメットを脱ぐと、氷のやうに冷たい風がすーつと頸筋に流れ込む。私は口をあけて、その冷い風を胸一杯に吸ひ込んだ。

(何といふ爽快な風だらう。陸上は、これだから樂だ。)  
と、私は艦内の暑さにひきくらべて、同じ熱帯でも、陸上生活の樂なことをしみくと感じた。

艦の上でも、上甲板はさぞ涼しいと思ふ人があるだらうが、今この木蔭で味つてゐるやうな氷のやうな涼しさは到底ない。第一、こんなによく徹る風がない。第二に、こんなに冷えた土はな。上甲板はいつも手荒く焼けてゐる。おまけに、附近にある砲塔にしろ艦橋にしろ檣にしろ、



みんな銅鐵製であるから熱帯の太陽に照らされてひどく焼けついてゐて、それから反射してくる熱は、朝湯に身を漬けたやうにひり／＼と刺すのである。陸上には至るところ蔭があり、冷い土があり、そして急行列車のやうに速く通り過ぎる風がある。同じ熱帯にしても、陸上は天國である。

私は、そんなことを考へながらなほも涼味を食つてゐた。

すると、神社の下の通りのあたりが俄にさわがしくなつた。荒々しく大地を踏みつける音がする。一人や二人、いや十人や二十人ではない。私は木蔭を立出でて、石段の處まで様子を見にいふた。特別陸戦隊が、石段をのぼつて、こつちへ上つてくるのであつた。先登はもう上り口の石段に足をかけてゐる。街路には隊員があふれてゐる。

隊員たちは、ずん／＼上つてきた。先登の隊長は、辨慶のやうに赭く日やけした髭の勇士だ。

一目見て下士官出身だと分るやうな逞しさの所有者であつた。

私はどういふものか、昔から下士官が好きである。陸軍なら曹長から准尉のあたり、海軍なら一等兵曹から兵曹長のあたりが、たまらなく好きである。そのへんの下士官は逞しさの精のやうなものだ。強靱この上もない鋼のやうなものだ。私はさう思ふ。心も身體も、共に恐しく強い。

あぶなげがないし、微塵の懷疑もない。戦闘に立たせると、坂上田村麿のやうに滅法強い。そのくせ、正しく美しいものには涙もろい。彼等こそ「これが日本人だ」の典型だ。

私は石段を上つてくる下士官たちを特に注目して、私ばかりに効目のある眼の保養をした。

續々と隊伍は石段の下へ現れる。そしてさすがに廣い境内も、濃い草色の軍装いかめしい隊員で一ぱいになつてしまつた。

全員が揃つたところで、社殿に向ひ、隊長の長剣がきらりと閃めくと、捧げ銃の號令。一同は林のやうに銃剣を立てて、嚴かに祭神に禮拜をすませた。

『休め。これより三十分休憩する。その間に各自の携帶品をもう一度檢べよ。その上で、附近の草木を採つて、對空偽装をせよ。』

それから隊長は、別れの號令をかけた。

隊員は又銃ののち、列を解いて、ものしづかに四方へ動きだした。木蔭や社殿脇の蔭へ、隊員は入つた。そして始めて鐵兜を脱いだ。

眞赤な顔に、額からは玉のやうな汗。ポケットから手拭を出してくる／＼と何遍も顔から頸筋をぬぐふ。背中も胸も、服は汗でべと／＼に濡れてゐる。が、誰の眸もらん／＼と燃えてゐて、



疲れの色が見えない。

水筒の栓があつちでもこつちでもぬかれる。

『もうすつかり、南洋にも慣れたなあ。これ見ろ。今日は水筒の水が、まだ三分の二は残つとる。』

水を節約して飲むのも、彼等の訓練の一つらしい。隊員たちは、これから赴く灼熱の戦線のことを想つて辛抱の訓練をやつてゐるのだ。

## (七)

○月○日(續)

一汗入れると、特別陸戦隊の勇士たちは、早もう次の仕事にかゝつてゐた。それは對空偽装をすることだ。

○神社のある低い丘陵一帯には、南洋特有の雑草がうんと繁つてゐる。めい／＼は、それを手折つて来て、境内の木蔭に入つて思ひ／＼の偽装をはじめたのだつた。

背中につけ、腰にぶら下げ、鐵兜にもつける。萱、蔓草、楊柳のやうな小枝などが、たちまち

勇士たちの身體を、緑の毛をもつたはりねずみのやうな形に改める。

向ふの木蔭では、隊長たちばかりが集つてゐる。その周囲には、このへんに住んでゐる日本人の子供と島民の子供とが寄つて来て、隊長たちの偽装をうれし／＼に手傳つてゐる。

『兵隊さん。もつとしやがみなよ、手が届かないから、草がさせないよう。』

『さうかよう。ぢや、かうすればいゝかよう。』

隊長は、子供の熱心な顔をのぞき込みながら、そのいふとほりに大地へどつかと尻を下ろす。

緑の草の代りに、色の眞赤な佛桑華の花をつけてやつてゐる女の子がある。

『だめだ。こんな赤い花……』

と、男の子が、隊長の背中中で女の子にだめをつける。

『だつて、南洋には、赤い花がずるぶん咲いてゐるわよ。花を挿した方がいゝわ。』

『つけるのは、青い草だけだねえ兵隊さん。』

隊長は、首をうしろへ曲げて、自分の肩のところについてゐる赤い花を見て苦笑。

『をちさんは花はきらひではないけれど、花はまあそのくらゐにして、あとは青い草をつけておくれよ。』



と、どつちにも當り觸りのないことばを投げる。

女の子は、持つてゐた花を直ちにその場に捨てて草叢の方へ青草をとりて駈出していく。それに入れ代つて、色の黒い島民の子が隊長の背中に廻つて、楊柳の小枝を丹念に植ゑはじめ。うれしいやうな、はづかしいやうな笑顔に、たえず目をくるく／＼うごかしてゐる島民の子供だつた。

私は、これまでもなるべく子供を見ないこととしてゐた。それは家に残して來た五人のわが兒を憶ひ出すのがつらいからであつた。だが私は、このときばかりは貪るやうに、子供たちの表情や動作を見てゐた。それはあまりにも美しい光景だつたからである。

『ありがたう、ありがたう。もうそのへんでいゝぞ。』  
満身草だらけの隊長が、さういつて、立ち上つた。そして自分の身體をぶる／＼と揺すぶつてみて、

『あゝいかん。枝につかへて、身體が痛い。これぢやぢさんは、刀を抜いて走れんわい。』  
みんながどつと笑つた。

子供の一人が、責任を感じたといふ風に隊長の腰にぶら下るやうにして、折角挿した小枝を一

本一本抜きはじめた。子供の頬は眞赤でつる／＼した汗の條が何本もついてゐた。

それからしばらくして、集合のラツパが鳴り響いた。直ちに全員集合、みんな草を背負つてゐるから社殿の前はたちまち草叢のやうになつてしまつた。

サイドカーの音がしたと思つたら、司令が駈けつけた。私は敬禮をした。隊長は、隊員に向ひこれから始める猛演習について詳細なる説明をした。

『故國を出てから〇箇月、やがて我々の向ふ戦線は、この土地よりもつと／＼暑く、そして果敢なる敵がゐるのであるから、各自はそのことに想ひをいたし、本日の演習に臨むやう希望する。』

隊長はさういつて言葉を結んだ。

烈々の氣魄が、あたりを拂ふ。かういふ陸戦隊を持つていくから皇軍はいつも勝つのだと思つた。私はしばし暑さも忘れ、いよく隊が行動を起して、皆の境内からゐなくなるまで、そこに立ちつくした。



## 新 作 戦 近 し

(1)

○月○日

あぶら蟲が人間を咬むとは、今日の今日まで思つてゐなかつた。どうもこの二三日、夜中になるとちか／＼と腹のあたりや太股や足首を咬まれたのである。始めは南京蟲かと思つた。

しかし南京蟲は軍艦にゐない筈だし、その咬まれた痕を検べてみても、それは南京蟲ののではない。南京蟲なら、咬み傷が二つ並んでついでゐる筈であるが、それが見えないのである。たゞぼつと桃色に、引掻いたやうな痕がついてゐる。蚤でもないし、蚊は艦内にゐない。しからば家だにか、それとも妖怪變化のたぐひかといふかつてゐたところ、私が寢臺の上にごそ／＼太股をつまんだりしてゐるのをみた同室のC隊長は、下から例のやさしい笑顔を向けて、

『先生も、あぶら蟲にくはれましたね。』

といつたので、私は始めて、あぶら蟲が人間を咬むことを知つたのである。

『あぶら蟲が人間をたべますか。』

『たべますとも。痕が赤く大きくふれて、ぢか／＼かゆいでせうが。』

『そのとほりです。C隊長もやられましたか。』

『私は前からやられどほりですよ。これこのとほり……』

C隊長は、裸の背中をこつちへねぢり、腰の上あたりに太い指でぼり／＼掻いた。人一倍白い膚をもつたこの隊長の背中には、くつきりと桃色の斑點がやたらについてゐた。

『ほう、私よりもC隊長の方がすつとひどいですなあ。私よりも味がいゝと見えますねえ。』

『味がいゝといふよりも、この部屋のあぶら蟲は代々私の血で育つた奴だから、遺傳的に私の血が好きなんですよ。』

『とにかく、もつと本格的に退治せにやいけませんね。』

『さうです。先生までくひ始めたとおつては、もう許しちやおけん。よし、今夜から、あぶら蟲地獄を拵へちやらう。』

C隊長は、俄にあぶら蟲に對し掃蕩の決意を固めたやうであつた。



『あぶら蟲地獄を拵へるといふのは、一體どんなことをするのですか。』  
『あゝ、それはですね。』

といひかけて、C隊長はにやりと笑つて室内を見廻し、

『それはいひますまい。隣にスパイあり、壁にアブラ蟲あり、うつかり機密を喋ると、折角のものが役に立ちません、はゝゝゝ、本當ですよ。』

部屋の中にも、防諜といふことはあつたのである。いやそれはともかくもとして、私たちはかういふ知れ切つた昔の小咄を何番煎じにかして、ちよつと軽い氣持にならうと努めるのであつた。

碇泊してゐるとき、毎日私にとつてうれしいのは、軍艦旗掲揚があることだ。私は、それに列するのが、この上なくうれしい。後甲板に私も士官たちと一緒に並んで嚙喰たる君が代のラツパと大櫓にのぼつていくあの旭日の軍艦旗！じつと舉手をつゞけ、瞳をだん／＼と旗の上の方へあげていくと、やがて軍艦旗は朝風をうけてひら／＼とはためく。そして斜桁の下にびつたりと鎮まる。

わづか一分たらずの短い間だけれど私はふかい感激に全身のふるふのを覚える。徴兵検査のときは第二乙で直ちに第二國民兵に廻された身である。永久に軍隊生活が出来ないかと萬事諦めて



ゐたのに、大東亞戦争のおかげで、そして作家になつてゐたおかげで、かうして海軍報道班員に徴用せられ、軍艦の一員として軍艦旗の下に働くことが出来るなんて、全く思ひがけない光榮である。私は毎朝軍艦旗を仰いでは、光榮に胸ふるへ、そして醜の御楯となつてこの旗の下に死なんことを冀ふのであつた。

(11)

○月○日(續)

體操がすんで、晝食になる。例により秋刀魚が出る。

そのあとで、食卓に立つて、うしろの長



椅子の上で涼んでゐると、副長が傍に腰をおろして、人なつこい大きな眼を私に向ける。

『昨日は上陸されましたね。』

『ええ、やらせて頂きました。』

『陸上はどうですか。どこへいつてこられました。』

『陸上は駄目ですね。私は前から陸上には腹が立つてゐるのです。』

と、私はいつになく斷乎としていつた。

『ほう、それはどうして……』

『私は、陸上を歩いてゐる水兵さんの姿を見るたびに、さう思ふのですが、折角上つても水兵さんの休むところもなく、楽しむところもない。全く氣の毒ですよ。僅にアイスクャンデー屋の前に行列をつくつてゐる。アイスクャンデーの外に、何にも楽しむものがないのです。あれぢやいかなですね。』

私は水兵さんのため昨日も亦、腹が立つて仕方がなかつた。

『戦争中だから、餘計に手が廻らんですよ。』

副長は、代つて辯解される。

『大した金はいらんです。簡易圖書館を拵へて、新聞と雑誌を備へ附けるだけでもいゝと思ひます。みんな新聞に飢えてゐますからね。尤も、この士官室でも四十日もおくれた新聞を讀んでゐる。陸上には、内地からの航空便も頻繁にあるわけだから、最新の新聞を備へることもわけはないと思ふのです。』

『それはいゝですね。』

『それから室内遊戯の道具、たとへばピンポン臺とか撞球——これはちと金がかゝるが——さういふものを置く、将棋盤や碁盤はもちろんです。コリントゲームもいゝ。そしてせめて一杯の冷い紅茶かアイスクリームぐらゐ——それも十分衛生的なものを給與することが出来るやうにしてあげたい。それから晝寝用に、あの懐しい疊を敷いた廣間をこしらへる。これだけ揃へば水兵さんはどんなによろこぶかしれません。』

『ぜひ揃へるべきですね。』

『慾をいへば、いゝ蓄音器を置いて、レコード鑑賞會のやうなものをやるのです。和樂と洋樂ぐらゐに分けて二部屋欲しい。』

『いゝなあ。』



副長は一々同感してくれる。

『そしてあなたは昨日どうされたのです。』

『私ですか。〇〇神社の境内で陸戦隊の演習を見て暮しました。それから木蔭で水兵さんのため今いつたやうなことを思つて腹を立てたり計畫をたてたりして、すーつと眞直ぐ本艦へ歸つて來ました。』

『なるほど。それでは海野さんが珍しく腹を立てるのも尤もですね。前にをられた旅館へはいかれなかつたのですか。』

『始めはいくつもりでしたが、やめました。』

『どうしてですか。』

『あゝいふところへいくと、折角かうして軍人らしいきりつとした氣持になつてゐるのが、一遍に焼きが戻るやうに思ひましてね、惜しくてならなかつたのです。』

『はゝゝ、焼きが戻るですか。しかし、あまり緊張しすぎてゐると身體を壊しますよ。注意して下さい。』

あとはやさしく副長にたしなめられた。

昨日は全くさういふ氣がしたのだ。おまけに、あのとほり眞剣な猛演習ぶりを見ては、あれから自分だけ疊の上で足を伸ばさうなどといふ氣になれるものではない。だが、副長の最後の言葉は、意味深長だ。『あんまり緊張しすぎてゐると身體を壊しますよ』さういはれると、どうもこのごろよく睡られないが、何かもう影響してゐるのかもしれない。本艦へ來てもう二十日だ。

(III)

甲板士官の一人であるQ候補生が、私の前に來て、

『海野さん、今夜巡檢について艦内を見廻らされてはいかゞですか。』

と薦めてくれた。

巡檢は夜になつて行はれるが、このときは副長が艦内隈なく各分隊を巡檢して下士官や兵の狀態をしらべ、また整頓の狀況などを檢分して、異状がないかどうかを確めるのである。巡檢後、睡眠していゝことになつてゐる。しかし巡檢後、まだ眠らないで、手紙を書いたり將棋をさしたりすることも許されてゐる。この巡檢は、碇泊中だけに行はれるので、航海中はそのことがない。全艦異状なしといふことが分つて、始めて副長の重荷が下りるのである。



副長の巡検の前に、巡検豫行がある。これは甲板士官が巡検するのである。それに衛兵伍長がついて行く。甲板士官の巡検豫行は、非常にきびしい。そのきびしい巡検豫行をうけて、掃除をやり直すとか、いけないところを改めるとかしておいて、やがて副長の巡検になつたときまでにそれが正しくなつてゐないと、えらく叱られるのである。副長巡検のときは、うしろに甲板士官と衛兵伍長がついてゐる。

巡検によつて、艦内の風紀状態も分るし、士氣が緊張してゐるか弛緩してゐるかも分るし、これは一日のうちで一番重大なる行事であるといつても過言ではない。

かねて私も、巡検について廻りたいと思つてゐたところへ、甲板士官のQ候補生が薦めてくれたものだから、直ちにお願ひした。

『ありがたう。ぜひお願ひします。』

すると甲板士官は、にっこり笑つて、

『では〇時、副長寢室前に出てゐて下さい。私が來ます。』と、親切にいつてくれる。

一體この甲板士官といふのは、艦内で最も威勢のいゝ任務であつて、甲板士官のやり方によつ

て、兵員たちが元氣にもなれば、ひよろ／＼にもなる。

端艇などを海面から艦内にとり込むときなど、端艇の両端にロープがついてゐるが、これを滑車の間をとほしてロープを甲板に長く延ばし、これを甲板員の水兵たちが恰も綱曳きのやうに握り、力を併せてどつと引張りながら走るのである。するとあの重い端艇もす／＼と一度に軽々と甲板へ上つてくるのである。この、どつと綱を曳き端艇を吊りあげるときに、いゝ甲板士官だつたら、一呼吸でする／＼とあげてしまふが、その甲板士官がよくないと、いくら號令をかけても、決してす／＼と端艇は上らない。

萬事がこの調子で、天幕を張ることにしろ、舷梯を引上げることにしろ、甲板掃除にしろ、甲板士官のやり方一つで、その作業に非常に差がつくのである。いつもぎやん／＼叱つてばかりゐてもいけないし、さうかといつてやさしすぎてはいけない。甲板士官は、兵員の模範であるとともに隊長でもあり又憧れの的であり、そして又姉のやうにやさしくなくてはならない。中々むつかしい任務である。

甲板士官のいきのいゝのがゐる軍艦は、いつも潑刺としてゐるし、さうでないと、水兵などが徒らにのたり／＼としてゐる。



甲板士官は一人ではない。候補生の甲板士官が一等下である。しかし候補生の甲板士官は一等びち／＼してゐる。叱ることも大いに叱る。遠慮もなく容赦もなく、びし／＼とやるところが候補生の特長である。江田島で四年間、みつちりと兵學校生徒として鋼のやうに鍛錬されて來て、それを今度は兵員に向つて發揮するわけだから、中々猛烈なものも無理はない。私はその夜、この威勢のいゝ候補生甲板士官がどんなことを見せてくれるかと、夜になるのが大變待たれた。

## (四)

○月○日(續)

夕食後、私は甲板士官Q候補生に約束したとほり、副長寢室の前に待つてゐた。それは定刻五分前であつた。

すべて艦内では、五分前にあらゆる準備を了るやうに命令されてゐる。だからして、諸作業などの號令も、すべて五分前が知らせられる。この前もちよつと書いたが『甲板員作業始め五分前!』だの『總員起し五分前!』だのといふ號令があるわけである。すべて五分前に準備を了れ

といふやり方は、ものが手がひなくきちんといつてよろしい。私もこの『五分前』を尊重して、五分前に副長寢室の前に立つたわけである。

すると待つほどもなく、候補生が伍長をつれてやつて來た。

『やあ。甲板士官、願ひます。』

願ひます——といふ言葉も、海軍語としてはたいへんいゝ言葉である。至るところ至るときに、この願ひますとか、お願ひするとかいふ言葉が出る。非常に柔かい言葉だ。そして深い信頼と敬意とに充ちた言葉だ。

『それではどうぞこつちへ來て下さい。』

Q候補生は、もう巡檢の顔になつてゐる。

區劃の高い敷居(?)をまたぐと、とたんに、

『巡檢。』

と伍長が怒鳴つたものである。かーんと櫂の棒が、そのへんの鐵壁にぶちあたつて音を出した。

甲板士官が最初にとび込んでいつたところは、士官室厨房だ。これはいつも私たちが厄介になるところで、『ラムネありますか。』とか『パイ罐一つたのみます。』とかいつて、何とかして貰ふ



ところだ。士官はそんなことをいはない。『従兵、ラムネ呉れ。』とか『従兵、一本つけ。』とか、至極簡単に云ふ。すると士官室に立つてゐる従兵が、小さな暖簾のれんのかゝてゐる窓口からこの士官室厨房を覗きこんで『運用長、ラムネ一本。』とか『水雷長、酒一本、猪口二個。』とかいふのである。するとこの厨房の中で、さういふものが調達されるのである。従兵長は、帳面を開いて、それ／＼の欄に克明こくめいに點數をつけていく。

甲板士官は、まづこの士官室厨房にとびこんで、室内をぐるつと見廻したと思ふと、さつと身體を翻ひるがへして、棚の上に重ねてある皿の山のところへとんで行き、その皿をひつくりかへして、裏を見た。左手には大型の携帶電燈を持つてゐるが、これを皿の裏にぱつと照らしつけ、指でござしこすつてみた。私はひやりとした。もしこのとき指でこすつて痕あとがつけば、忽ち従兵たちは甲板士官からどえらく叱りつけられることであつたらう。幸ひにも甲板士官は、無言のまゝ皿を元へ戻した。

アルミの鍋がある。甲板士官の手はつと伸びてその蓋ふたをとつた。中はきれいに洗はれてゐた。抽斗ひきだしをあけた。内は空だ。

尙も甲板士官は、室内をぐる／＼見廻す。こんどは伸びあがつて食器棚を、いろ／＼な角度か

ら見てゐたが、遂に甲板士官の聲が爆發した。

『おい、これは何だ。』

『は。』

従兵長が一步前に出る。

『棚の底を見る。埃ほこりが一杯だ。こんなところを手を抜いてどうするんだ。巡檢までに掃除をして置け。』

『は。』

私は、自分が叱しかられたやうに、心臓がどき／＼した。いつも世話になつてゐる従兵長が小言をいはれてゐるのは、あまり氣持がよくない。

しかし甲板士官はこの室はその位にして、そこを出た。

『巡檢。』

と、伍長は又もや叫ぶ。すると甲板士官は通路をとぶやうに行つて、飛鳥の如く士官廁かはやに躍り込んだ。



○月○日(續)

甲板士官が士官厠かばずに躍り込んだので、私もやむなくその後を追ひかけて、厠の入口に立つて中を覗きこんだ。

『第〇分隊、異状なし。』

厠の中で、當番の分隊員が整列してゐた。

厠の扉は全部開かれてゐた。甲板士官は、矢庭に携帶電燈を照らして、水洗式すゐせんしきの糞壺へ自分の顔を突込まんばかりにした。まるで私たちがよくやる便所で反吐へびをつくときの恰好そっくりだ。

一つの糞壺がすむと、又次の糞壺を。こゝの當番兵もご苦勞さまだが、甲板士官は毎日かうして糞壺を覗いて點檢をするのであるから、更にご苦勞である。私は迂濶うくわつにも、あの毎朝用達をするこの糞壺が、甲板士官によつて黴かびくも丁寧ていねいに點檢されてゐることは知らなかつた。全く恐縮おそそくのものである。明朝からは、糞をするのにも、もつと敬虔けいけんな氣持でやらにやならんと深く期した次第であつた。全く勿體ないことだ。海を護る勇士の手によつて掃除をされ、そしてやがては海軍大

將にもならうといふ甲板士官の候補生によつて綿密めんみつに點檢されてゐる糞壺である。仇やおろそかで糞をひつては、尻の穴が曲るであらう。

厠といふと、きたないもののやうに思ふが軍艦の厠は非常に清潔である。それは右に述べたところによつても既に明かであるが、永い航海をするときは、厠は大いに清潔であり衛生的でなければならぬ。始末がわるいと、とんだことになる。ことに今は、重大なる戦時である。艦内衛生が特に重んじられるわけで、當番の兵も、殊更ことさら氣をつけて厠を綺麗きれいにしてゐるのである。

清潔にするわけは、もう一つある。士官厠は中甲板にある。こゝは艦内である。もしもこれを不潔ふけつにしておけば、臭氣しゅうきは艦内にひろがり、艦内生活を甚だ不愉快なものにするであらう。何しろ熱帯下の艦内は、室溫が手荒く上つてゐる。しかも夜になれば昇降しょうかう口もびつたりふさがれ、空氣の流通は非常に悪くなる。しかも戦速で走つてゐるのであるから汽罐きくわんから發するひどい熱は、およそ有りとはあらゆる物から揮發分をはきださせるのである。これを厠について考へれば、厠の不潔ふけつなるときには實に大變なことになるだらうことを何人も容易に想像できるであらう。さういふわけで、厠掃除は實に大任である。

甲板士官は、相當の時間を士官厠かばずに費したが、そのまゝ外に出た。別に文句もんくは吐かなかつた。



行き届いた廁掃除に、一點の非の打どころもなかつたのであらう。あとについてゐる私も、ほとと胸をなで下ろした。

『巡檢。』

と伍長の聲。櫂の棒が、とき／＼鐵壁にあたつて、かゝんと音を發する。

『第〇分隊、異状なし。』

水兵たちは、寢床の中に儀行正しく寢てゐる。たまには、すつかり寢込んで、自分の寢床の領域から太い脚を隣りへ出したりしてゐる。すると甲板士官がその脚を引張つて、ちやんと正しくしてやる。

上半身裸で寢てゐるのがある。

『おい。上半身に何かかけよ。』

甲板士官は、水兵の寢方までにこまかい注意を拂ふ。

かくて廣い艦内を、隅から隅まで足早にとつと走り廻つて點檢をする。あとについてゐる私は、いくたびか甲板士官の姿を通路の角で見失つて、まご／＼した。そのたびに伍長が携帶電燈を照らして、私を呼んでくれた。上へあがつたり、下へ下つたり、するぶん長い道程を歩いてす

つかり大汗をかき、ふう／＼と息をついてぶつたふれさうになつたとき、

『ではこれで終りました。』

と、甲板士官の聲。氣がつくと、いつの間にか私たちは、元の副長寢室の前に戻つてゐた。

(六)

○月〇日(續)

私は士官室へとびこむと、たてつゞげにラムネ一杯に冷却水一杯をあふつてやつと人心地に戻つた。

が、すぐそれに引續いて、副長の巡檢が始る。私はほつとする間もなく、副長のそばへいつて、

『今夜は、副長の巡檢にお供させて頂きます。』  
と挨拶した。

『どうぞ。』

と、副長は例のとほり柔和な笑顔を向け、



「さつきはどうでした。艦内に兵員たちが寝てゐるところを見られたでせう。」

「はい、よく拜見しました。水兵さんたちのご苦勞なことがよく分りました。闘ふ敵は米英濠軍だけではないですなあ。あの艦内との手荒い暑さとも、水兵さんは闘つてゐるのですね。」

「よく頑張つてくれますよ。去年の十一月に内地を出てからもう〇箇月、つゞけさまに熱帯戦闘をやつてゐます。さぞきついことだらうと思ふが、どういふものか不思議に病人が出ない。」

「平時に比べれば、相當出るのではないのですか。」

「いや、平時よりも却つて病人が少い。だから不思議なんです。われ／＼は今日あるために日頃から猛訓練をやつてきたわけだが、しかしいざとなつて、水兵たちがこれまで頑張れるとは思つてゐなかつた。全く日本人だけが持つてゐる精神力の強さですな。」

副長の言葉は、よく分る。私も前からさう思つてゐた。

彼等の居住は、士官とても同じであるが、人間の住むやうな場所ではない。大砲を積み、魚雷發射管を備へ、火薬庫を拵へ、機關を設け、それらの裝備の極く僅の隙間に、士官以下水兵までの居住區が作られてゐるのだ。どこの居住區でも、こゝはいゝなあ、こゝは室らしいと思ふところは一つもない。おや／＼こんな隅つこに士官の部屋が隠れてゐたか、おや／＼こんな隅つこに

水兵さんが寝てゐる場所があつたかといふやうな譯で、遠慮なくいへばどれ一つ人間の住むべき場所ではないのだ。しかも誰も不平もいはないし不満もない。これでもまだ自分が睡るにはちと廣すぎると云つてゐる者さへある。この辛抱づよさと謙虚さによつて、帝國海軍は遂に勝つたのだ。不平をいひ不満を唱へる處に、勝利は絶対に來ない。

『副長、巡檢であります。』

甲板士官が届けて來た。

『おう、よし。』

副長は、やをら腰をあげた、そこで私もそのうしろについて士官室を出た。前はすぐ副長寢室だから、そこが巡檢の起點である。

『巡檢！』

伍長は、既に先登に立つて露拂ひのやうな役をつとめてゐる。副長のうしろに私、そのうしろに甲板士官、巡檢順序は、さつきと同じであつた。

副長は、幅の廣い肩をゆらり／＼と動かしながら、極めて軽い足取りで巡檢していく。

さつき、甲板士官に叱られたところは、すつかりきれいになつてゐる。私のうしろで、甲板士



官の電燈がちか／＼と動いてゐるのはその再點檢である。

『巡檢！』

伍長の大きな聲は、銅板をぬけて海水までふるひ動かすやうだ。

副長は、甲板士官の見落してゐるところを何箇所か見つけた。兵員便所の一つの臭氣をもつと除くこと、米俵の置き場所の適當でないことなどを指摘して、その分隊と共に甲板士官も注意をうける。が、まづ大過なしであつた。副長も毎晩これだから、ご苦労さまである。

巡檢が了つて、私はまたラムネと水をあふつて上甲板にとんで出た。折から皎々たる月明だつた。新聞の字が読めるといふ月明だつた。私はひたすら脳を冷やすことに努めた。あゝ嚴然たる艦隊員……。

(七)

○月○日

新しい作戰命令が下つた。

陸海軍部隊協力の下に、ニューギニア東部の○○及び○○に對し攻略戦を展開することであ

つた。

私たちの第○戦隊も、その攻略部隊の作戰を掩護するやう命令された。

それがため、わが第○戦隊は、攻略部隊よりも遙か南方の海域にまで出動し、敵の海上兵力及び空中兵力に對し哨戒を嚴にし、若し敵部隊現れるならば、そのときは全力をあげて決戦に出づることとなつた。

尙、さういふ索敵攻撃部隊としては、わが第○戦隊の外に、○○○○部隊、○○○○戦隊、○○○○戦隊を始め、多數の兵力が参加することとなつた。

大戦雲は、また捲起つたのだ。

命令一下、あらゆる艦艇船機を網羅した大部隊が、灼熱の赤道を乗越えて、急遽ニューギニア島に新戦場を求めて斬込まうといふのであつた。

「第○戦隊は○月○日○○時、○○港を出撃せよ」

出撃の日は、あと三日だ。

腕が鳴る。胸が高鳴る。

こんどこそ乾坤一擲の本格的戦闘だ。いよ／＼こゝに覺悟を新たにしなければならぬ。



「おい、今度こそ出港前に手紙を書くことを忘れるな。この前のソロモン沖海戦ぢや、貴様手紙を書かんぢやつたと、手荒く後悔してゐたらうが……」

士官室では、また手紙の話が出た。

手紙！ 手紙！

私は極力手紙のことに、自分の心を觸れまいとしてゐた。内地を出發してから、もう三箇月以上になるのに、内地からは只の一本の手紙も來ないのだ。なるべく氣にしないであつたが、かうして今度こそ生きて再び基地に帰れるかどうか分らない戦鬪に出撃することとなれば、やつぱりそれを考へずにはゐられない。一體家ではどうしてゐるのか。

尤も、私の居所も、永い間不明だつた。しかしその後通信の届く筋もついて、それから四五日になる。だが遂に一通の手紙も來ないのである。やつぱり心残りだ。出撃まであと三日間。この調子では、とても來まいと思ひ、私は誰にも訴へることの出來ない寂しさに、ひとりくさつてゐた。

ところが、その日、晝食の時刻が來て、士官室の自分の席に坐つたところ、私は思はずうむと呻つて、目を皿のやうにして卓上を見た。

手紙だ。手紙が載つてゐる。私宛の手紙である。差出人の名前は、生憎裏側になつてゐて見えないが、私はその手紙をひつくりかへして見る必要を感じなかつた。なぜなればそれは見覚えのあるうちの女房の筆蹟だつたからである。

うちから手紙が來た。女房から始めて手紙が來たのだ。私の身體は硬直してしまつたやうであつた。

さあいよいよ手紙が來た。すぐ手に取つて封を破つて讀み下したいといふ心と、もう一つ別の心があつた。それは、よほど心を落着けてからでないと讀めないぞ、どんなびつくりすることが書いてあるかしれないからといふ恐怖の心であつた。私は二つの心の間に挟まつてひとりで苦しがつた。もちろん晝食など、半分以上皿の上に残してしまつた。

結局私は、他の士官たちの眼を憚りながら女房の手紙を二つ折にして、防暑服の胸のポケットに入れ、鈕をかけた。そしてさりげなく士官室を出た。

幸ひにも他の士官たちは、近づいたニューギニヤ作戦のことで熱心に討論してゐたから、誰も私の怪き振舞に氣のついた者はなかつた。



○月○日(續)

私は女房から来た手紙を、胸のポケットに入れ、急いで私室に戻つた。同室のC隊長は當分の部屋に歸つて來ないことが分つてゐた。

私は、ポケットから女房からの手紙を出した。そして机の上に置いた。置いたまゝ、私は腕を組んでいつまでも手紙の表をじつと見てゐた。

それでも、結局封を切つた。女房の手紙の内容は、別に恐しい記載は一つもなかつた。そしていつもの女房らしくなく、たいへんしつかりした事が書いてあつたので安心した。私がいつも心配してゐる病氣勝ちの二男も、まづ大したこともなくてこの冬を越してゐるらしい。讀んでいくうちに、私の胸の中には、安心の塊がいくつも出來た。その塊は私にすくなからざる元氣の素とはなつた。只一つ友達の弟の訃報は悲しかつた。

手紙の終りのところへ來て、私は思ひがけない不満にぶつからねばならなかつた。それは女房から私への宛名が、海野十三様と書いてあることであつた。

「ちえつ。」

私は舌打ちをした。それがきつかけで、私は抽斗からチャール持ちの紙を引張り出して、長と女房へ手紙を書いた。

お前の手紙は、私に安心を與へた。そして元氣をつけてくれた。この戦地と遙かに遠いわが家とが急に近くなつた感じである。——などと、書いたあとで、——しかし『海野十三様』は氣に入らん。お前は手紙を檢閲される場合を思つて、いやに四角張つた宛名の書き方をしたのであらうが、いらざる心配だ。檢閲に觸れるのは、機密事項だけである。檢閲される場合を考慮してなにも『海野十三様』などと、よそ／＼しく書くには及ばない。大いに感情を發露してほしい。今度からは、あれは嚴禁だ。昔書いてよこしたやうに、御許へとか、戀しき旦那様とか何とか、その邊大いに率直に書くがよろしい。もちろん檢閲官はそれを讀むだらうが、戀しき旦那様はいけないとは絶対に云やしない。只檢閲官は、これはやり切れんとハンカチで汗をふくかもしれんが、それは我々の知つたことではない。さういふ暑い目にあふことも檢閲官の役目の中に加算されて、適當なる俸給が與へられてゐることゆゑ、そんなことに遠慮するな——と、私は宛名にこだはつて、長々と意見書を認めたのである。後から考へると、そのとき私は相當昂奮してゐたらしい。



しかし無理もない。それが出陣以來三箇月餘で始めて受取つたうちからの手紙であつたから……。私は、その手紙を三遍読みかへして、抽斗の奥へ突込んだ。それから私は服装を正して上甲板へ上つていつたが、私の足取は非常に軽かつた。いや、自分でも始末に困つた位、顔がにこつて仕方がなかつた。

『おう海野さん。士官室で〇〇沖海戦の大本營發表を見られましたか。』

突然かう聲をかけてくれた人がある。ふりかへると、若きD隊長だ。丁度當直將校に立つてゐたところである。私とは、食卓がすぐ側である。この隊長のことを、私は『歌麿の繪から抜けだした若い衆のやうな青年士官』と形容したことがあつた。

『へえ、さうですか。私はまだ見ませんが、どんな風に發表されてゐましたか。』

私はたづねた。實は私は、あの海戦がどのやうに大本營から報道されるかと、非常に興味をもつて俟つてゐたのである。

『大體簡潔にまとまつた書き方をしてありました。そして採點が非常に辛いやうだ。まあ行つて讀んでごらんさい。』

採點が辛い。一體どんな風に書かれてあるのだらうか。

(九)

私は士官室へとんでいつた。そして黒板に書きつけられた〇〇〇〇沖の海戦に關する大本營發表を貪るやうに讀み下した。私は先頃急遽出撃南下したときのことどもを俄に思ひ出しながら、それを讀んだ。そして親しく體驗したあの海戦が、どんな風に大本營から報道發表されてゐるか、それは試験の成績發表に遭ふ生徒の如き氣持をもつて讀み下したのであつた。

〃大本營發表。

帝國海軍航空部隊は二月二十一日『ニューギニヤ』北東數百哩の洋上に航空母艦を含む有力なる敵部隊を發見、機を逸せず敵上空に殺到、敵戦闘機群と壯烈なる空中戦闘を交へその一部は猛然機體諸共體當りを以て敵航空母艦を大破、大火災を生ぜしめ他の軍艦一隻にも損害を與へたり

(註) 右航空母艦はその被害狀況より察し撃沈せられたるものと認められるもその終焉まで見届くるに至らざりしを以て沈没確實ならず



それが全文であつた。

私は一讀失望を感じた。それは大本營の發表が、私共の知つてゐるあの日の戰況報告に較べて甚だ内輪に報道されてあつたからだ。あのときわが航空部隊は、もつと大きな戰果を擧げた筈である。これでは死闘した勇士たちにどうも氣の毒だ。つまりこの大本營發表は（非常に點がからい）といふ印象を受つた。

たゞその後私は新聞電報を讀んで、稍胸がすーつとした。それにはこんなことが述べられてゐた。

「我が海鷲は二十一日ニューギニア北東洋上で我が本土空襲を夢見て出撃し來つた重巡を含む敵航空部隊を途中に邀へ攻撃、航空母艦に體當りを以て大破大火災を起さしめた外、敵に大損害を與へこれに徹底的打撃を加へその企圖を挫折せしめたが、更にその後の發表によれば我が海鷲はその際敵戰鬥機十機を撃墜した。我が方未歸還九機。而して右敵は集團攻撃法を採つてゐるので米艦と推定される。然して我が海鷲の斯くの如き勇猛果敢な體當り戰法は今回が最初で、如何に壯絶なもので有つたかは未歸還九機有るを以て知られる。敵が再び斯る企圖を有するとせば更に海鷲の體當りを覺悟せねばならぬ。」

この新聞記事中、特に私を肯かしたものは、「我が海鷲の斯くの如き勇猛果敢な體當り戰法は今回が最初で」とあり、また「敵が再び斯る企圖を有するとせば更に海鷲の體當りを覺悟せねばならぬ」といふ結びの一句であつた。まづこれ位ならば、勇士たちも以て瞑せらるゝであらうと思つた。しかしやつぱり、大本營發表の點の辛さだけは依然としてその儘私の胸に残つたのであつた。

だが、一步退つて考へると、わが大本營の發表は常に斯くの如く辛い採點をして、正確を期してゐることがよく分つた。あの輝かしい大本營發表の大戰果も、内輪に見積つた發表だとすると、實際の戰果は更に一段も二段も輝かしい成果を収めてゐることとなる。私たちは、本當はもつとその大戰果にびつくりしていゝのだといふ結論が生まれる。世界中に、一體どこの國がこのやうな謙讓な軍事發表をやつてゐるだらうか。これは只一つ日本海軍だけだ。さう考へてくると、私の胸には別の嬉しさがこみあげてくるのであつた。

うちの女房から始めて手紙が來たし、〇〇〇〇沖海戰の大本營發表も漸くあつて、私はこれから新作戦に臨むに當り、一應心残りになつてゐた事どもが解消したやうに思つたことである。

私は、新作戦行動の前に、今夜こそ熟睡して置かうと思ひ、蒸し風呂の中のやうな小室内のベッドに攀ち登つたのであつた。



## 珊瑚海を覗く

(一)

○月○日

遂に赤道を越えた。

私にとつては、これが三回目の赤道通過であつた。

いつも穏かな赤道附近であるが、どうしたものか、けふは氣象の御機嫌がよくない。空には鼠色の雲が低く垂れ籠め、海上は浪立ち、ぴゅーんと風が鳴つてゐる。

わが第〇戦隊も、けふばかりはかなりかぶつてゐる。他のいくつかの戦隊も、それ／＼思ひ思ひに軀を揺すぶつてゐる。驅逐艦などは全く氣の毒である。だがかういふ險惡な天候になつたので漸く戦闘氣分が出て來たやうに思つた。

私は、ロープが、びゅん／＼呻る艦橋に立つて、この南下して行く大部隊の雄々しき姿を何時

までも飽かずに眺めてゐた。何だか、私が司令官になつたやうな氣持がしてくる。悪くない氣持である。このとき私は艦橋の後部に立つてゐたが、そのこと反對の前部が、何だかさわがしくなつた。

何事？ と、思ふ間もなく、當直部員の怒鳴りつけるやうな聲。

『配置につけ！』

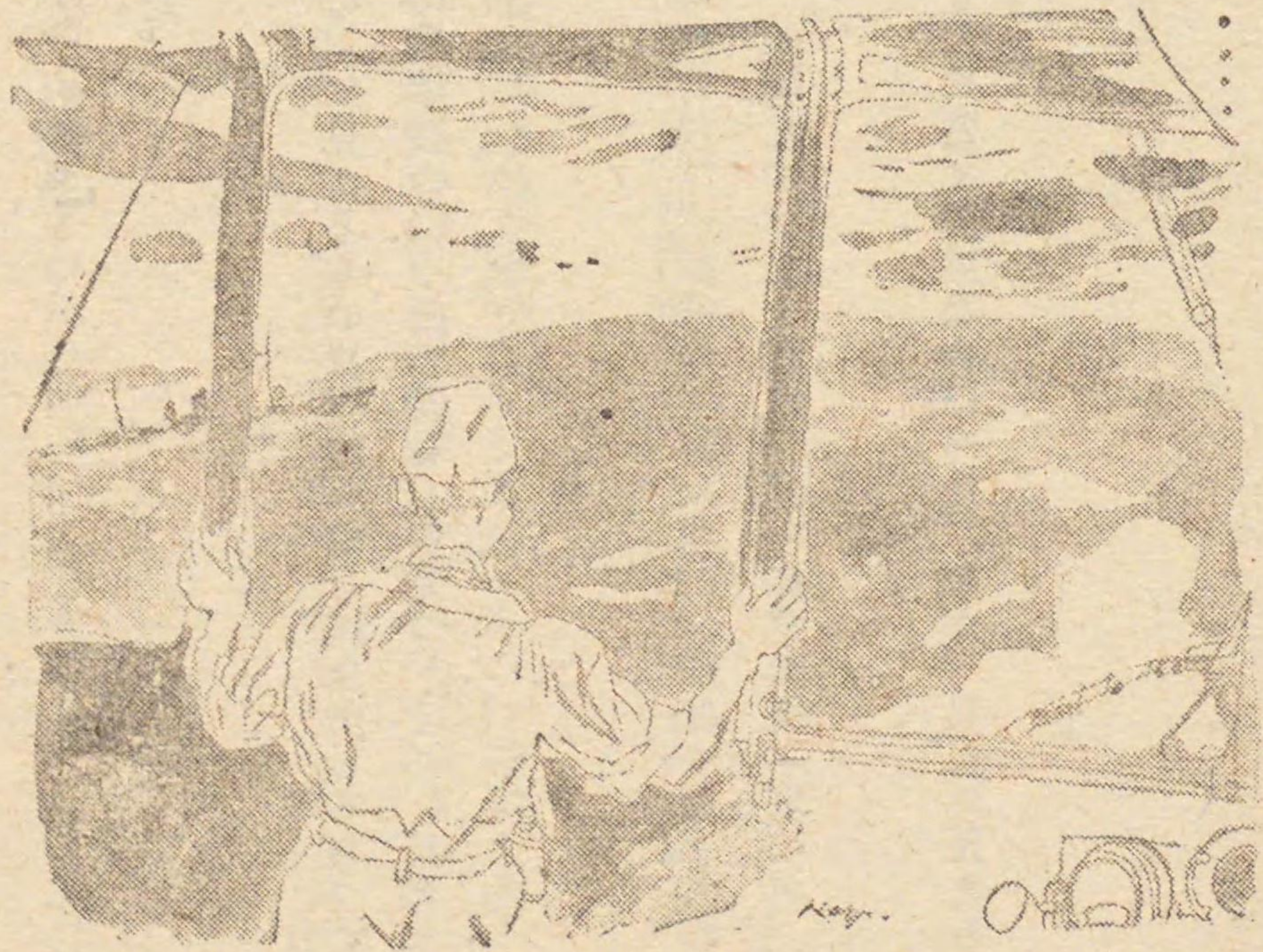
つゞいて、ラツパが鳴り響く。

すは敵襲！

私は、前部艦橋にとび込んでいった。

『敵襲ですか。何物ですか？』

もうすつかり物慣れた私は、當直の兵曹に言葉をかけた。





『潜水艦らしきものが本艦左舷前方に見えてをります。』  
さういつて兵曹は、手をあげて海面を指した。  
『なに、敵の潜水艦。』

私は、きつとなつて洋上を見た。しかし私の目に見えるものは、白い齒を剥き出して怒つてゐるやうな海面だけであつた。この浪では、敵の潜望鏡の引く白い痕も、ちよつと見にくく。  
『ふーん、うまいところを狙つて敵の潜水艦は現れやがつたな。』

私は舌打ちをした。

がた／＼と手荒い音がしたと思つたら、司令長官以下首脳部の士官たちが、鐵梯子をよちのぼつて上つて來た。艦橋はたちまち満員になる。配置についた士官は、直ちに双眼鏡を取つて、當直員の傳へる敵艦の位置を凝視する。

私もそれに倣つて自分の首にかけた双眼鏡を目に當てて度を合はせた。だが、私には見えなかつた。

『ふこだ、どこだ。』

『〇〇度です。距離は〇〇メートル。』

『今も見えるか。』

『見えとります。』

『俺は見えんぞ。どれ、そつちの眼鏡を貸せ。』

『は。』

士官が大きな双眼鏡にとりつく。

『見えますか。』

『うん、見える。生意氣な奴だ。しかしこつちが見つけたが最後、このまゝぢやかへしやせんぞ。』

驅逐艦が〇隻、隊列を放れて、矢のやうに飛んでいく。見てゐるうちに、その針路がきゆうと變る。どん／＼追駈ける。相當の遠方である。あれよ／＼と見まもつてゐるうちに、驅逐艦は小さくなつてしまつた。あんな遠方までいつてしまつて、洋上で迷兒になりはしないかと心配になつた。

『ちえつ、潜望鏡を引込めやがつた。』

『ふん、もう駄目だと諦めよつたか。折角こつちに詰めよつたのに、何にも仕掛けてこんのか。』



『まあ、ええよ。〇〇戦隊がよろしくやるぢやろう。』

## (11)

○月○日(續)

敵の潜水艦のおかげで、一時間ばかり手間どつた。

追駈けて行つた驅逐艦の中には一時姿を水平線下に没したのもあつた。

爆雷攻撃の音が、遠くから鈍い音をたてて一しきり響いてゐたが、やがてそれもはたとやんでしまつた。

それから暫くして、分かれの號令がかゝつた。配置についた總員は、汗をふきながら、その部署から引揚げた。

『どうしました。敵の潜水艦を、うまくやつけたのでせうか。』

と、私は艦橋から下りていかうとする戦隊機關長に訊いた。

『手應へはあつたらしい。しかし潜水艦の最後といふ奴は、仲々確認し難いのでね。』

この士官も、戦果を語るに非常に内輪であつた。

それにしても海戦といふものは仲々目では見られないものだ。なぜならば、それはたいへん遠方に於て取行はれるからである。況んや、水中に潜つてゐる敵の潜水艦を攻撃するときなど、全く見えないことが多い。ときにうまくいくと、潜水艦のタンク注水がきかなくなつて、ぽつかり浮き上るものもあるさうだが、さういふことは極めて稀にしか起らないものらしい。

南下艦隊の陣型が、元のやうに戻つた。

敵を追駈けて一時姿を消した驅逐艦もいつの間にかちやんと戻つて来て、隊列を整へてゐる。

海上はいよ／＼荒れて来た。右舷の方からしきりに眞黒い雲がこつちに迫つてくる。ぴかりと

光つたのは、不意打ちの敵弾かと思ひの外、それは雷鳴が始つたのであつた。

艦隊の針路を見てゐると、どうやらその黒雲の中に入つてしまひさうである。

スコールの脚が見えて来た。手荒く海面を叩きつけてゐる。いつもなら、總員スコール浴び方の號令がかゝるところであるが、つい今しがた敵の潜水艦が引込んだばかりだから、スコールを浴びてゐる遣はない。

冷い風がびゆ／＼と吹いて来た。いよ／＼スコールの来る前觸れだ。と、眼をつき刺すやうな

閃光、それからおつかぶさるやうに雷鳴が轟く。



こゝまで来ると元來、雷の好きでない私のことであるから、これ以上永く艦橋に停ることはやめにして、夜のやうに暗い鐵梯子を傳はつて下へ降りた。そして私室へ戻つたのであつた。

部屋には、C隊長がお先に戻つて、防暑服のパンツ一つで隅でござ／＼してゐた。

『何をしてをられますか、C隊長。』

と、私がすぐ上衣を取りながら云ふと、C隊長は、後向きに跣つたまゝで、

『やあ先生、とれましたぞ、随分とれましたぞ。』

『何がとれたのですか。』

『あぶら蟲です。私の仕掛けて置いたあぶら蟲地獄は大當りぢや。ほら、これをごらん下さい。』さういつてC隊長は、腰を伸ばすと、私の眼の前に大きな硝子壘をさし出した。

その壘は、水飴でも入つてゐたらしい大きい壘であつた。そして外側に細い紙が貼りつけてあつた。壘越しに底を見ると、なるほどゐるわ／＼、茶褐色の蟲がご／＼底を匍ひ廻つて周章してゐる。小さい奴もゐるにはゐるが、中には身の丈三センチにも及ぶ大きいのがゐる。

『ほう。随分大きいのがゐますね。こいつですね、私を噛んだ奴は。』

『さうでせう。この航空母艦のやうな奴に噛まれたら相當こたへますぞ。しかしこれだけ捕らへ

たから、今夜は安眠できます。安心しておやすみなさい。』

C隊長は、やさしく笑つて、その壘を机の足のところにそつと置いた。

(111)

○月○日(續)

室内のあぶら蟲は俄然恐慌を來たしたにちがひない。C隊長のつくつた硝子壘のあぶら蟲地獄に捕虜になつた航空母艦のやうに、でかいやつは多分あぶら蟲の總督みたいな奴であらう。此奴が、未だ歸らずといふことになれば、相當仲間の社會では、こたへるであらう。自然今夜から樂に寝られるといふわけである。

なほ、別にこしらへた『あぶら蟲叩き棒』といふのも、相當敵をやつつけてゐる。これは、私がついていつた原稿用紙のうしろに貼つてある厚紙をぐる／＼と捲いて扇形とし、その上にラバウルで持つて來た青い紐を束のところに幾重にも捲いたもので、これでびしやりとやると、命中した限りあぶら蟲は破碎されてしまふ。

しかしよく命中したのは始めのうちだけであつて、しばらくすると、あぶら蟲の方ではこの叩



き棒の備附に気がついたやうである。どうして仲間をそれを話すのか、私は動物學者でないからよく分らないが、常は机上をちよろ／＼と悠々匍ひまはつてゐるが、一度とにかく私なりC隊長なりがその叩き棒を手に取つたと見るや、その刹那にあぶら蟲は俄然快速力を以て逃げ出す。そして机上の地物(?)を利用することが上手だ。すなはち机上のインキ壺や双眼鏡や折疊んだ地圖や帽子や花壇の物蔭に、つつ／＼ともぐりこんでしまふ。こつちの手が餘程機敏に動かないと、みす／＼敵を逃がしてしまふ。また右に述べた地物の位置といふ奴が、武運に似た函數となつて入りこんで来る。始めは百發百中だつたのが、しばらくすると百發七十中ぐらゐに落ちてしまつた。

そこへいくと、C隊長のつくつた『あぶら蟲地獄』はなか／＼有効である。叩き棒では叩きそこなひが出来、その被害者が逃げもどつて仲間に対し叩き棒を警戒せよといひふらす公算が大であるが、あぶら蟲地獄に至つては、地獄の中に足を滑らして落ち込んだ奴は一匹として再び外に匍ひ出せないやうになつてゐる。これは内面の硝子壁がつる／＼してゐる上にあぶら蟲といふほどであるから敵の足はあぶらぎつてをり、兩方ともつる／＼してゐる内側は上れないのである。外側は匍ひ上れるやうに紙が貼つて道がつけてある。かういふわけだから、地獄の方は絶対に敵

の歸還者なしであるから有效なのである。

『實にうまい仕掛けですね。』

と、私は感嘆してあぶら蟲地獄の工作長たるC隊長にいつた。すると隊長は、にんまり笑つて、『いや、もつとたくさん捕虜が出来る筈ぢやが、昨夜は成績不良でしたわい。』

といつて、地獄の壇を、また隅つこの暗所にそつと置いた。

『今夜は一つ、冷凍鱒の頭でも貰つて来て、中へ入れて置いてやらう。さうすりや、もつとたくさん入るぢやらう。』

隊長は自信に燃えて、もう計略は密なるを以て尊しとすとはいはなかつた。

『先生。艦内でも明日から、あぶら蟲退治の競技會が始りますが、ご存じですか。』

『知りませんでしたね。』

と私はいつたが、あぶら蟲のことは、最近になつて急に大問題化したものらしい。

『競技會といふと、どうするのですか。』

『つまり各分隊に分けて、あぶら蟲を捕らへる競争をやるのです。捕らへた數を全員の頭割にして、數の一等多いのが勝つといふわけです。』



「なるほど、そいつは合理的ですね。」

「あぶら蟲の外に、蠅と鼠も捕らへるやう命令が出る筈です。しばらくやらなかつたから、うんと收穫があるでせう。」

うんと出ても、あんまり香かしくない收穫ではある。

(四)

○月○日(續)

不意に、手荒い音響が聞えた。と同時に、艦がずしん／＼と震動した。

(何だらう?)と、私はその場に立ち竦んだ。(敵の魚雷にやられたのではないか!)  
私はC隊長の方を見た。

C隊長は、急いで服をひっかけ、帽子と手袋をもつて部屋を出ようとする。しかし案外落着いてゐる。

『C隊長、今の震動は、あれは何ですか。』  
と、私はたづねた。

「あれは落雷ですよ。スコールの中へ入ると、よくこんなことがあります。もちろん本艦は安全装置があるから心配はないが、ちよつと機關部を見て來ます。」

C隊長は、さういひ捨てて、扉を開いて出ていつた。

落雷か、今のは! ずゐぶん手荒い音がするものである。

上甲板へ出ていくのが本當だつたけれど、私は雨衣がないので、上ればずぶ濡れになる。で、それはやめにして、いつもの溜り場である士官室へいつた。そこへいけば、いついかなる場合でも何かしら情報が得られるから便宜なのである。

しかし室へ入つていくと、士官たちは、別の話をしてゐた。誰も雷の話をしてゐなかつた。私はそばにゐた飛行長に話しかけた。

『え、さつき落雷がありました。よくやられますですねえ。しかしこつちは總鐵の艦で完全アースですから、落ちましても絶対に大丈夫です。』

飛行長は、酒を呑んだときの外は、いつも言葉數がすくなく、そして丁寧な口のきゝ方をする士官だつた。顔を見れば、六つか七つの男の子のやうな童顔をしてゐた。艦内でも屈指の科學者であつた。



なるほど總鐵の艦だから完全アースである。だから絶対に電撃の心配はないのだ。艦内で誰もさわがないわけがよく分つた。やうやく私の氣も落着いた。

士官室の話題は、來るべきニューギニア攻略の掩護作戰についてであつた。わが戦隊は、輸送船團及び攻略部隊と途中で一緒になるが、その前後は、すつと南方に進出して、海上に敵を求めることになる様子である。いつになく卓上に大きな海圖が擴げられ、士官たちはその上に指をたてて、しきりに水深を讀みつゝ、既に決定したわが戦隊の航路をチェックしてゐる。

『珊瑚海の入口までいつて、ちよつと中を覗ふことになるね。』

と、砲術長がいつた。

『いやあ、運がよければ、珊瑚海の中へ入つていくことになるのだ。』

水雷長が、青く剃りたてた自分の頭を、つるりと撫でていつた。

『運がよければ……か、お互に武運に拙いのばかりが揃つてゐるよ。俺のクラスは、俺一人をのけて全部金勳だ。これぢやクラス會があつても顔が出せんわい。』

砲術長は、鯨のやうな目を細くして笑ふ。

『わしのところもさうですよ。』



と、水雷長が長椅子に凭れて頭をうしろにことんとぶつつける。

『〇〇〇〇沖海戦のときにや、こいつはしめた、いよゝ武運が開けたかと思つたのに、それがあのとほり綺麗にすつぽかしを喰らつて、悄氣たね。』

『水雷長。そもゝ貴様みたいな武運の拙い者が本艦に乗つてゐるから、それで我々善良なる者まで、神様に見放されるのぢやないか。こつちはいゝ迷惑だよ。』

『はゝゝ、あんなことを砲術長が……。砲術長はわしの先輩ですぞ。砲術長のお蔭で、わしは武運に恵まれないのだと確信してゐる。砲術長こゝらで日頃の懺悔でもして置



かれた方がよくないですか。』

『ばかをいひなさんな。俺に關する限り、木で彫つたばかりの觀音さまみたいなものだ。更にけがれを知らずさ。懺悔すべきは貴様だよ。』

『それは誤認ですよ。わしと來たら、こいつは又鑄型からあげたばかりの佛さまみたいなもので、更にけがれを知らずです。』

『あは、もうええよ。今度敵にぶつかれなかつたら後で査問會を開くでしょう。』

(五)

○月○日

敵の領海内で朝を迎へること、けふで三日目。

總員起しは、いつもより三十分早い。敵の空襲に備へてのことである。

さきに占領地某港に在つたとき敵機一機が頭上に飛來、すつかりこちの艦隊勢力を讀まれてしまつたやうに思つたが、その後某港を出撃して以來も毎日の如く敵機は左舷後方より現れ、わが艦隊の陣容を窺ふのであつた。

だが、いつの場合も、敵機は敢て接近しようとはしない。

『臆病な敵ぢや。いつも主砲の射程外にうろくするだけで、入つてこぬ。』

砲術科の下士官たちは、甚だ不満のやうに見受ける。

『まあ捨てて置け。どうせあの一機では、こちの腹は膨れやせん。うまく行くと、あれが仲間をたくさん引張つて來るかもしれん。それを楽しみにて。』

さういつてなだめるのは、二十四貫の堂々たる布袋さんそつくりの砲術長であつた。

私はこの日朝來何か起るやうな氣がしてならなかつた。といふわけは、珍しく私は朝食の卓上で、花壇を引つ繰りかへして、そこら中を濡らしてしまつたのであつた。私の傍に席のあるC隊長もD隊長も、一時は椅子から立上るほどのさわぎであつた。だから今日は何か起りさうな氣がするのであつた。

闘ひに出てゐると、妙にこんな些細なことが氣に懸る。

敵の領海へ入ると、いつも急に楽しくなるが、これは一體どういふわけであらうか。これに反して、赤道を北に越えて、わが南洋の領海に入ると、何だか急に肩が凝つてきて、映畫館がはねて、外へつき出されたときのやうな氣持がする。やつぱり敵の領海の方がいゝ。殊にそれが、ま



だわが艦隊の攻略してゐない海域である場合、特に楽しいのである。

だが、わが〇〇戦隊が敵の領海に入つて、いよ／＼ニューギニア攻略部隊について索敵南下に移つてから今日までに、既に四回の『配置につけ』の號令がかゝつた。

そのうち三度は、敵機らしいものの姿を認めるとき、あとの一回は、敵潜水艦らしいものを發見したときであつた。

いづれの場合も、相當緊張して私は艦橋に立つたのであるが、しかもいづれの場合にも遂に敵襲といふほどのものを受けず、いつの場合も、敵の方が泡を喰つて遁走してしまつた。

バタビヤ沖とスラバヤ沖とのわが輝く戦果が傳へられたのも、つい兩三日前のことであつた。南島島へ猪口才な敵の空襲があつたさうで、小癩にさはつたのも、つい最近のことだつた。さうかと思ふと、わが方がこれからハワイを爆撃に征くといふ知らせもあつた。どの戦線も活潑に動いてゐる。それにも拘らず、ひとりわが〇〇戦隊の前には、いつまで経つても一向敵らしい敵が現れないのであつた。

『いよ／＼こいつはいかんぢやないか。』

と、機関長は御自分の山羊髯をむんずと掴んで、暗號電報の函を睨む。

『機関長、何を怒つてをられますか。』

F隊長が前に居合はせて、聲をかける。

『いよ／＼おれたちは失業ぢや。F隊長、ジャバ戦線の敵艦隊へ無電を打つてくれたまへ。』

『敵艦隊に勧告す、〇〇方面へ遁げて來れとやつて貰はうかい。』

『ほう、〇〇方面といふと、われらが今ゐるところですな。それで……』

『分つとるぢやないか。そこでわが〇〇戦隊が有難く御馳走になつてしまふのだ。さうでもしなければ、いつまで経つても、敵にありつけやせんよ。』

機関長は、くそ眞面目な顔である。

(六)

〇月〇日(續)

何事かを待ちうける心持は、私ひとりのことではないらしい。しかも、一向に事が起らない。上甲板へ出てみると、艦は快速を出して、ぐん／＼前のめりに走つてゐる。浮き雲が、手の届きさうな低い空に、きれ／＼になつて後へ動いていく。その向ふには、入道雲がいくつも、むつ



くり／＼頭をもたげてゐる。まるで入道雲の國へ来たやうな氣がする。艦だけが、すこぶる昂奮かうふんしてゐるのに、自然は癩しやくにさはる位、悠々としてゐる。

艦をちよつと放れると、浪も静かであるし、うねりもない。灼熱しやくねつの甲板を歩けば、自分の影が見えない。自分だけではない。士官が歩いても影はないし、水兵がとんで歩いても、更に影が見えない。太陽は丁度頭の眞上から直射ちやくしやくしてゐるのである。

(影さへ無くしやがつて、ばかにしてらあ。)

と、私は何だか太陽にさへ文句をいひたい氣持になつて來た。

影がないくらゐだから、上甲板に物蔭がない。物蔭がないから、涼をとることも出来ない。いや、物蔭はあつた。砲塔ほうたふのお尻しりの下に少々ばかり蔭が出來てゐる。そこへ椅子を持つていつて涼をとつてゐると、何だか眠くなつた。いゝ氣持でうつら／＼始めた。

が、間もなく目が覺めた。手荒く暑いので……。氣がついて見ると、いつの間にか全身に陽ひを浴びてゐる。とんでもないことだ。狐きつねに化かされたやうな氣がして、椅子から立ち上つた。そして上を向いた。さつきまであつた筈はずの廂ひましのやうに出張つた砲塔のお尻がどこへいつたか見えない。おや／＼どうしたのかと訝いぶかつてゐるとき、上から砲術長の落着いた太い號令の聲が擴聲器

を通じて聞えて來た。

『左砲戰……』

左砲戰？ すは敵艦隊が現れたか。さう思つて、びつくりして左舷前方を見たが、見えるは油のやうになめらかな海面と、そして相變らずの友隊の艦列が見えるだけ。目を甲板に移せば、賄方まかひかたの水兵がのんびりした顔で、澤庵たくあんの樽たるを擔いで前を通りすぎる。

『目標は驅逐艦〇〇に似たる假裝敵艦……』

なんだ、訓練が始つたのか。訓練が始つて、砲塔の尻がぐわ／＼と右へ廻つたので、物蔭が九十度動いて私の椅子が日なたになつたわけである。

闘たたかひながらも訓練を怠おこらない艦隊の勇士たちに敬意を表して、私は昇降口へいこうぐちを下りていつた。かくては士官室に入るほかない。

士官室では、盛んにラムネが賣れてゐた。

『もう珊瑚海さんごかいが見えるといふのに敵のやつはどうしたんだ。』

『この前はその邊にうろ／＼してをつたんだが、一體どこへ行つちまつたらう。』  
士官たちも御機嫌がよろしくない。私もラムネを從兵に頼んだ。